700
63

0054566000

0054566-000

700－63

蝦夷地に於ける和人伝説攷

深瀬春一・著

間瀬印刷所出版部

訂補再版
昭１１

AID

蝦夷地に於ける

和人傳說攷

深瀨春一著

700
63

蝦夷地に於ける

和人傳說攷

深潮春一著

700
63

昭和十一年二月十二日津輕要塞司令部許可濟

深瀨春一 著

蝦夷地に於ける和人傳說攷

間瀨印刷所出版部

昭和十一年三月十日 寄贈本

昭和十一年二月十二日
津輕要塞司令部許可濟

松前福山城大手

松前福山城鳳舞松

昭和十一年二月十二日
津輕要塞司令部許可濟

大野村意富比神社所藏　在名の鰐口

石崎村妙應寺秘寶　日持上人の木像

700-63

改版 蝦夷地に於ける 和人傳說攷の卷首に

BOOKLET

深瀨春一君先年「蝦夷地に於ける和人傳說攷」を公にして世に問はる。主として蝦夷地に於ける和人傳說を收錄せられたもので、只に手輕な趣味の讀み物としてのみならず、過去に於て北海道が和人と如何なる交涉を有したか、如何にそれが和人に映じて居たかを知る上に、甚だ有益なる資料たるべきものである。

されば其の發行せらるゝや好評嘖々として、初版忽ち品切れとなり、爾後久しく世の渴望に背いて居たところ、今回更に增補改訂を加へて再版に附せられるとの事で、余に所感を徵せられた。

北海道は古へに所謂蝦夷が千島で、近年まで殆ど化外の地として遺されて居た。勿論そこに鎌倉時代以來所謂渡黨の移住があり、內地の文化が漸次此の島に移入せられたとは云へ、それは僅に西南隅の一局都に限られたものであつた。のみならず、其の所謂渡黨なるものも、實は奧羽地方に於て日本化した蝦夷族の遺孽であつて見れば、之を內地人の拓殖として論ぜんには稍々不適當なるものであつたと謂はねばならぬ。

隨つて其の移住も全く內地人とは沒交涉の間に行はれ、少くも中央の人士にあつては、殆ど何等正確なる知識を有しないといふ狀態であつた。

彼の南北朝初めの有名なる信州諏訪大明神繪詞には、それを蝦夷が千島といふ事から、北海道には事實一千個の島々があるものと解釋し、當時の夷族たる渡黨、日の本、唐子の三類か、各三百三十三の島に占據し、今一島は渡黨に混ずなどと、甚だ滑稽なる記事を平氣で書いて居るのである。更に降つて室町時代に至つては、當時の京都五山の學僧蔭凉軒の如きすらが、將軍足利義政から、**エゾ**とは如何に書くぞとの下問に對して即答し得なかつた程にも、內地の學者は蝦夷地の事に就いて無關心であつたのである。

勿論渡黨は爾來引續いて今の渡島の一隅に占據し、つひに彼の松前時代の隆盛を現出するに至つたのであつたが、併しそれも**シヤモ**地と呼ばれた狹い範圍にのみ局限せられて、一歩其の以外に出づれば相變らず昔ながらの蠻爾たる蝦夷の住地として放置せられ、殆ど德川幕府末に至るまで其の儘に遺されたのであつた。又其の渡黨の住地たる所謂**シヤモ**地の事に就いてすら、文獻の其の沿革を記するもの殆どあるなく、松前氏以前にこゝに勢力を有した安東氏の事の如きも、漸く後の編纂物たる新羅之記錄の記事によつて、僅に其の一小斑を窺知するを得るに過ぎない程の心細い狀態に置かれて居るのである。

併し乍ら內地文化と蝦夷地との交涉は、實は其の由來頗る古いものであつた。すでに文獻の上にあらはれたものにでも、齊明天皇朝阿倍比羅夫の遠征の事があり、奈良朝の初には、こゝに渡島津輕津司といふ官司までが設置せられて、中央政府の官人遠くこゝに駐在し、其の官吏たる諸君鞍男（もろのきみくらを）の如きは命を奉じて靺鞨國情の視察に赴いた程であつた。

又先頃石狩の江別に多數の古墳が發見せられ、札幌山鼻校の後藤壽一君、北海道大學の河野廣道君等の熱心なる調査によつて、そこから內地の古墳に普通見ると同一の瑪瑙製曲玉十數個を始として、奥羽地方特有の蕨手刀二口、平泉中尊寺に夷酋惡路王の太刀として傳へられる型式の毛拔形刀一口、奈良正倉院御物中に見る樣な唐樣の太刀一口、其の他雜多の遺物が發掘せられた。是によつて少くも奈良朝平安朝頃の內地文化の遺品が、遠く此の江別の地方にまで入り込んで居た事が、實物から證明せられたのである。

すでに斯くの如き顯著なる事實が現れた以上、北海道と內地との交涉に關する從來の學說は、一部立て直しをせねばならぬ場合となつた。

今回の改版蝦夷地に於ける和人傳說攷が、如何なる範圍にまで廣く和人に關する新資料を收錄せ

られたかは、未だその實物を見ぬ以前に之を語る事は出來ないが、此の方面の研究は將來ます〳〵必要となつて來る事で、これは特に北海道に住せられて、調査の便宜の多い深瀬君の如き篤學の士に期待せねばならぬ。

冀くば本書が自今三版四版と版を改めてます〳〵其の資料を豐富にし、たゞに文獻に見ゆるもののみならず、和人文化の遺蹟に關する調査の結果をも收錄して、一層北海道と和人との關係を闡明ならしむる上に貢獻する所多からんことを希望する。

需めに應じて聊か所感を陳述し、改版に對する歡喜の辭に代ふと云爾。

昭和七年十二月八日

京都寓居にて

喜田貞吉

序文

深瀬春一君の「蝦夷地に於ける和人傳說攷」が、改訂增補せられて、再刊せらるゝ事となつた。此種の研究書に乏しい我が函館に於て、屹々として穿鑿倦まざる君の努力は大に敬服する處である。

傳說が、民族學、土俗學或は鄉土史學の上に、重要なる位置を占むる事は、事新らしく述ぶるまでもない。隨つて之が取扱ひ方も、只單に興味的に記述するが如きは、絕對に排さなければならぬ。

然るに由來蝦夷地と呼び、松前と稱さるゝ我等の鄉土は、和人乃ち內地人の獵奇的興味を刺戟するによき背景を有する關係上、此背景にかくれて賣文的著述の出版された事は、一再に止まらない。曰く何、曰く何と一々書名を擧げざるも、文才の豐かなるに托せて隨分荒誕無稽の印刷物が出版されて居る。

某の書の如きは、「蝦夷風俗彙纂」に骨を採り、勝手に皮肉を揑造したり、又新たに想を加へ西歐の傳說に採つて創作したるもの等を加へて傳說と稱して居るが、斯の如きは、傳說として價値なきは無論であり、それが爲めに却つて後進の研究に煩を殘すものである。然かも此種の俗書惡書が比

較的廣汎に行き渡つて居る事は遺憾である。

此に對し我が深瀨君は古き文獻に基礎を置き、加ふるに子弟をして古老の談話を採集せしめ、博引旁證を試み、忠實にその出所を明らかにしたる處に、本書の價値があると思ふ。乍然本書を以て松前傳說研究の完璧に近いものと斷ずるのではない。少くとも今日まで發表されたる北方傳說の成書として、その集大成されたる第一に推さるべきものであらうと信ずるものである。

將來版を重ぬるに當り、古老の談と雖も、古く記載されたるものは、事實をそれに採り、又古き記載と雖も、潤色の疑あるものは之を削り、以てその大成を期待するものである。

市立函館圖書館長
岡田健藏

例言

一、本書は先に北海函館師範學校々友會に於て　御大典記念の意味を以て發行したものである。然し此度、再版するにあたり、ほとんど改竄を余儀なくされ、且つ紙數の許す範圍に於て增補を行つた。

一、本書は主として、北海道に於いて和人の間に傳承せられた說話を蒐集し、それに聊か考證を加味した所謂松前傳說手引草の樣なものである。

一、其等傳說は古文書を經とし、函館師範學校生徒等が鄉里に於て輯めたものを緯とした。而して所傳の區々なるものは、之を古老に糺し、其根據ある說を採錄する事に意を用ひたが、淺學寡聞且つ推敲の時日が少かつた爲に、粗漏不備の點を免れ得なかつた。

一、引用古文獻は、出來るだけ現代語に意譯したり、抄譯したりしたが、それも甚だ拙劣で或ひは意味の取り違へもあらうけれども、文の流暢を主眼としたものとして讀者諸賢の寬恕を乞ひたい。

一、分類には嚴密な一定の標準とても無い。故に社寺緣起考の或ものゝ如きは、北隅靈異考の方に掲げた方がよいと思はるゝものもある。然し其等はすべて著者の便宜に從つたのである事を諒

察せられたい。

一、書中の蝦夷地といふのは、維新前に於ては、樺太をも含めた名稱であつて、單に北海道のみを指示したものでない。故に讀者も其心して批見せらるゝならば、幸甚のいたりである。

一、尙本書に記載するを得なかつた傳說は、近日「松前傳說拾遺」題下に編纂しやうと企てゝゐる。其際に於ける御後援を前以て御願ひしてをく。

一、最後に、序文を賜はつた文學博士喜田貞吉先生、函館圖書館長岡田健藏氏、御敎示を與へられた柳田國男先生、北海道帝國大學司書官高倉新一郎氏に万腔の感謝を捧ぐる次第である。

一、表紙の圖案は、松浦武四郎の東蝦夷日誌初編中の熊石番所あたりの繪を基として、靑柳尋常小學校の伊達幸太郎君の手になつたもので、一見此書の內容が想像せられる事と思ふ。

一、更に讀者諸賢に對しては函館未曾有の大火の爲、出版期日が意外に遲延した事を深く御詫びするものである。

昭和十一年春

著者識

目次

卷首に……文學博士　喜田貞吉
序文……函館圖書館長　岡田健藏
例言……著者識　一

一、アイヌ先祖考　一
犬戎傳說……一
盤瓠の話……三
八犬傳とアイヌ說話……七
人犬交婚說の因……二
アイヌの意味……三

二、蝦夷語地名考　一七
松前……一七
函館……二
椴法華……二四

熊石……二五

三、社寺縁起考

姥神社……二八
鮭供養……三〇
やらずの明神……三五
オシラ神……四〇
矢不來天神……四一
臼如來……四四
福山の阿吽寺……五〇
北村の地藏堂……五七
石崎の妙應寺……六二

四、北隅靈異考

錢龜澤の椽木樣……七〇
矢不來の赤松……七一
夜泣石……七四
善光寺の牛……七八

駒ケ嶽の馬……八八
蝦夷狐と貉……九〇
忠犬義犬……九七
鬼人形……一〇〇

五、發掘雜考

古碑……一〇四
鰐口……一〇七
泉貨……一〇八
石器土器……一〇九

六、義經傳說考

義經再興說……一一三
義經とアイヌ文字……一一五
義經と津輕海峽……一一七
義經と箱館・松前……一一三
來年崎と辨慶岬……一二四
義經神社……一二八

義經事跡　一三五
義經渡滿と靜　一四六
七、傳說分布表　一五〇
八、參考文獻　一五八

寫眞銅版

松前福山城大平　松前福山城鳳舞松　石崎村妙應寺日持上人の木像
大野比富意神社在銘の鰐口　江差法華寺　江差法隣堂　江差埠頭

蝦夷地に於ける和人傳說攷

一、アイヌ先祖考

犬戎傳說

抑々我が日本民族は鎖國以前に於ては、支那人に見る樣なあくどい人種的偏見はなかつた。それで何時でも我國に來る外人を歡迎し、これと共に外來文化をも悅んで受け入れた。此傾向が特に平安朝以前に著しかつた事は、古事記・日本書紀・續日本紀・新撰姓氏錄等によつて例證され得る所である。これはたとへ儒教や元寇の影響を受けて國民的自覺が濃厚になつた鎌倉時代以後に於ても窺はれる。然るに德川時代になつて鎖國政策が斷行せらるゝに至つて全く別途の趨勢を見た。則ち排外思想が我が國人を壓するや、時流に阿諛迎合せんとする漢學者の中には遙かに文化の進んだ歐米人に對しても支那人流の見方を以て呼ぶを常とした。例へば一般外國人を異人とか毛唐とかい現

ひ、特に**オランダ**人を南蠻紅毛人、**ロシア**人に魯鈍の魯の字を當嵌めたり、赤蝦夷又は北虜などと稱した。これは確かに支那の儒學者流の見解を以て異人種を蔑視した名稱たるを免れない。ことほど左樣に支那人は自尊心が强かつた。彼等に從へば、過去に於ては自國位文化の發展せる國は無いとの認信から自らを中華と唱へ、中華の化を受けない其他の外民族をば、東夷、西戎、南蠻、北狄に大別したり、或ひは、七閩、九貉、西羌、東胡に分類したりして一人で悦んでゐた。此等の字を見るに、

◇羌は西戎で羊に從ひ、南方の蠻閩は虫に從ひ、北方の狄は犬に從ひ、東方の貉は豸に從ふて造られてゐる。但し、東夷だけは大に從ひ大は人である。（說文）

◇赤狄は本犬種であるが故に字犬に從ふ。（前漢書引用許氏說文解字）

とあるが如く、東夷のみは人に從ひ其他は盡く其字が虫、豸、犬、羊に從つて造られてゐる。しかも赤狄に對しては其先祖は犬だと附會し、禽獸扱ひをしてゐた。實に支那は文字の國であるだけ、一つの文字よりして樣々な附會說を、もつともらしく述べて少しも恥じる所がない。しかも、犬戎傳說の發展經路の如きは好箇の例である。これには、藤澤衞彥氏が「變態傳說史」で說くが如く、犬も最初は人間であつたといふ原始說話と、犬は元來淫獸であるといふ印象と、忠義なものであるといふ實話とがその構成要素であらうが、予の見る所では矢張其主要點は文字にあると信ずる。

盤瓠の話

扨て犬戎傳說の原形とも思はるゝのは、前漢書注の「山海經」に窺はれる

◇黃帝は苗龍を生み、苗龍は融吾を生み、融吾は弄明を生み、弄明は白犬を生む、白犬に二牝牡があつた。是が犬戎である。

右文中の白犬は人か犬か明白ではないが、二牝牡に至つては犬だと觀察される。而して支那のみならず日本に於ても古來白犬は人間に近いとか、或ひは、白犬が人間に化したとか云はれてゐる點より見れば、該記事の白犬もどうやら犬と緣があるらしい。兎も角此說話が前に揭げた「許氏說文解字」をして大膽にも赤狄は本犬種と斷定せしめるにあづかつて力あつた一因ではないだらうか。しかし此は明言の限りではないが……。此傳說は「搜神記」で更に進展の域に達してゐる。

◇昔帝嚳高辛氏の時房王といふ者が亂をなし、國家を累卵の危きに臨ましめた。帝は大いに宸襟を惱まされ、乃ち天下に勅を下されて、

「若しも房氏の首を取つて來た者があつたらば金千金と美女を與へやう」

との事であつた。しかし群臣達は房王の兵勢の强盛なのを見ては流石に誰れ一人われこそはと進

んで行こうといふものがない。所が帝に盤瓠と名づくる犬が有つた。其犬は五色の毛並で常に帝のお側を離れることがなかつた程であつた。しかるに帝の一言によつてか忽然として姿を消して三日以上經つても其行衛がわからなかつた。帝も非常に之を怪まれてゐた。その間にあつて一方盤瓠はひた走りに走つて房王の許に赴いてゐた。房王は此犬を見て頗る悅び、左右の侍臣に向つて

「どうだ高辛氏も亡びるに相違ないぞ、何故なればかゝる畜類でさへ長い間育てられた主人を棄てゝ來たではないか、さあもうこうなつたら自分の天下だ。」

と云つて房王は大宴會を催し且つ犬の爲に歡迎の**オーケストラ**を奏せしめた。かくて歡喜に宇頂天になつた房王はしたたか酒を飲んで醉ひしれて前後不覺に臥して仕舞つた。この隙に乘じて、其犬は猛然後足を蹴つて房王の咽喉の邊に嚙みつき、蠻勇を振つて王の首を喰ひちぎり、帝の許に走せ歸つた。帝は盤瓠が房王の首を咬へて來たのを見て大いに悅び、其功を賞し、其勞を犒ふ意味を以て肉の粥を與へてやつた。然るに犬はそれを口にしやうともしないのみか、一日間を經て帝が優しく呼びかけてもその塲から起上らうともしない。此不平滿々たる樣子を見て帝は戲れに、

「どうしてお前は食事もしなければ又呼んでも來ないのか、恐らく朕が其方に賞與を與へないのを恨んでゐるのじやらう。では前にかけた物を褒美として吳れてやらうが、然しお前はきつと受けるかどうか。」

と問はれた。此一言を聞くや盤瓠は跳ね上り尻尾を前後左右に振り欣喜するが如き樣であつた。それで帝は盤瓠を會稽侯に封じ、美女五人に會稽郡一千戸を與へた。後盤瓠と美女達の間に三男六女が生まれた。しかし男の子達は人と異る所はないが只犬の樣な尾を持つてゐた。其後此子孫は益々繁殖し、犬戎國と號するに至つた。現在の浙江の土蕃は乃ち此盤瓠の遺種であると。此傳說は後漢書南蠻傳にあつては大体同じであるが。犬は犬戎の祖でなくかへつて南方の武陵蠻の祖になつてゐる。重復の樣であるが後の爲に左に載せる。

◇昔高辛氏の時犬戎が寇をした。帝は其侵暴を憂へて征したが勝利を得る事が出來なかつた。それで天下の勇士を募集し、能く犬戎の吳將軍を倒し得た者には、黃金千兩と邑萬戸を與へ且つ美しき皇女を妻として授けやうとの事であつた。所がそこに五色の毛並をした盤瓠といふ犬があつた。犬は勅令を聞くや直ちにどこかへ行つたがやがて一つの首を咬へて帝の闕下に還つて來た。群臣怪んで之を見れば乃ち吳將軍の首であつた。帝大いに喜び給ふたがさて考へられるには何せ

相手が畜生故に人間の女を妻とすることも又諸侯に封ずるわけにも行かないから、一つ衆に議してからの事にしやうと兎角の言葉もなかつた。すると側にゐた皇女はいやしくも皇帝が一度下された勅を違へる事は出來ないと思ひ、自ら行かうと云ひ出した。帝も止むを得ず彼女を盤瓠に與へられた。犬は女を手に入れるや欣喜雀躍彼女を背に負て南山なる石室の中に走り入つた。そこは今の辰州盧溪縣の西武山の山腹で頗る險絶人跡未踏の境であつた。彼女は今迄着てゐた衣服を解き去り僕鑿の髪を結び獨力の衣をまとふた。一方帝は彼女の行衛を悲しんで臣下を派して彼女を尋ねさしたが、使者はいつも風雨や地震やに妨げられて其石室に行くことを得なかつた。かくて三年の星霜を送る中に彼女は六男六女を生んだ。盤瓠が死んだ後子供等は木皮や纖維を織つて衣服を作り草の實を以て染めなどした。しかも彼等は五色の衣を好み、其服にはいづれも尾の樣な形が存してゐた。後皇女は帝の許に歸り一別以來の物語をした。帝は大いに好奇心に驅られ使を送つて彼女の諸子を呼び迎へた。彼等の衣裳は斑模樣があり。その言葉も異つてゐた。彼等はとかく平地を嫌ひ、好んで山壑に入るを常とした。爲に帝も其意を掬み名山廣澤を與へられた。彼等の子孫は後繁殖して蠻夷と號した。これが今の長沙の武陵蠻である。

八犬傳とアイヌ傳說

以上の犬戎傳說や武陵蠻傳說は我國にも輸入され、遂に德川時代に至つて瀧澤馬琴の手によつて「南總里見八犬傳」となつて一大飛躍をなした。八犬傳は勿論前者より其暗示を得た事は前述の記事と八犬傳第一、二輯を比較して見ても明かである。則ち一例をあげるならば、

(搜神記)	(後漢書)	(八犬傳)
高辛氏	高辛氏	里見義實
房王の亂	吳將軍の寇	安西景連の叛
盤瓠	盤瓠	八房
美女	皇女	伏姫
會稽	武山	富山
三男六女	六男六女	八犬士

となつてゐるが如き相違があるが大体八犬士誕生の經路は頗る似てゐると云へやう。但し注意すべき點は、流石馬琴は人犬交婚說をば採用せず、伏姫が自刄した時その痍口から閃き出でたる白氣が姫の襟にかけたる水晶の珠數を包み、その珠數中の八つの大珠が四方に飛散し、これが八犬士を出

せしめる主因となつたと巧みにごまかしてゐる。とはいへこれだけで八犬傳の趣向は全部彼の獨創だと斷定する譯には行かない。況んや彼が「義實怒りて八房を追はんとする圖」の下欄の引用文は後漢書並びに五代史なるに於てをやである。此他彼が八犬傳執筆に影響したのは**アイヌ**先祖に關する一話であらうとの說が岡田健藏氏や高倉新一郎氏の口から洩れてゐる。それは犬が**アイヌ**の先祖であるといふ傳說である。則ち「蝦夷島奇觀」や「蝦夷葉那志」等によると、沙流の山奥の夷人**ヤリハル**から聞いたと云ふて次の如き說話を揭げてゐる。

◇此蝦夷が島は昔島造りの神が造り給ふたものであつたが其後いつとなく其神は去られてしまつた。それからは神の跡もなく人とても住まなくなつた。其頃南の方神の御國から一人の女神を空船に乘せ奉つて此島に流された。運よく女神は靜內といふ所に漂着したが、其船は或岩角に衝突して破壞するに到つた。と其の中から黃金・白銀・珠玉・器物・錦帛等其外種々の品々が山の如く出た。女神はどこか雨露をしのぶべき岩窟でも無いかと、四邊を見廻されたがこれぞといふのは惡憎見當らない。この方は元來雲上人の事であつたから家を造る巧みも田を耕す事も種蒔き培ふ業も知り給はなかつたので、今は只積來つた食物の盡きる限りと覺悟されてゐると何處ともなく一疋の雄犬がやつて來た。其犬はつか〳〵と女神に縋付き、さも懷し相な感度でしきりに尾を

振り、終には其袖袂等を啣へてどこかへ連れれて行かうとした。女神は引かれるが儘に從つて行くと、大きい岩窟の內に導かれた。犬は洞門に蹲踞して守つてゐるのであつたが、折々は山に到り、木の實や草の實などを啣へて來たり、又或時は女神を岩間の淸水の有る場所へ引いて行き飲料を知らせたりした。爲に女神も此犬を賴みにして飢渴の憂目にも逢はず無事に月日を送つてゐる中に何時とはなく御腹がふくれて來た。女神は何か毒にでもあたつて病を得たのだと思ひ、どうかして治療を施さうとしたが醫師とてもない邊土とて是非なく其儘にして置いた。丁度十月目に不思議や男女二人の子を產み給ふたので自らの衣物をもつていろ〳〵と養育される中にその子は日每大きくなつた。然し其子等はいつも跳足で山野を斷歩き河岸を走り廻つたり岩間を傳ふたり又は樹木に登つたりする事が尋常の人間業ではなかつた。やがて女神は持つて來た衣物もなくなつたので自ら**ニカツブ**と云ふ木皮を剝ぎ是を水に晒し紡績して木皮布を製造され、**アツシ**と名付けられた。此**アツシ**を裁縫して二人の子の衣服とした。又食事は彼の犬が怠慢なく齎すので別に心配なかつた。此二人の子が長じてより其問に子を產みそれから後は其子孫が此一島に榮へる樣になつた。

かくの如く犬と女神とから產まれたが故に**アイヌ**と云ふのであると。

けれどもこれは大内余庵が「東蝦夷夜話」の中で、

◇こは素より疑はしい說で取るに足らぬ。又蝦夷地の人此時より播殖したといふならば犬も共に漂着したのであらうか。唐土の昔高辛氏が少女を以て倚ひ置いた盤瓠と云ふ犬に妻合した。所が三年の後六男六女を產んだ。其子達は山壑に入るのを好み、平野に居るのを嫌つた。高辛氏は其意に隨つて名山廣澤を賜はつた。其子孫は後に益々繁殖したので蠻夷と號した。余が思ふに後人が此等の話を以て蝦夷地の**オキクルミ**に附會したものであらう。

と述ぶる樣に支那傳說と**アイヌ**傳說を巧みに揑上げたものであらう。其例證として、古川古松軒は東遊雜記の中で、

◇蝦夷地へ度々行つたものの物語は何れも奇說が多い。則ち蝦夷人の元祖を尋ぬるに、幾千年以前に北方滿洲の方から流船在つて死に殘りし婦人が此蝦夷島に上り犬と夫婦となつて數人の子を產んだ。これより人が此地に繁殖するに至つたとの事である。或日本人が蝦夷地に行つて戲談に此國は男の先祖は犬で女の先祖は公家の官女だとの話だが本當かと問ふと、男の蝦夷は大いに恥らつて答へなかつたが女の方からその樣に申し傳へると答へたと云ふが甚だ以て滑稽な話だ。

と報じてゐるが、これは著者が松前で聞いた事で、話手ば勿論松前人と思はれる。が兎も角天明年

間には松前邊ではそろ〳〵アイヌの先祖は犬と公家の官女だとの說が起らうとしてゐたらしい。又山崎半藏蝦夷拔書中には、

◇**ソウヤ**の酋長**シユリケン**は紀年七十余で頗る人々より尊敬されてゐる。彼の言に、大祖を**シヤマイクル**神と云つて天より降り玉ふた一神女であつた。女神は大地と共に生れた**フルゲフ**と云ふ神獸と相逢ふて終に夫婦と成、男女數多を生んだ。又**ホロベツ**の長**セタレツフ**の言に、昔何國よりとも知れず洞木船壹艘が漂若した。其時**フルゲフ**と云ふ神獸があつた。これは金の角と爪をもつて銀の毛並で形は鹿の樣な獸であるが、頗る慈悲心に富んでゐたので、彼は其船を咬被つて見ると天女の樣な姫君がゐた。それでこれをば憐み船より上げ食事を供養し、雨露を凌ぐ場所を作り相勞り慰めてゐる中に情意投合して遂に夫婦となつた。其娘を**シマヤイクル**と稱へ數多の子を產み、夫より追々繁殖するに至つた。

と傳へてゐる。此の文によると寬政前後にかけては和人の餘り入り込まぬ地方にあつては、神獸と外來の女性との間から**アイヌ**が生れたといふ說が行はれてゐたと考へられる。

人犬交婚說の因

神獸を以つて犬に決定してしまつたのは、第一には彼等**アイヌ**が犬を愛用する所からである。こ

れは、明治二十五年頃にあつても尙誤解に導く有力な動機であつた。則ち北海道新聞附錄の**アイヌ**の中に、

◇今**エトロフ**嶋に「**アイヌ**」人高城重吉氏あり、其の**アイヌ**の祖先を犬なりとの傳說を信ずる者にや大に犬を愛し六五十頭の群犬を飼養せり。渡邊北海道長官巡視の際此の談を聞き高城氏に面會の際語りて曰く、犬も亦甚だ人に功ありと、又以て「**アイノコ**」の口碑ある證とするに足る。

と見ねてゐるが、明治にあつてさへこうした結論を下す人があつた位故、幕府時代の淺薄な出稼人達は、彼等**アイヌ**が馬よりも犬を使役するのを見ては、人犬交婚傳說に附會するのは有りうべきことである。

第二には鎖國によつて一入增長された異人種侮蔑の感念である。則ち古くは彼等を蝦夷の名を以てした。之に對する德川時代の學者の解釋が面白い。例へば本居宣長の「古事記傳」には、

◇蝦夷は延美斯である。名義は身に凡て長き鬚の多きを以て鰕に准らへたるものだ。

といひ、又荒木田守長の「東北夷考」には

◇惠蘇は犬醜と罵りたる島名であらうか犬を惠奴と云ふ犬は和名抄に惠奴また狗尾草を惠奴久佐と訓む。今の島人の狀を開くと其人の容姿は犬にひとしく寒暑とも男女同樣の**アツシ**の服一ッを

着て冷暖も知らず夜は濱の砂を堀りて輪の如くなつて寢る。食事は魚類を主とし小兒の啼く時は魚油をのませる。すべての事犬に異る事がない。顏ば人の樣だが目は犬の如く顏丸く色合まで犬に變る事がなく又其性までも犬の性を得たとの事である。

と論じてゐるが、アイヌと犬とが何等かの關係があるとの先入感念より發してゐるらしい。この樣な蔑視よりして明治の聖代に至つて迄も蝦夷とか土人とかいふ賤稱が屢々用ひられた。

第三はアイヌと國語の犬といふ音が頗る類似してゐる點である。かの「津輕一統志附錄」に於て寬文九年飛脚船の船頭名を、

◇萬五郎犬　舟六人乘　林藏犬　舟三人乘　萬五郎逢犬　舟四人乘

等とあるが如く、明かに**アイヌ**を逢犬と書いてゐる程であるから、德川時代人が逢犬或は犬といふ字よりして人犬交婚說に附會せしめんと試み勝ちであつた事は想像に難くない。

第四は古くよりわが國人間にアイヌは多毛にして不潔な者で人類より寧ろ獸類に近いと傳へられてゐた爲である。

アイヌの意味

大体以上の樣な原因から、**アイヌ**は犬と人間の女とより產れたと云ふ說が、蝦夷地への出稼人達

の口から中央に流布するに至つたのであらうが、女を日本の姫君と見なしたのは何時頃からかと云ふに、予の知り得る範圍では寛政頃からである。其理由とする所は、まづ村上島之丞の蝦夷島奇觀以前の文献には悪憎日本人と明記したのは見當らない。則ち天明八年の古松軒の東遊雜記には、

◇何國より流れ來るともなく官女とおほしき婦人（卷九ノ中）

◇北方滿洲の方より流船ありて死に殘りし婦人（卷十）

◇日本人蝦夷に行つてたわむれて云ふのに、此國は男の先祖は犬にて女の先祖は公家の官女なりと云ふが誠かと……（卷十）

と述べてゐるが、右文中の公家の官女といふのはわが日本の公家の官女を指したものとしても、それはわが出稼人の或者が戯談に言つたものに過ぎないから、たとへ日本人と稱するに至つた萠芽であつたとしても、まだ一般に行はれてゐたといふ事は出來ない。次に寛政十一年蝦夷地に赴きし山崎本立の「蝦夷日記抜書」には、

◇天より降らせ給ひし一神女**シヤマイクル**。

◇何國よりとも知れず漂着せし天人の如き姫君、其名を**シヤマイクル**と稱に奉る。

とあつて、まだ宗谷や**ホロベツ**方面には公家の女といふ事は云はれてゐない樣だ。かへつて**オキ**

クルミや**シヤマイクル**の傳說に近い。これを以て見れば天明より寛政にかけては**オキクルミ・シヤマイクル**て傳說が日本人によつて、人犬交婚說に揑造されつゝあつた過渡期であつたかと思はれる

次は明和以來魯人の千島侵略が年と共に明かになるにつれ、遂に天明年間幕吏の蝦夷地調査が行はれ、彼等を經てアイヌの傳說が朧げながら識者の知る所となるや、蝦夷人を懐柔する政策上彼等の先祖を日本の官女とする事は頗る有功だと考へられたが爲であらう。かの村上島之丞が寛政十二年になる「蝦夷島奇觀」の序文にも、

◇然るに津輕郡外ヶ濱宇鐵邑は五六十年前まで蝦夷の容貌であつたが領主命じて王化に服せしめた。今は只渡島の蝦夷ばかりが左衽跣足で言禮衣服がちがつてゐるのが遺憾である。それも寛政十一年の春將軍の嚴命で敎化する事につとめたので毛夷も稍々服した樣だ。

と記してゐる點より窺ふに、著者は明かに幕府の蝦夷懐柔政策を意識して、ことさらに蝦夷開國傳說を圖錄し、以て蝦夷人はわが日本の姫君より生れたが故に、わが國に屬すべきものだと力說したい腹があつたのではなからうか。而して該書が當時の識者より珍重せられ、復寫に復寫を重ねてゐる中に次第に彼の說が世上に流布され、博覽强記の馬琴の目に觸れるに至り、遂に彼をして八犬傳の發端を書かしめる何らかの動機となりはしなかつたかしら。尙高倉新一郎氏はかつて昭和三年

七月以來「瀧澤馬琴翁と蝦夷」といふ題下に彼の手控なる「風聞語」を紹介され、寛政元年既に蝦夷に對する知識があつた事が肯定せられる以上、馬琴が蝦夷地の傳說を全然未知であつたと誰れが斷言出來やう。がしかし前述のアイヌ先祖傳說がはたして馬琴の八犬傳と如何なる關係があつたがどうかは後日の問題として、予はアイヌ先祖に關する和人間に流布せし人犬交婚說はアイヌと彼等の名稱より發し、其先祖が犬と女となり、寛政頃より女は日本の姫君と喧傳せらるゝに至つたものであらうが、實際犬とアイヌは何等の血緣もなく、アイヌといふ言葉は古くは板倉源次郎が「長者」の意味に解し、近くは**パチユラー**氏が「彼等の一人稱」だと述べ、金澤博士が「人間」と說かれた樣に、決して賤しい意味を含まず、かへつて善い意味の方に用ゐられるのである。

二、蝦夷語地名考

開國以前に於ける北海道の地名はほとんど**アイヌ**の附したものである。しかもそれらは、地勢、風土、動植鑛物等に因んでゐる。故にそれらの地名を和譯するならば、大略其地の形勢狀況を覗ふ事さへ出來るものが少くない。然るに和人の移住が盛んになるにつれ、其地名が錯亂し、且つ勝手な漢字を當嵌めて無理に日本化してしまつた。それと同時に衒學者的傾向の濃厚な輩はしたり顏に轉訛された地名に基いて、奇怪な附會說を唱へる者さへ出て來た。余はその適例を示して見よう。

松前

松前の名は崎に大松があつた所より起きたとの說がある。

◇松前の名は今の法華寺の有る所の西南の崎に大松があつて、其枝が西南の麓に垂れてゐた。それで町を大松前、其港を大松前の津、民家の並んだ所を直に枝ヶ崎と呼んだ。

（松前志）

松前

この樣に松があつたからとの見解に對し深く贊意を表したのは市川十郎である。

◇或說に昔は**マトマヘ**と言つて松に非すとするが、**マト**は**マツ**の通聲で猶松を言ふ。亦一說に韎鞨の訛音なるべしとするは殊に僻言である。思ふに**マツ**は松樹、**マヘ**は前なる事は勿論である。蝦夷は松のない國であるからして**マツ**をば松といふ事は出來ぬと言ふものもあるが、蝦夷には松がないとは言へない。凡そ**カラフト**の奥迄も五葉松は頗る多く、南方には所々の山中に二葉の松も少くはない。しかも後に移植したものと考へられぬ。故に松前は松の並樹などが有つた爲に松前との名が出たので、今福山城の外廓の壘山に喬松枝を垂れ陰を覆ひ靑々としてるのは、伊豆守慶廣が慶長五年丘阜を刪夷し營砦を構へる時、其以前より有つた嶺松を其儘殘し置いたものだ。すべて山に据る城堡の制は前より有る喬樹を以て蔽ふもので、新に大木などを植へはしない。それ故、今ある松は千載不拔の根幹である、又前といふのは國の表となる所に常に名づくる例になつてゐるのだ。（蝦夷實地檢考錄）

と論して、該博な知識を傾けてゐるが、市川十郎は前田夏蔭の校訂を經て此書を公にしてゐる夏蔭は有名な國學者で、しかも彼は愛國の赤誠からとは云へ、實に無理な曲筆をあへて行つた男であつた丈けに、

◇夏蔭按するに、松前といふ地名は古へ津輕より渡り着く津頭に松の大樹があつた事より其處を松前と唱へた。後それが地名となり、又小松前といふ地名も出來たといふが、此說は古傳と思はれる。他の說はいづれも宜しくない。（蝦夷實地檢考錄註）

と斷定を下し、愛弟子の說に聲援を與へてゐる。然し彼等は心の中ではこの意見がこぢつけである事を悟つてゐながら、わざとらしく主張したものか、それとも松前志を著はした松前廣長自身の批判を見なかつたのではないかと思はるゝ點もある。然るに廣長の說は如何といふに、

◇今、松前の號があるのは昔夷人が**マトマヘ**と言つたのを、南岸の山上に大松があつたので建久正治の頃からして松前の字に書き改めたのであらう。（夷酋列像附錄）

と述べてゐる。これによつて見れば、**アイヌ**人達は**マトマイ**と呼んでゐた。それに大松があつたので和人達は**マトマイ**といふよりは目出度意味をも含めて松前と改めたといふ事になる。これは肯定すべき充分の價値を存してゐる。何故かなれば、鎌倉時代の末期に書かれたと考へられる「諏訪明神緣起繪詞」には、

◇蝦夷が千島といへるは我國の東北に當る大海の中央にあつて、日の本、唐子、渡黨の三類各三百三十三の島に群居してゐる、今二島は渡黨に混入してゐる、其中に宇酋利鶴子州と萬堂字

松前

滿伊犬と言ふ島などがある。（續群書類從本に依る）

と見ゐるが、吉田東伍博士は萬堂宇滿伊をば後世の松前に擬せられた。しかもこれに對して多くの學者が肯定してゐる所よりしても、原名は**マツマイ**でなく**マトマイ**たる事において異論は無いと信ずる。又、寛政の末年蝦夷地を調査したかの山崎本立も、

◇松前御家中の言に城下の地名もと**マトマイ**と唱へた由であるが、開基の君が住はれる樣になつてから音が似たる所から松前といふ文字に書改めたのであると。然し其以前より松前の名が有つたかどうかは委細にわからないが、古代の書物に的前ともあるからして、元來蝦夷の地名であらう。

と論じ、尙永田方正氏が、

◇松前は原名を**マトマイ**と言ふ。**マツオマイ**で婦人の居る所の義である。弘前蝦夷志に松前は古帳的前**マトマイ**とある。後松前と記し、又島の名となる。（北海道蝦夷語地名解）

と斷じてゐる。以上によつても明かに松前の地名は**アイヌ**語より轉じ、それが和人の口に依つて附會されたものである。而して**マトマイ**を松前の字に當てたのは、「夷酋列像附錄」には建久正治の頃かと報じた如くである。又松前が蝦夷島の別名の樣になつたのは、

◇慶長四年冬、攝州大坂の御城西丸に召され、家康公が狄之島の繪圖を御覽になり且つ北高麗之樣子などを物語つた。其ついでに當家の系圖を尋ねられた。此時松前と云ふ稱號に改めた。

（新羅之記錄）

とあるが如く、蠣崎慶廣が松前と改稱してから後の事であらう。

（附記）蠣崎氏が松前と稱するに至つた事について高倉新一郎氏は次の如き古老の一話を送られた。

◇松前と言ふのは松前家の城下だからその字を書いたのだ。松前家は素と蠣崎と言つたが、天正十八年慶廣が秀吉に名護屋に謁した時、秀吉は慶廣の內附を非常に悅び、前途を祝ふ意味で松平家康の松と前田利家の前とを取つて地名の**マトマイ**に當嵌めさせたのだ。

此物語には大なる誤謬がある。則ち慶廣が天正十八年秀吉に謁したのは、京都の聚樂第であつた。而して文祿二年の朱印にも、法橋紹巴の連歌奧書にも、蠣崎志摩守とあつて松前氏とは見ゐてゐない。これだけでもこの傳說は後人の揑造なるは明かである。

函館

函館

明治二年以前は主として箱館と書いたものだが、この地名の起原については、河野の館を七重から見ると箱の樣な形であつたからといふのと築城の際筥が出たからといふのと二つある。

◇箱館について往古の事實を知る者は無いが、暫く傳說に依ると、享祿年間河野加賀左衞門と言ふ者が蝦夷の**ウスケシ**山趾に東西三十五間、南北二十八間の壘を築いた。所がこれを七重濱から望む時は、其形狀が丁度箱の樣であつた。それで箱館と言ひ傳へた。（蝦夷島奇觀）

◇往古は漁師ばかり住んでゐたが文政二年龜田鄕の領主河野加賀守政道が館を築いて移つた。其時土を堀ると筥筥が出た。其中には鐵器が入つてゐた。それ故箱館といふ名が初まつた。（蝦夷實地檢考錄）

右二說は相當根據があるかの如く見へるが、前者は築壘を享祿年間、後者は文安二年としてゐて定まつてゐない。とはいへ河野氏の渡道は新羅之記錄には享德三年、福山秘府引用の松前年代記及び松前年々記には寶德三年と述べ、其間四年の相違があるが、いづれも文安二年以後である。して見れば、河野氏が箱館に築壘したのは享德以後であらねばならぬ。こゝに至ると蝦夷實地檢考錄の主張はちと怪しい。けれども往古には漁師ばかりが住んでゐたといふ記事は確かである。然らば河野氏築壘以前は彼等漁師は何んと言つてゐたか言ふに、

◇宇須岸は東部函館の邑名である。（福山秘府）

とし、新羅之記錄には、內海の宇須岸と特記してゐる。又永田方正氏は、

◇福山秘府に臼岸は函館の古名であるといふ。即ち**ウシヨロケシ**で灣內の端（又灣內の西）の義。（北海道蝦夷語地名解）

と述べ、又蝦夷地名解には、

◇箱館　湯の川村迄一里半程　夷語**ウシヨシケシ**である。**ウシヨシ**とは**ウシヨロ**の略言にて入輪といひ、**ケシ**とは末、端などとの事で、入輪の端と譯す。

とある如く、宇須岸は函館の古名で、內海の方を差したのである。が恐らく原名ではなかつたであらう。則ち松前廣長が、

◇箱館はもと館地の名であつたが今は其地名となつた。（松前志）

といふ文中、館地を河野の館のあつた地と解せず、蝦夷館の地と解する事が許されるならば、

◇函館の原名は**ハクチヤシ**で、淺砦即ち山館の義。（北海道蝦夷語地名解）

との永田方正氏の意見は正鵠を得る事になり、それと同時に岡田健藏氏の函館は**アイヌ**語**ハクチヤシ**の轉訛であるとの主張も確證の一つを得る事になるであらう。

椴法華

渡島國龜田郡の東端にある。此處は最近迄鰊場所として有名であり、且つ好錨地である。此地に二つの異つた傳說がある。

◇椴法華は渡唐法華であつて、永仁七年六月朔日を以て日持上人は蝦夷人の酋長**ムシヤタ**なる者を案内者として蝦夷地**イサン**の北濱より、唐土滿州を志し渡航された。故に此地を唐渡法華寺と號し、後椴法華と改めた。（函館山鷄冠石の由來書）

此の說は地名が**トトホツケ**といふ所よりして法華の行者日持上人を連想し、**トド**といふのを渡唐の字に當てた事より一般化されたものである。

◇昔、日持上人が內地に於て布教に努まれて居たが、上役人より迫害され、遂に島流しにされてしまつた。上人は運好く或岩に漂ひ着かれ、漁師に拾はれた。さて上人は此地を去る時、別に御禮をするものが無い故、今にこゝにこれ迄名前の無い魚を取れる樣にして上げようから、若し其魚を得たら法華と付ける樣にと言ひ殘された。所が其後はたして名稱不明の魚がどつさりとれたので、人々はその魚を法華とし、村の名をも椴法華と附ける事になつたと言ふ事である。（柿崎與一郎輯）

これも地名より日持上人と**ホツケ**といふ魚とに結びつけたものに過ぎない事は前說と同じ例である。たとへ、兩者の間には頗る相違した所があるが、日持上人を中心としてゐる點は同一である。これによつて見ると、日持なる者が蝦夷地の人々に如何に深く印象されて居たかゞ察せられる。さり乍ら、椴法華は法華宗とも日持とも又は方言**ホツケ**と呼ぶ魚とも何の關係も無く純然たる蝦夷語の轉訛したものである。

◇**トトホツケ**夷語**ツウホキ**であらう。**ツウ**とは崎又は山、**ホキ**とは蔭といふ事で、崎の蔭と譯す。此所は崎のかげに村があるに依つて名付けたのであらうか。（蝦夷地名解）

◇椴法華の原語**トーボケ**は、岬陰又は岬下の義である。（北海道蝦夷語地名解）

◇**トトホツケ**は藪地の義で、**トト**は藪といふ事である。（アイヌ地名考）

熊石

爾志郡の西北端で、維新以前は熊石番所といふものが置かれ、蝦夷の分界としてゐた。此地は名を聞いただけでも北海道らしい感がするが、古くは雲石とも言つた相である。

熊石

◇松前城下から西在熊石村と言ふのがあつて、昔は雲石村と稱したと村の老人が話した。此の村の西はづれに白雲の凝り固つた樣な石があつて、此石の邊に村の鎭守の社がいつ頃か言ひ誤つて今では熊石村と唱へてゐる。（松風夷談）

此雲石に關する傳說がある。

◇享祿二年三月、西部の酋長多奈沙峨支が來侵した。其時松前義廣は工藤祐兼弟祐致を遣して瀨田内で迎擊せしめた。所が不幸にも祐兼は戰死し、祐致はやうやく逃げて或大石の下に匿れた。すると不思議や俄然雲霧が起り四邊は晦冥した。爲に蝦夷軍はあわてふためいた。その間に祐致は虎口を脫し私喜城に達する事が出來た。故に此を雲石と名付け、後訛つて熊石となつた。（北海道志）

これは史實を巧みに雲石に附會したものであつて到底信賴することは出來ない。矢張此地名も蝦夷語で解して見るべきであらう。

◇熊石蝦夷語**クマウシ**である。**クマ**とは魚類を干す納屋、**ウシ**は多いといふ事である。（蝦夷地名解）

◇**クマウシ**は魚棚多き處の義である。（北海道蝦夷語地名解）

◇方言**クマウシ**と呼ぶ、魚を干す小屋が多いとの義。（北海道志）

◇熊石、魚乾し竿のある所の義。（北海道地名解）

いづれが正しいにせよ、兎に角、此村は古くより頗る漁獲が豐富であつた爲に、其名が出たと考へられる。則ち寛政年間に於いては、此村は、鮑、海鼠、**ワカメ**、**ホリメ**等の產地として知られてゐた事が蝦夷巡覽筆記に述べられてゐるほどである。

以上の外に、**アイヌ**語又は其轉化、或ひは**アイヌ**語を和譯した地名等に、諸種の牽强附會說が創作されてゐるのを隨所に見受けるが、それをそのまゝ鵜呑にするのは愚の骨頂である。

三、社寺緣起考

日本人は敬神信佛の念が古來より深かつた。それだけに、國力の發展と共に社寺の數を增して行つた。此北海道にあつても、神佛は我が國人の移住と共に遷されて來た。所が當時の和人は蝦夷と熊とに包圍されてゐた形なので、神佛に賴る情は一汐盛んであつた。しかも彼等は神佛によつて一種根深い心强さと安かさを與へられた。かくて和人の移住が多くなるにつれ小祠小堂が建てられたその時代は新羅之記錄、福山秘府、碑文、鰐口等に徵するに、大体鎌倉時代より發してゐる。而して神社建立の精神は決して純然たる宗教信仰に基いたといふよりむしろ現世の幸福を得やうとするにあつた。爲に一家の守護を求めんとして素盞嗚尊・毘舍門・弓矢八幡等の武勇神を祭つたり、海上安全や漁業を祈らんとして惠比須・辨才天・住吉明神を勸請したりして、不漁や蝦夷襲來の時には必らず其堂祠に祈願をこめた。かくて其奇瑞を見るに從つて小祠は神社に榮轉し、それに伴ふて一汐神威の尊嚴を證明すべき傳說が附加された。

佛寺にあつては安東氏北渡以來諸族の割據があり各其家の宗派を奉じ葬禮冥福に當らしてゐた。

其間にあつて日持上人の宣傳した法華宗の活動は注意すべきものだ。しかしこれとても自宗の勢力範圍を擴張するのが目的であつた。この樣に各宗派共其勢力を競ふてゐる間に漸次佛寺の數を增加して行つたが、やがて蝦夷の叛亂や諸族の興亡によつて、廢滅するものも少くはなかつた。而して佛寺の再興とか新寺の設立に幕府自ら努力する樣になつたのは、寬政十一年蝦夷地を直轄としてよりの事であらう。北海道史によれば、

◇新寺の建立は元祿以後幕府の禁止する所なりしが、蝦夷地は內地と異なり、直轄以來、官吏を始め南部、津輕の士卒其他和人の新に來るもの多く、葬禮追福等に當るべき僧侶なきを不便とせしかば、享和二年九月奉行は寺院創立の事を寺社奉行に謀りて其贊同を得たり。

とあるが、寺院必要の因はこれのみに限らなかつた。即ち、櫟齋山人が、

◇蝦夷地を今度（寬政十一年）開拓するについて、幕府から叡聞に達した所、勅命に、吾國は古より東北を鬼門と號し、閉塞してをくのを安全とし、假にも開くと云ふ事を忌むのである。故に京都には比叡山があり、關東に日光山や東叡寺があるが如く、蝦夷地を開く爲には神社佛閣を建てゝ鬼門鎭護の事を修せしめる必要があるとあつた。（毛夷東環記）

と見ゐるが如く、こうした迷信的意味を存してゐたであらう。又、休明光記に示してゐる寬政十

二年行はれた宗門改にもよる。これは天明度幕吏の巡見あつてより以來露人が千島を侵略するに際し、まづ蝦夷に切支丹を布教するといふ事が、確實になつたが爲であらう。かくて宗門改と同時に蝦夷人をも佛教徒たらんと勵むものもあつた。この爲にも、新寺設立の必要があつたのである。兎も角かゝる原因よりして佛堂の數が增ゐて行くにつれ奇僧や怪僧達によつていろ〳〵な傳說が生まれるに至つた。

この樣にして社寺の緣起由來記が實在の域を越ゐて遙か牽强附會の領土に迄侵入して、後人の揣摩臆測を繁雜ならしめた。これより私はその數例に錆びついた鈍質なメスを加へて見やう。

姥神社

これは檜山郡江差姥神町に在つて、漁業家は往古鰊漁を敎へた老媼を祀つた神だと云つて篤く信仰してゐる其祭神は、天照大神・天兒屋根命・住吉明神の三柱である。今は縣社として威風堂々市街を壓する感がする。其境內には安政三年創立した天滿宮菅原道眞、慶應二年勸請した海神社大綿津見神、天保十二年再建の稻荷神社倉稻魂命、を祭りそれに創立不詳ではあるが折居大明神といふのがある。これは三柱の神を奉祀してゐた老女の草庵の下より漁夫が網で引上げた奇石を祭つた於

隣堂なるものを移したのである。

扨て此姥神社の由來について次の如き傳說がある。

◇昔江差町の津花の地に名を折居婆さんと呼ぶ神の化身の如き老女が一人ぽつちで暮してゐた。彼女はどこから來たものか判ないが、朝な夕な三柱の神を拜むのを何よりの樂しみとして居た。彼女は又常に天候を豫斷して里人に告げた。不思議にもそれは適確に當るのであつた。それで人々は折居婆さんをば神として敬ふ樣になつた。又婆さんは子供が大好きで每日澤山の子供を集めて一緒に遊んだ。小供達等も彼女を慕ひ、暇さへあれば遊びに來てゐた。處が子供等がぱつたり來なくなつてしまつた。彼女は不審に思ひ、町に出て見ると、外に遊んでゐる子供とてはなく皆それ〴〵家の中で働いて居た。しかも誰れもが悲し相な顏をしてゐたので、彼女がその理由を訊ねると、それは江差の町でお魚が一匹も取れなくなつたと云ふ事であつた。これを知つた彼女は人々が可愛想でならなくなり、大急ぎで家に歸り、神棚に燈明をつけて「どうぞお魚の取れます樣に、」と祈つた。そして其深更に窓邊から外を望むと、鷗島の方にしきりに紫の火が燃ゐてゐた。彼女は怪み乍ら島に行くと、岩の上に日頃信ずる一老神が居られて、

「吾れ、汝の來るを待つこと久し、今此瓶子を汝に授くるに依り、潔齋して之を海中に投ずべし

然らば鰊といふ魚の群來を見ん、其時海水の白く濁れるを見て之を獲るべし。依つて里人を餓死より救へ」と敎へられたかと思ふ内に、神の姿は見ゐなくなつた。彼女は感泣し敎のまゝに海に向つて合掌し瓶の水を注ぐと、あーら不思議や、見る〳〵海面に銀鱗を閃かして寄せて來るのは魚の大群であつた。こゝに於て彼女は中歌の濱邊に里人を集め、其理由を話し、漁の仕度にかゝらせた。里人は雀躍して漁獲に從つた爲に、海邊より山の如き大漁があつた。里人は早速彼女の家に御禮に行つて見るともう彼女の姿は見ゐなかつた。それから尙も山野を隈なく探したが遂にその行衞は不明であつた。人々は彼女が神樣に相違ないと信じ、殘されだる三柱の神像が何の神たるかも知らずに、その儘、祠を立てゝ祭つた。これが姥神で、姥の祈つた神の意であつて、折居婆さんは別に折居社とされた。後年を經て藤原永武なる人（現藤枝氏の祖先）此地に來つて此尊像を拜し、天照大神●住吉天神●天兒屋根大神●の三座なる事を知り、自ら之に奉仕したのである。一方里人とても大恩ある彼女を忘れかねて毎年盛んなお祭を行つた。かくて江差は益々繁榮するばつかりで非常な幸福な日が續いた。けれ共かうした悅びに夢中になつてゐた人達には、何時頃か大變な事をしてしまつた。それは折居婆さんが神樣よりあの神藥を戴く時に神と固く約した事であつた。婆さんは里人にも必らず守る樣にと云ひ置いたが、里人は其約束の言葉をすつ

かり忘れて子孫に傳へなくなつてしまつた事であつた。それは明治初年頃からである相な。

此の說は昭和三年九月函館師範五年の竹谷忠雄が輯錄したものであるが、面白くまとまつてゐるだけに後世の潤色の痕が歷然と窺はれる。此他折居婆さんに關する逸話がある。

◇傳へ云ふ。老女が海に投じた瓶子は津花古祠の濱に於て石と化した。今存する瓶子石がそれである。又中歌町の濱に手洗石と稱するのがある。是れは老女が瓶子を投げんとするに當つて鹽漱した所だ。故に今に至つても鯡の群來るのは毎年此二石の附近に始まると。（江差）

以上の樣に老女を中心として色々な民話が加味されてゐるが、畢竟するに鯡漁を豫察し、それを敎へたのは老女であつたといふ事に附會したに過ぎない。猶、鯡漁を始めて行つたのは和人の女であると解するならば、

◇此魚の漁を初めて行つたのは松前の女である。今江差に於て老婆神大明神と祭るのはそれだ。（蝦夷國私記、蝦夷國夜話）

と云ふ記事は一顧の價値を存してゐるが、事實に於て、鯡は和人移住以前既に**アイヌ**の間で常食としてゐた魚である以上、かつて松前の女が鯡の豐漁を見た事があつてより、其れに習ふて大漁をねんとてかの女を神として祈る樣になつたと考ふべきであらう。

さりながら老女が鯡漁を教へたといふのを裏切る傳說がある。村尾元長の傳ふる漁業の原始口碑は、

◇往昔江差の近傍海濱に老人夫婦が來た。が食ふべきものもないので困つてゐると夢の中で神より一つの楫を授けられた。其時神は彼等に此楫を以て海を探ると食物をうるぞよと告げ給ふた。彼等は神の仰せの如くに行ふと水が白く泡立ちそこから鯡を澤山うる事が出來た。それで此を常食とする樣になり、後子孫が益々繁榮した。彼等老夫婦が死んだ所が今の江差で、夷宮といふのは彼等を祭つたもので、姥神は彼等を指すのだ。（北海漁業志要）

とあつて、折居婆さんの功績が抹消されてゐる傾向が窺はれる。右の口碑は、蝦夷亂記事、北蝦夷風土草稿、蝦夷抄略記等に載する所とほとんど同じであるが、蝦夷亂記事には、

◇蝦夷地土俗傳へていふには、上世此島の濱邊、今の江差の地に老人夫婦が居たが、食ふべき方法を知らないで困つて居た所が夢に一の神人が現はれ一本の船棹を與へて海中を探る樣にと告げられた。で彼等は其教のまゝに行ふと白い波が海上に浮かび其下から多くの鯡を得た。爲に是をば食物とする樣になつた。此二人がかの蝦夷人種の祖先である。今は江差夷宮に祭り姥神といふ。

と述べ姥神を**アイヌ**の祖としてゐる。しからば**アイヌ**の祖**オキクルミ**の治績は如何といふに、

◇蝦夷島は今野に一匹の鹿もなく、川に一尾の魚も無い。**アイヌ**は今や餓死を待つばかりである。今後我より**アイヌ**に誨へて、以來は酒を造つた折は、必ずまづ**イナウ**と共に之を爾在天の神に捧げしめ、篤く禮拜さするであらうから、宜しく鹿の主の神は鹿を下し、魚の主の神は魚を下す樣に、そして**アイヌ**どもの饑餓の苦しみを救はせ給へ。（アイヌの研究）

といふ祈りの詞があるが如く、**オキクルミ**が**アイヌ**にすべてを教へ又蝦夷國が大飢饉に逢つた時にも祈願して**アイヌ**を救うたといふ神話があるが、これと姥神傳說の間にどつか似通つた感がある。此點よりして、姥神傳說は和人の手によつて**オキクルミ**教化神話と江差の鰊とが結びつけられたものではなからうか、しかもこれを助長發展せしめたのは夷宮とか姥神とかいふ名稱より來る聯想感念と思はれる。

鰊供養

江差の姥神を述べたついでに、鰊に關する奇聞を輯錄して、以て鰊供養の意味を持たせよう。抑々鰊は夷名**ヘロキ**和名**カド**或ひは**ニシン**と呼んで、正字は詳かではない。又何故**ニシン**と名付けたかと云ふに、淡齊如水は、

◇幕府の小吏平川半次郎といふ人の説では**ニシン**は二親といふ事だとし、又紀州藩の小原八三郎の著述にも此説があるが、余の見る所では蝦夷地には五穀が生じないので、此魚で生活をするが故に此名をつけたのであらう。此の子をば數の子と唱へる所よりしてその親魚を**ニシン**と云つたのであらうか。（松前方言考）

と小首を傾けてゐる。又高田與清は、

◇鰊の背を「**ニシン**」と云ひ、子をば「數の子」と松前方面では云つてゐる。鰊の腹を小さく割て用ひる所より腹をば「**サザキ**」といふが如きものだ。（松屋筆記）

と述べてゐる。尙鯡といふ字を**ニシン**と讀ませるのは、

◇鯡の字魚にあらずとするのは字義にかなはないとの事で、平川氏は兆の字に書き改められた。其理由は此魚の數は數億兆とも計り難いからである。（松前方言考）

といふ説があるがいづれを正しいとも判じ兼ねるが兎も角、鰊は蝦夷地方第一の物産で、敦賀貿易史稿等によつて見るに、既に寛文の頃近江商人の手を經て近畿地方に迄續々と輸出されてゐたのであつたから、松前藩がこれによつて利を占めてゐた事が判る。實に鯡の漁獲高は藩の財政に影響する所は甚大であつた。それ故に鯡の**シーズン**になると、松前人は上下こぞつて寺社佛閣に祈願を籠

めた。而して特に二月中旬より寺院の鐘を打つ事をとゞめしめたりさへした。これは鐘の響が海底に徹するときは其れに恐れて鰊がよりつかないといふ考よりであつた。或ひは漁場にあつては鯨とか狐などといふ言葉を絶對に忌んだ。鯨は恐らく鰊の大敵であつたからであらうが、狐については一つの傳説からである。

◇文化三年知内山で一匹の黑狐を獲つた事があるが、其後此黑狐が大いにたゝりをなし、松前家では種々な凶事がつゞき、鰊漁も甚だ不漁であつたといふ。（東海參譚）

此他碑石を建てゝ鰊供養を行ふものもあつた。かの茅部郡森村大字石倉にある鰊供養塔がその適例である。河野常吉氏の報告によれば、

◇同地の古老曰く「寶暦十年茅部場所で鰊の大漁があつた。其頃は未だ鰊搾粕が製造されなかつたので唯乾製するばかりであつたが、此大漁に會し僅に漁獲の一部分を乾製したゞけで大部分は地を堀り之を埋めた。因て漁業者達は相謀りこゝに碑を建てゝ供養をしたのである」

（北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書）

とあるが如く、鰊の大漁を得んためには人々はこぞつていろ〳〵な手段をめぐらしたのである。かゝる有樣であつたので、珍しい修驗者が來るとその加持祈禱を求めたのは勿論の事である。

こゝに前述の折居婆さんと同じ樣に奇瑞を顯はした山伏の話を揭げやう。

◇上國に大藏卿といふ山伏があつた。彼は頗る行法堅固であつたので、里人はもう漁期が過ぎてゐるやうとして彼に大漁の程を賴んだ。彼は早速祈禱に取掛つた。然し里人はもう漁期が過ぎてゐる事を知つてゐたので彼の法力は必ず空しいものと豫期してゐた。所が案に相違して鰊の大漁を見た。初め此山伏はもしも祈のしるしがあつたら自分の願をも叶へて貰ひたいと深く里人と約してゐた。然るに賤しい者のならひとて、里人はその約束を履行しないのみか、かの山伏に難くせをつけ、漁が多くあつたのは自然の事で法力の爲じやないとさへ云つた。爲に彼は憤慨の餘り絕食をし、自分が死んだら、他の浦には鰊がよらなくとも、上國だけには必らず群來る事があらう、その時こそ自分の法力が如何程であつたかを思ひ知らしめてやらうと云つて死んでしまつた。果して翌年いづこも不漁なのにひきかへ、この濱ばかりは頗る鰊の大漁があつた。それに色々の崇があつたので流石不信の里人も大いに恐をなし、彼の山伏を神に祭つた。それよりは他所に鰊がまだ取れない時でさへ、すでに上國では大漁を見たとの事である。そしてこゝで取れるのを大藏鰊と云ふ樣にさへなつた。（東遊記）

此法力著しい山伏にひきかへ、飛んだ味噌をつけた山師の山伏の話が松前附近の荒谷村に存してゐる。彼は賴まれもせぬのに、自ら犧牲を拂ひ、自家廣告を盛んに行ひ、天晴法力ある修驗者らしい顏をしたのであつた。所が運が惡いのか、法力が足りなかつた爲かどうかは不明だが、あはれ詐僞としての笑話を殘した。

◇荒谷村の者が言ふには、拾年以前迄は松前港の內にも鰊漁があつて安らかに渡世が出來たが、近年になつて不獵が續き、村人は松前の金主から借金を重ね、首がまはらぬ程困難に及んだ。然るに或年、南部佐井村の大聖院と言ふ山伏が來た。彼は鰊大漁の祈禱を修法するとて、松前の地藏堂の山奧に百ヶ日間の大願を立て、木食して引籠り、又同町の辨財天堂と城內の稻荷大明神とに一七日斷食して裸足で日參した甲斐があつて神託を受ける事が出來たと村人に云ひふらした。人々大いに悅んで、八方工面して高利の金子を借り出して網を繕ひ、機具種鹽等を整へ艤して待つほどに鰊の子一匹さへ寄つて來ないので、南よ北よと漕ぎ廻つてゐる中に鰊獵の時節に遲れ、困窮に困窮を重ねるに至つたと。（蝦夷草紙）

こゝには大聖院が祈禱料をせしめた事を書いてゐない所を見ると彼は自分の出鱈目が當り、大漁の曉には、たんまり謝禮を頂戴するか、それとも一院の建立に預らう心算であつたらしいが、見事に的がはづれた事は傳說蒐集家にとつてかへすゞ〳〵も惜しい。

やらずの明神

北海道には其由緒の詳かでない社が數多存してゐる。やらずの明神の如きも其一例である。これは往古松前・箱館・江差等に祭られてゐたそうであるが、今は全く廢絶してしまつた。この神はちと變つた神で今のアメリカ人の樣に、日本人がたんまり黃金を貯へて、それを國に持つて歸らうとするのを頗る嫌つた。

◇此の神は甚だ錢を惜しんだ。それで蝦夷地へ出稼に來て如何程黃金を蓄へたとしても、必らずこの明神の地において遣ひ果して終はなければ、故鄕へは歸ることを許されなかつた。もしも此旨に逆ふものがあると、色々歸途崇があつたといふ。（斗北山人物語）

これはやらすの明神といふ所よりして後世になつて神職あたりが懷中を肥さんが爲に附會した說の樣である。とはいへ、こうした信條は到底採用されなかつたと見へて、すべての和人はやらずの明神なんかを眼中に置かず、莫大な利益を收めて故鄕に錦を飾るのが常であつた。思ふに彼等にとつてやらすの明神よりも恐ろしかつたのは、なんといつても蝦夷地出稼の娘子軍の竦腕であつた。即ち市川十郎も、

◇鰊漁の時になると、箱館迄、所々から娼婦が來寓して色を鬻くのである。そして十日以後になると諸場所の番人の出稼に行つてゐる連中が歸つて來るのを待ち伏せるが爲に集まり來るのである。思ふに箱館・松前の近在のもの又は南部津輕の出稼人達は遠く鄕里を離れ、千難萬苦して諸場に於て立働き、各若干の金銀を得たとしても、何せ蒙昧野蠻な蝦夷地の旅中の事とて、金子を散費する術がない。それで彼等はやうやく鄕里の地方に近くなるや、今迄の辛苦艱難を一時に忘れ忽ちに放肆惰弛の心を生ずる。こうした時に及んで、彼等の目前に白顏皓齒の女が媚を呈するを見て、どうして誘惑されないでをられよう。此れ實に人情の眞隨を悟つて一擧に大利を得んとする策と言ふべきである。箱館其外在鄕から出る娼妓は父母を養ふ爲だと公言して、年々他所に赴いて色を賣る者が多く、凡そ戶口繁華の地である以上、必らず彼女等の影を留めてゐる。しかも彼女等は遠く百里の外に迄遠征するとの事である。（蝦夷實地檢考錄）

と嘆じてゐる所を見ても、如何に出稼人にとつて娘子軍が魔物であつたか知れない。

オシラ神

オシラ神

松前近傍の民間には、禍福吉凶を占ふのに、種々の方法が行はれてゐた。その中にオシラ神或ひ

はオホシラ神といふのがある。その形態は大體東北地方に行はれてゐるものと大差がなく、しかもその像は大抵桑の木で作られた。

◇オシラカミはイタコとて巫女の如きものが何か雷木の如きものへ色々の絹の如き布を結ひつけたのを神體となして祀る。（松前方言考）

◇蝦夷にはオホシラ神といふのがある。何の神たるか其理由を知つてゐる者がない。これは一尺餘の桑の木に朧げな形を彫り、男女二神を造る。信心のものが何かお祈りを願ひに來ると、其木偶神を連れて來て、願主から出さしした木綿の裁で神體を包むのである。（東海參譚）

しかしてそれを專ら行ふものをばイタコと言つた。

◇イタコといふのは、オシラカミを祭り、其神の告を承けたる由を言つて、病などを祈り又は狐憑きなどをも拂ひ、或ひは神降として死靈の告などと報ずる。（松前方言考）

◇イタコとて亡者の居處或は思情等の事を問ふ者が有れば、此者神降とておのれが身にその呼ぶ處の亡者の魂をうつらせて、死せし者の思情を述べたりする。（松前方言考）

彼等巫子が如何にしてオシラカミを降すかといふに、

◇男女二神のオホシラカミを左右の手に持つて呪咀する。すると其神が女巫にのり移つて吉凶を

言ふのであるが、若し傍の人が、きつと虛妄の事であらうとでも心の中で思ふならば、女巫はたちまち、我をどうしてそんなに賤しむのかなど言ふ。それで、人々は神靈冥通すと恐れたといふ實に奇怪な事である。（東海參譚）

と見に、あたかも讀心術をも會得してゐる感がある。しかし淡齊如水の實驗によると、別にそうした神通は無かつた樣である。

◇自分が或年佐藤某に伴はれて松前へ行つた歸途、札刈村といふ所に宿泊した。その時或家でイタコのコトヨセといふものを始めて聞いたが。聽衆はいづれも涙を流したり鼻水を袖に包んだりしてゐた。其樣子が餘りに滑稽であつたので、笑を禁ずる事が出來ず、佐藤某と共に袖に口を覆ふて宿に歸つた事があつた。（松前方言考）

しからばオシラ神の本體は如何といふに、東元は、

◇中國に在る所の犬神といふものにひとしきか。（東海參譚）

と疑ひ、淡齊如水は、

◇考ふるにオシラカミと言ふものは御シラセ神の訓であらう。（松前方言考）

と言つてゐる。これらがはたして當を得てゐるか否やかは、オシラ神研究家の批判を俟つ事とす

る。しかし乍ら私としては蝦夷地の**オシラ**神なるものは、南部津輕あたりの人々より傳つた事だけは斷言出來る。

次に此**オシラ**神なるものを祭つた洞窟があると言ふ事を、東北文化研究第一卷六號九十三頁に、喜多博士が、北海道出身の東京帝室博物館歴史部員高橋勇氏から聞いたと報ぜられてゐる。又、蝦夷風俗彙纂にも。

◇白神岬――方俗白神として偶像を崇んでゐる、犬神の類である。

と述べてゐる。しかしこれがはたして**オシラカミ**かどうかは、實見した事もないし、又實地に見たといふ人から聞いた事もないので、何とも判じかねる。

矢不來天神

矢不來天神は上磯の西方約二里の茂別村字茂邊地に村の鎭守樣として祈られて居る。しかし數十年前迄は約一里位西方の矢不來にあつた。その御影石で出來た立派な鳥居は矢不來の高臺に存してゐて、しかも此鳥居の上には多くの小石が乘つかつてゐる。村の人に訊くと思ひ事の有丈を心に念じて小石を投げ、それがうまく鳥居に止まると願事が叶ふとの事だ。私も試して見たが立派に成功

したものゝ、未だに願は果され無い。神樣も私の樣なひやかし客はかへり見られぬものらしい。さて社殿は此鳥居よりずつと奥にあつて南面して居たそうだ。此南面について物語がある。

◇只昔々と丈けで年代も明かでない其頃、一人の獵師が土地の誰れ彼れを呼び集めて御宮の建立を諮つた。村人も非常に喜んで、寄進をするやら、骨を折るやらして、間もなく上棟式も濟んで愈々明日は御遷宮と言ふ事になつた。處が何者の惡戯であらう。昨日迄立派に道路に向つて建てられた御宮が、其夜、タツタ一夜でグルリと後に向を更へたと言ふ事である。是を見た村人は驚く事か驚くまい事か早速村人を集めて相談すると、皆で元通りに向を改めなくては不便だとあつて、挺や丸太を持寄つて種々工夫を凝らしたが、矢が挺處か、一寸も動かぬので、村人も持飽んで居ると、其處へ通り掛つた一人の老人が、夫れは屹度神慮に依る神業と言ふものであらうから其儘にして置くがよいと告げたので、遂に其儘にして御遷宮式を濟したそうである。其頃ゆくりなく、旅から旅と商に行く旅商人が此矢不來に來ての話に、今年南部の宮古の天滿宮が御神體の兩眼が黄金の玉なので何者かに盜まれたと言ふ事だが未だに其行衞が知れぬと物語つたとやら、夫れ以來誰れ言ふとなく、天神樣は南部の宮古から來たので屹度南部の方斗り向くのであらうと口から口へ傳つたのである。それが爲めか、其後回祿の災に罹つた時も、再建には必ず南向に建

立せられた。今も社殿は矢張り南を向て居る。（ハコダテ第十九號）

此社は市川十郎の蝦夷實地檢考錄によると、安政年間に於いては、

◇本社拜殿、石鳥居一基、木鳥居四基、社地東西二百四間、南北百廿間餘、社頭に寛永十二年下國慶季の寄進せし鰐口がある。祈典は九月廿五日、臨時祭は七月十六日である。是社は昔巫子が奉仕してゐたが寛政年中から神職池田頼母が司る樣になり今の池田典膳に迄至つてゐる。

と見に、北海の邊土としては相當旺盛を極めたと思はれる。又古老の話では、

◇年々七月十六日は御祭禮で、其盛大な事は龜田八幡の御祭禮に劣らぬものと稱へられ、舊幕時代には夜晝通して隨分と賑つたとやら、殊に地方から入込む香師や野天賭博なども開帳せられ、又御利益の驗だと言ふので村々の娘子や若い衆などが願の有丈を念じて石の鳥居に小石を打上げるのも一時は隨分流行つたものだ。其御驗か夜宮の中に願が屆いたなと言ふ珍談も隨分澤山あつたとやら。（ハコダテ第十九號）

と言ふが、此祭禮には盆踊も附隨したことゝてさぞ若い人々の心を賑はしたと信ぜらるゝ。

然るにお宮は村から一里も離れた山中にあつた爲に、村人は不便を感じ、人家の澤山ある方へ移さうではいなかと言ふ相談がまとまり、いよ〳〵茂別村に遷した。が前より以上に盛大なるべき筈の祭禮が何故かさつぱり振はなくなつてしまつた。これは恐らく神意にもとつたが爲であらうとの說であるが私の思ふ所では、矢張若い男女に相應しい戀の避難所が失はれたが爲であらう。

扨て此神は箱館市中安全、舟々海上安全、蝦夷地靜謐、漁業等に最も御利益があつたと、矢不來天滿宮本殿奉納帳に記されてゐるが、これに限らず色々な立願を成就せしめ給ふ所から、土地の人より一入信仰されたと考へられる。然らば此天滿宮は何時頃建立されたかと言ふに、

◇造立の年號は不詳であるが古來から茂邊地の戶張に造營せられてゐた。（福山秘府）

◇茂邊地村の天神社は下國勘解由の建立せし所で年數は碇と解らぬが大方二百有餘年前である。（寛文五年堂社建立年代調）

と述べてゐるが、下國氏の砦址と天滿宮の地理的關係より、又寛永十二年下國慶季寄進の鰐口等よりしても、下國氏の勸請したものであらう。而して其年代は寛文五年堂社建立年代調では二百有餘年前とあつて、北海道志に記す所の長祿元年正月に大體近い。しかも其神體についての緣起を顧みるに。

◇當地矢不來天滿宮の御神體は文和年中（西暦一三五五年頃）茂別海岸に流れ寄つた。それを蝦夷人達が拾ひあげて今の社地に勸請したと申傳へてゐる。それで其社地の東西にある小澤を**カムイ**

ヤンケナイと蝦夷人は唱へてゐるとの事だ。（蝦夷實地檢考錄）

◇元來此地一帶は漁利に富んでゐたので土地の**アイヌ**達は毎日網をもつて魚を獲つてゐた。所が或時網を引くと天神樣の木像がかゝつた。**アイヌ**達はそれを或る澤に揚げてその木像を**オカモイ**樣と言つて草の祠に祀つた。そして其の澤の名を「**カモイヤンケナイ**」則ち神を揚げた澤と名付けた。（小視達報告）

とあつて、**アイヌ**が天神の像を拾ひこれを祭つた事になつてゐるが、**アイヌ**には社祠を立て神を祀る習俗がないといふのが今日の定說である以上、**カモイヤンケナイ**といふのを幸ひに和人が附會したものにちがいない。その上に、

◇此神像は海中に漂流してありしを和人の獵師某なるものが拾ひあげて此地に祭ると靈驗著しく祈ると必ず効があつて萬願が成就する所から、土地の人々は生天神と稱し奉つた。（松前紀行）

◇昔一人の獵師が山路を下つて來ると、渚近くに菅公の御神體が流れ寄つて居るのを見付けた。彼は非常に喜んで土地の誰れ彼れを呼び集めて御宮の建立を諮つた。村人も大いに悅び、寄進をするやら、骨を折るやらして、間もなく上棟式も濟んだ。（ハコダテ第十九號）

といふ傳說があつて、神像を祭つたのは矢張和人であつた事を頷かしめる。而して澁田翁雜記によ

れば、

◇今は昔、**ヤケナイ**の天神の御像は大町平井某の家から出たと言ふが、その家は一向宗の檀家であつたので、神像を人に讓つてやつた。所が今では天神の宮祠さへ出來て隆盛になつてゐる。

とある。これで見ると矢不來の天神は箱館より齎したもので、決して海岸で拾ひ上げたのではない。こうなると此傳說はどうしても**カモイヤンケナイ**といふ名によつて揑造されたものとしか考へられない。

次に此天滿宮が下國家の守護神とされた理由をさぐると、

◇其後下國式部太輔安部家政**カモイヤケナイ**を陣所とした。然るに長祿丁丑年五月蝦夷大に蜂起して、此處に襲來した。家政は彼等を防戰した時、彼等の射る所の毒矢が一筋も來ずして皆地上に墜ちた。是偏に天滿宮の加護であらうと信じ蝦夷を鎭定してよりこの方矢不來といふ文字に改め、下國氏代々の守護となし奉つたと言ふ。（蝦夷實地檢考錄）

◇幾年かの後此**カモイヤンケナイ**は下國氏の領地となつたが、いつか**アイヌ**達が領主の命に從はなくなつたので、下國氏は親ら**アイヌ**征伐に向はれた。かくて兩者は「**カモイヤンケナイ**」を境に對陣して相戰つた。**アイヌ**勢は盛んに毒矢を射つた。然るに不思議な事には其毒矢が或る所ま

で來ると、バタ〳〵と地に落ちてしまつて下國勢には一つも當らなかつた。爲にアイヌ達は慘敗のやむなきに至つた。一方勝利を得た下國勢はかの不可解事を調査して見ると、そこに天神樣の祠があつた。下國勢は此天神樣の加護によつてアイヌの放つ毒矢が落ちたのを知り、大いに感泣し此地の守神として祭り、矢の來なかつた由を以て矢不來天滿宮と名付けた。（小視遠報告）

と傳へられるが如く、ヤンゲナイといふアイヌ語の地名を役人が矢不來と書き改めた事よりして生れた索强附會說に過ぎない。

臼如來

有珠の善光寺は有珠の灣頭に在つて古來臼如來と稱せられ、其緣起によれば、

◇人皇五十三代淳和天皇天長年中叡山慈覺大師東國に遊化あつて奧州南部恐山に登り、此や日本の限りならんと地藏菩薩の像を彫刻し一宇を結んで安置し給ふた。そして日本の內佛法の弘通が遍くゆき渡つたと喜び、海上を望むに雲霧のあなたに一島がある樣に思はれた。それで一葉の扁舟に棹し此蝦夷島に涉り、土人を敎化し、有珠山の麓の丘林に座し修業せられてゐる中に、或夜善光寺の一光三尊の阿彌陀佛を夢みた。それで大師は夢現の儘を彫刻し小宇を結び安置し奉つた。

これより自然善光寺といふ名が生じた。（北海道寺院沿革誌）

とあつて、實に其濫觴たるや平安朝時代の昔に溯つてゐるが、慈覺大師が蝦夷地に渡航した證據のない以上、是を直ちに肯定する譯には行かない。それに嵯峨天皇より陽成天皇の頃には尙北海道は蝦夷の本據で時々出羽秋田方面に迄侵掠し和人を殺傷したりしてゐた程であつたからして、到底和人が有珠に迄出かけて行つて、堂宇を造り、佛法三昧に日を送る事などは思ひもよらぬ所である。故に此緣起は後人の誇張たるを免れない。私の見る處では矢張り和人移住後である。が今日殘存せる舊記によると、

◇慶長十八年領主松前慶廣公宇須に至り善光寺を營む。（松前誌。松前舊事記）

と記し再建の事が窺はれる。これによると、當時古來よりあつた如來を本尊として堂宇を建設したのは事實である。而して、有珠の如來堂を善光寺と一般に呼ぶに至つたのは、

◇海邊に臼善光寺とて堂がある。本尊は信州と同體で、突臼臺座にして有る。（一日玉鉾）

◇龜田より三十里、東蝦夷地に臼ヶ嶽といふ山があつて、硫黃の氣で絕頂が焚崩れ、臼の形の樣に殘つてゐる。麓に善光寺の彌陀が安置されてゐる。（蝦夷行記）

これによると山頂が凹んで臼の形に似てゐた所の有珠嶽の麓に如來堂があつた事よりして、或は

信州の善光寺の如來と同じく臼形の臺座を持つてゐた所よりして、善光寺なる名稱が生じたと考へられるが、然しこれは信憑するに足らぬ。むしろ立杉栗蒙が、

◇松前より東に**ウス**といふ所がある。是に善光寺をうつした靈佛が立たせ給ふと言ふ。信州の像は臼の上に立たせらる。恐らく此寺も、その土地が臼といふ名よりして和人が善光寺を勸請したのであらう。又西の方に**ヲホタ**といふ所がある。此處には大日如來を祭つてゐる。**ヲホタ**は大の字に緣がある所より大日如來を安置したと思はれる。（東遊記）

と論じ、又滕知文は、

◇按ずるに臼を以て臺座としたのは此處の地名の**ウス**といへる所よりして、和訓相通ずる故に臼を臺としたのであらう。夷言に**ウス**と言ふのは臼の義ではなく、裏海の事を言ふ。然らば後人の附會した事は明かである。又善光寺佛は本多善光が貧賤で佛體を入れて置くべき所がなかつたので臼をば臺座としたとの傳說があるが、此故を以て地名**ウス**と言ふにならつて善光寺佛をば寫したのであらうが其詳なる事は考へられない。（東夷周覽）

と觀察した如く、地名が**ウス**といふ所よりして善光寺を移し如來の像を安置したと信ぜられる。しかも臼の善光寺如來堂と人々に稱せられる樣になつてからは一入種々の附會說が起つたのであ

る。

さて此堂宇は亨和三年頃には僅か九尺四面位の草庵に如來を安置してゐたにすぎなかつたといふ事が毛夷東環記に書かれてゐるが、慶長十八年松前慶廣建立以來蝦夷の叛亂や寛文二年の有珠嶽爆發等によつて堂舍を破壞されながらも、輕うじて廢滅を免れ、再建に再建を重ねてゐたのであつた。而してこれが一大伽藍となつたのは文化元年である。

則ち寛政十一年蝦夷地が幕府直轄となつた時、江戸增上寺の倫譽和尙は、書を幕府に奉つて、蝦夷地に寺院を建立し以て夷人を敎化せん事を請ひ、此許可を得た。幕府では先づ亨和二年厚岸、樣似、有珠の場所に三寺を建つる事に決し、有珠善光寺の住職には芝增上寺の僧莊海が撰ばれた。

當時此寺には檀家とても無かつたので、特志を以て幕府では一年に玄米四斗入百俵、金四十八兩、他に十二人扶持を給した。その受持區域は山越內から白老に至る迄であつた。かくて境內約六百坪本堂七十坪の寺院が建てられ而して其第一世の住職に任ぜられた莊海は關東十八檀林の次座として芙蓉之間に列する格式を得た。

扨て此莊海が如何にして蝦夷人の間に布敎したかと言ふに、

◇此僧は蝦夷地に至るや、先づ此地に念佛をすゝめんと志した。然し彼等は念佛の有難味が判ら

ないので一人としてこれを唱へる者がない。それで住職は彼等が頗る酒好きなのを知つて、濁酒を醸造し、

「どうだ、お前達がわしの教へる通りに念佛を唱へるならば酒を振舞つてやるが、」と告げると、彼等は酒を呑みたくてたまらないので僧の言ふ通り念佛を唱へた。これよりして彼等は寺へ往き念佛さへ唱へるならばきつと酒にありつけると信じて、仲間の者にも知らせた。それでこれを聞き傳へた蝦夷人共は、われ先にと續々と本堂に集り、念佛を唱へるのであつた。その中に段々念佛の尊い事を悟り、酒を呑まなくとも口々に念佛を口にする樣になつた。（蝦夷廣覽）

とあるが、彼等蝦夷人にかゝる方便を用ひて迄布教に從事した莊海の熱心さは賞讃に價する。

第二世を鸞州といつて、仲々の快僧であつた。彼についても逸話がある。

◇鸞州は筑前の人であるが、文化四年五月**ロシア**人が**エトロフ**に侵寇した時、彼等は土人達を諭して、

「たとへ敵の砲丸に斃れる事があつても捕虜の辱を受けてはならんぞ」と言つた。そして土人達の誓詞を譯して梓に付し、それを彼等に與へた。又彼は多くの佛幡を建てゝ其地を守らしめた。その他彼は後世の技折といふ書を著して土人達に授け、或ひは大念珠を作り百萬念佛を教へたりした。この法莚に列する蝦夷は、五百餘人の多きに達したといふ。これ蝦夷地に於ける念佛の始めである。（後世之枝折序）

どつか前述の莊海の話に似てゐる點があるが、兎に角鸞州も又熱誠を以て布教に盡したことが察せらるゝ。

第三世は辨瑞といつて一名念佛上人の號がある。彼は土人に假名文字を教へたり或ひは粉挽歌を習はしたりして大いに蝦夷教化に努力する所があつた。その歌は傍に夷言を譯し大いに蝦夷人の便宜を計つたもので次の樣な詞である。

◇ 是や人々　教を聞よ

早い遲いか　一度は死ぬぞ
死ぬがいやなら　念佛申せ
申す人なら　いつなん時に
假のからだの　死たるとても
蟬の脫がら　捨つるが如く
月も日も　死せざる國へ

白如來

往て生れて　心のまゝに
妻や小供が　かあいそならば
共に念佛　申すがよいぞ
此世は必ず　災難受けず
彼の世はまた　淨土に生れ
一つ蓮の　臺に乘て
永く樂しみ　死ぬ事ぞなし

（苑園小說）

此僧は文政七年十一月頃靈巖寺中の旅宿にある時遷化したが、火葬した際多くの舍利が出たとの事である。

如此して有珠善光寺の勢力が段々蝦夷人の間にも擴張されて行くにつれ、蝦夷敎化の實が揚がらうとした。然るに文政四年幕府が再び蝦夷地の經營を松前藩に托ねるに及んで後は、辨瑞達の折角の苦心も一頓座を來たすに至つた。何故かと言ふに松前藩は古來からの政策よりして蝦夷の敎化を好まず、此善光寺に對しても一種の制限を設け、今までの樣に蝦夷人の葬式を取請けようともせず、又一年の中唯一度だけ附近の蝦夷人に念佛を授ける樣にした。爲にこれよりして蝦夷人は誰一人と

して詣ずる者がなくなり、唯僅かに會所にゐる番人等が參詣するに過ぎない有樣となつた。かくて一時隆盛を極めた善光寺も段々淋れて行つたのである。これは必らずや彌陀の本願にもとるものであり、且つ泉下にあつた莊海、鸞州、辨瑞等の靈をして、不覺の涙にくれしめたであらう。

福山の阿吽寺

海渡山阿吽寺は福山新荒町にあつて眞言宗に屬し高野山淸淨心院の末寺である。蝦夷寺號本末並年代調によると、永正十年の建立で開山を傳燈阿闍梨宣榮と言ふ。然るに福山舊事には開山を永快阿舍利とし永正十年大館合戰の時燒滅し久しく中絕してゐたが、大永七年再建なり蠣崎家の祈願所に定められたとの事である。然るに此阿吽寺の奧院に大小二つの不動明王の像が安置されてゐる。蝦夷實地檢考錄にはこの大不動について、

◇此の木像は弘法大師の作と言ふてゐるが古色蒼然とし、頗る年數を經たものと思はれ、殊に其威容は畏敬に價し實に凡夫の手になつたものでない。傳ふる所では、越前敦賀から遷したもので、その地には舊趾がある。又は秋田から齎したとの事である。

該寺緣起に依れば、

福山の阿吽寺

◇羽前に阿吽寺といふ一寺があつて、こゝに身長五尺の不動明王の像が安置されてゐた。所が嘉吉三年下國盛季が松前に逃れ渡る時、山王坊なる者が此木像を守護して從ひ來り、茂邊地に居住し、後大館に移つた。（北海道史）

と述べてゐるが、松前廣長は山王坊の事を福山秘府に於て妄說と斷定してゐる如く阿吽寺は、海渡山山王院とも稱した所より山王坊に附會したものである。

又小不動については、

◇此不動の靈驗著しく、人々は皆畏敬尊信してゐた。所が或時坪屋源七と言ふ商人が同業の者の葬式を送つた還りがけに、此不動に參詣し拜跪合掌してゐる中に、不動明王の火炎が燃ゑ初め、それが彼の肩衣を燒くに至つた。傳七は驚愕の餘りその場に氣絕した。幸にも傍に居合せた人々が周章狼狽しながらもやうやくその火を消し止め、傳七を外へ擔出し、水を濺ぎ藥を與へなどしたので暫くして蘇生するを得た。彼はきつと葬送へ行つて穢れた身を淸めもせず其儘參詣したゝめ明王の憤怒に遇ひ其冥罰を蒙つたと信じ、大いに畏怖し焦げた肩衣を其家に傳へたのであつた。是故に小不動をば燒松不動と稱する樣になつた。（蝦夷實地檢考錄）

といふ說話がある。これは大不動以上の靈驗を宣傳してゐるが、不動明王の火炎が如何に神技によつて彫刻されてゐたとはいへ、木像の御本尊に何らの類燒を及ぼさず、かへつて肩衣を焦がした所に滑稽味を存してゐる。恐らく御燈明の火でも燃へ移つたのであらう。

此阿吽寺に明治十年合併された寺に慈眼寺といふのがある。明和三年迄は福壽山永善坊といひ、其創立は元龜二年との事だが、不幸にも三百六十餘年を經た慶應元年出火し、遂に今の阿吽寺の食客におちぶれたのである。けれどもこれは本寺よりも其創立は前で且つ仲々由緒の深い寺である。則ち開山は永善坊道明法師と言つて、摩訶不思議之密法を修行した道明風の元祖である。かの新羅之記錄には左の如く彼の勳功を誌してゐる。

◇嘉吉三年、下國安東太盛季と言ふ蝦夷管領が南部大膳太夫義政の奸策に醜弄され、大敗の憂目を見た。それで彼は小泊から蝦夷に渡らうと舟出したが惡僧冬天であつたので順風が吹かない。一同は追手が餘り急であつたので、頗る困却しきつてゐた時、一行の中にゐた道明法師は天地を俯仰し大いに肝膽を碎いて祈願を籠めた所が、天の加護があつて忽然として巽風が吹き無事船出する事が出來た。この後から南部の勝ち誇つた軍勢が近駈けて來たが、すでに船は遙か沖にさしかゝつてゐたので、敵も流石に手のほどこし樣がなくすご〳〵と引返すに至つた。爲に盛季等は辛うじて虎口を脫し、目的地に達した。これと言ふのも永善坊こと道明法師の負ひ奉つてゐた如

意輪觀世音菩薩の功德とは言へ、矢張り道明法師の懇篤なる密法が預つて力あるものといはなければならない。それで人々は、彼の名に因んで十二月十日の巽風を道明風と言ふ樣になつた。

此時彼等の一行の中には山王坊、實相坊、萬願寺等といふ後に福山に建立された寺の樣な名の僧も居た樣に、福山年々記や福山舊事等に書いてゐるが、彼等は修業が足りなかつたのか、或ひは法力を現はすのを故意に遠慮したゝめか、功を道明に獨占されてゐる。この福山年々記や福山舊事記は新羅之記錄によつて略記したと察せられる點よりして、阿吽寺や萬願寺や實相坊等の眞言宗の寺院に關係のある人物が、それらの寺々の由緒を深からしめんが爲に特に附記したのであらうが、惜しい事には、

◇此時山王坊並永善坊萬願寺實相坊一同渡海す。

として「順風不吹爰に永善坊道明法師衆僧と共に大地を伏仰して云々」と書くのを忘れてゐた。が兎も角天晴名を存した道明は文明七年九十二歳を以て入寂し、元龜二年には彼の祈禱を籠めた如意輪觀世音を本尊とし、彼を開山として福壽山永善坊なる一寺が建立された。それより十一年後（永正十年）には海渡山山王院、百三年後（慶長十年）には照福山實相坊、百十四年後（元和二年）には地屋山萬福寺が成就しそれ〴〵永善坊に次て名を殘してゐる。

北村の地藏堂

北村の地藏堂といふのは檜山郡上國の北、目名川の流域にある。此堂宇は寶永六年曹洞宗に屬する江差の岳淨山正覺院の僧智雄が創立したものだ。彼は奇僧であつたと見ゐて二三の逸話がある。

◇正覺院の智雄禪師は頗る道德の優れた人で、常に貧民を憐み衣食を彼等に施されてゐた。爲にその身は寒中でも古い小袖一つで暮した程であつた。彼は或年諸所に飢饉があつた時などは、富める商人を說いて、金子や米穀やを出させ、それに依つて多くの窮民を救濟された事さへあつた。かくの如き僧であつたので、たとへ檀家から新調の衣をわざ〳〵送られても、乞食等が凍へてゐるのを見るとすぐと脫いで與へ、その身は薄い合羽で間に合はせた。又或時彼は富豪柴田與次兵衞なるもの丶家に行つて「貯米があつたら、自分に三俵だけ與へてほしい。實は飢渴に迫つた者達がゐるので、これまで一生懸命救ひ取らせたが、どうしても自分丈の力では及ばない故に、まけて施してもらいたい」と賴みこまれた。然るに與次兵衞は、「いやさうした事は皆御領主樣がなさるべき事であるからして、貴僧なんかいらぬ世話をしない方がよいでせう」と言つた。これを聞いて禪師は大いに怒られ、忽ち與次兵衞を拂へ、膝下に引伏せ、園爐裏にあつた燃差しをと

り、「汝が如き惡人は我引導によつて成佛さしてやらう」と罵つて將に打殺さんとなされた。

此禪師は大力であつたので、與次兵衛大いに屈服し、手をついて自分の不明を詫びた。それに傍にゐた人々もいろ〳〵と禪師をなだめたので、彼もやうやく怒を和らげた。これよりして與次兵衛は禪師に深く歸依したと言ふ事である。（東遊記）

然るに、北海道志には此を智醉の逸事として掲げてゐるが、正覺院には寶永年間智醉といふ名が見ゐない。これは智雄の誤であらうか、それとも後人が故意に智雄と命名したのであらうか。此一因と思はれる巷說は次の如きものである。

◇禪師は常に醴酒を釀造して置いて、人々に振舞はれたが、或人がその醴酒を呑んだ茶碗を其儘にして置いたのを見た禪師は、門前まで追かけて行き、

「おのれは物の冥加といふ事を知らない奴だなあ、何故醴酒の碗を洗つて呑まないのか」と皮肉を言つて彼を捉み來り、改めて其茶碗を漱いで呑まされた事があつた。

尙又、高座で御說法をせられた折など、經書を引用してそれを證せられた。そして其章句を忘れる者は之を柴田の與次に訊ねよと言はれるのが常であつた。この事によつて人々はかへつて禪師の高德に服し、領主松前志摩守さへも禪師に對して尊敬の念を拂はれたといふ。禪師はもとは佐竹家の歷々の人であつたとの話であるが、誰にもその身分を深く隱して決して語られなかつた。（東遊記、北海道志）

此中前者は「暈酒禁入山門」の**モツトー**を掲ぐべき禪家の僧侶でありながら、彼が自ら酒を釀して人に與へたといふ點に於いて、後者は彼が經書を暗誦してゐてその知識の深遠さに人々を醉はしめたと點において、人々が彼の名を智醉と呼ぶ樣になつたのでは無いかと想像する。

古來奇僧怪僧の中には、其人並はづれた言行によつて色々な**ニツクネーム**をつけられたものが少くない。

石崎の妙應寺

此寺は龜田郡石崎村字白石にある。山號を日持山と言つてかの法華の行者日蓮上人の法子日持が基を開いたとの事である。初めは經石庵と稱したが、明治十二年十月今の稱を公認され、函館實行寺客席末寺となつた。今こゝには日持上人自作の佛像七體（身長一尺以下）、一字一石經四個（大さ二寸以下）、經石碑（幅七寸五分、高二尺七寸五分）、文化十四年安積信撰の經石塚碑文、それに日持上人の木像等が存してゐて、日蓮宗の人々を喜ばしてゐる。

抑々此日持は如何なる人であるかといふに、本化別頭佛祖統記には、

◇貞松蓮永寺開山日持尊者は蓮花阿闍梨と呼び、駿州庵原郡松野邑の人で其姓氏は詳でない。性頗る敏頴で十三經十七史諸子百家はもとより歌道や佛書にも通じた。長じて日蓮の弟子となり、永仁二年日蓮の十三回忌を修するや法華の妙法を闡揚せん爲に翌永仁三年正月四十六歳の春、弟子の隨行を拒み、異域に發したが其終る所を知る者がなかつた。

とあつて異域は支那朝鮮を指示してゐる樣に思はれる。又日蓮大士眞實傳には、

◇日持は駿州庵原郡松野の邑主松野六左衞門の子、二十一歳で日蓮の弟子となり、後永仁三年正月唯一人法衣をまとひ、旅立たせ給ひ奥州津輕より弘前にかゝり路の傍の大石に題目を書き、是れを日本の名殘として、松前より韃靼に渡り、行方知れずになられた。

とあつて、どうやら異域に行く途中松前に寄泊した事がわかる。更に白石遺文には、

◇日持上人は駿州貞松蓮永寺開基の大德だ、傳ふる所によると晩年海を渡つて西し、其の行く所を知らない。近頃蓮永寺の住持日圭なる者て書面によれば日持は正應四年正月松前から大洋を横ぎり北高麗に行き一寺を立て持統山博傳寺と言つたとの事だ。（問日持上人事蹟書）

と見にてゐるが、いづれも其文至つて簡略で、彼が松前に來ていかなる事蹟を殘したか、又何處より北高麗へ行つたかは不明である。然るに妙應寺現存の經石碑には、

◇吾が蓮華阿闍梨日持尊者は異域を救濟し夷狄を敎化し晩年宇賀島に至り入滅した。

とあつて異域に行つた後宇賀島で寂した樣に受取れる。これを市川十郎は、

◇日持は異域に死したのではなく是所則ち石崎が終焉の地であらう。（蝦夷實地檢考錄）

と解釋し、宇賀島を石崎の地に擬してゐる。が兎も角日持については、松前より北高麗の方へ行つたといふのと、北高麗方面を敎化して後石崎に歸り來つたといふのと、石崎を終焉の地とするのと石崎を寄寓地とするのとあつて諸說紛々として定まつてゐない。しかし河野常吉氏は北海道史や北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書等によつて、

◇日持は永仁年間此地に來つて數年間住居してゐた事は疑ひ無い所である。

と斷じられた。是が正しいならば、

◇日持は永仁四年奥州津輕から甚平なるものを先導とし、此地に來るや、敎化の傍ら、農業植樹をも奬勵し、甚平の一族をも悉く移住せしめられた。師が其德望は遠近に聞こ、來り集るものが夥しく、忽ちにして一部落を成した。日持はこゝに駐る事五年の後正安元年當地を發し海外に航した。其發するに臨み、本國より隨身し奉つた自作宗祖の尊像及留錫中彫刻した十二體の佛像と

一石に一字づゝ經文を書した經石を此地に埋め大石を其上に据ゑ後生の二字を記された。それで後人は後生塚と呼び、又庵を經石庵とつけた。（六瑞）

と言ふ說も强ち捨てたものでも無い事になる。然るに此說話の前半は靑森の蓮華寺緣起と頗る似てゐる。則ち、それは次の如きものである。

◇上人は愈々蝦夷に渡らんと歩を海濱に進めて巡敎しつゝ石崎濱まで來た。石崎濱とは津輕海峽の西の方に於ける大岬角であつて、今の東津輕郡平館村大字石崎の事である。上人は石崎部落の長蠣崎甚平なる者の家に宿つて暫く錫を停む。甚平夫妻宗を改め聖人を敬慕する事が特に篤い。上人亦慇懃に里民を敎化した。里人は上人を唯一の父と仰ぎ德を慕ひ渴仰を致した。上人は此の地に於て其の對岸なる蝦夷地の內情を探り渡航の準備をなした。甚平夫妻を初め一族の信仰は最早や不惜身命の根底の上に立つてゐた。而して永仁三年六月一日拂曉甚平の船に乘つて甚平自ら船頭となり石崎を出船した。（日持上聖人海外遺跡探險記）

これを見るに及んで私は一つの疑惑を抱かされた。それは經石庵のある地はもと**アイヌ**語で**シラエト**といつて岩の崎を意味し、これを釋化して和人が石崎と稱するに至つたと信ぜられる以上、後の法華僧が津輕石崎に行はれてゐた說話を假借したのではなからうか。

次は日持自作の日蓮上人其他諸尊の佛像並びに一字一石經である。これらが如何にして出現したかといふに、

◇康正二年松前家老臣小林三左衞門良景なる者が或時、其領地たる石崎志苫の地方を巡廻した所、土中より彼の名を呼ぶ聲がした。その上又不思議な佛緣ある夢を見た。それで地を堀ると日蓮上人の尊像その他十二體の佛像及經石を得た。依つて經石はその儘塚中に止め置き宗祖の像のみは自分の志苫の館中に安置した。（北海道寺院沿革誌、六瑞廿二號）

とあるが、百五十七年間も土中にありし木像が腐朽しないで、日蓮の面影をそのまゝ存してゐたといふ事は考へられぬ。しかもその後の消息を訊ぬるに、

◇宗祖の像は後年小林家の三代目三良左衞門良治が松前侯に降り福山に移るや之を奉持し今の福山法花寺に存してゐたが、或ひは明治維新の兵火に罹り滅びたとか、外國人の手に持ち去られたとか、又は某所に在るとか言つて其說が定まらない。他の十二體の尊像は土地の住民の請に依り、此地に一宇を建て後生庵と稱し永く舊跡を表彰してゐたが、かの長祿の蝦夷の叛亂に際し庵は燒け、佛像も再び土中に埋もれたが、約二百八十餘年を經て寬保二年福山法華寺住職日貞上人當地に來り佛像及び經石數個を感得し信徒と計り再び一寺を建立し、經石庵と稱した。これが今の妙

應寺である。（六瑞第廿二號）

と記し、日持が去つてより四百五十年も經た頃まで土中に木像が埋もれてゐた事になる。故に私は保存不完全な當時に於いて、形體を損しないであつたといふ事を全然肯定出來ぬ。しかも經石四個には日持の直筆で「亦」「妙」「皆」等の文字が歴然と見ゐるといふが如きに到つては沙汰の限りだ。ましてや日持の眞筆が如何なるものであつたか不明である今日、後生といふ文字が彼の手になつたか否かは、後生大事に默してゐた方がましである。

以上論じた日持に關聯して石崎附近には日持の傳說が二三現存してゐる。例へば黑石の題目の如きがそれである。

◇錢龜澤村黑岩岬の岩屋の內、東方から三間、高六尺の處に縱二尺五寸、橫一尺位橫に稍窪んだ平面がある。此平面に僧日持が六百廿六年前に七字の題目を記したといふ。之に海水を酌みて灌く時には、南無妙の三字を讀む事が出來る。其文字の大さは經凡一寸五分だ。古老の話によれば、昔岩崖に題目三個處あつだが內二個處は崩壞して無くなつた。

（北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書）

此れなんかは先年函館圖書館附屬博物陳列室に寄贈された國旗石と類似の性質のものであらう。

國旗石は日高の海岸から拾得したもので、水を灌ぐと明白に日章旗が幾つも現はれる所より寄贈者は奇異の感に打たれた結果わざ〳〵遠路の所を齎したものであるが、黑石の題目もこれと同じく、海草か貝殼の附着した痕跡が海水に洗はるゝ度に文字の樣に見ゐ、それが法華の熱狂者には題目と信ぜられるのであらう。

三、北隅靈異考

多くの原始民族にあつてアニミズムは共通のものである。則ち彼等にあつては雲表を摩する山嶽、火煙を噴く活火山、魁偉な風貌をした巨岩、晝なほ暗い欝林、天に聳り立つ老樹、奇蹟的行動をした畜類、其他如何なる自然の現象でも、それが珍奇怪異なものでありさへすれば、それらより一種のマナを感じ、之に一つの超越力を認め、其結果、祭祀だの禁忌だのが發生する。わが上代の日本人にあつても此アニミズムが充分存在してゐた。けれども日本人は實に純な愉快な子供の樣な心を以て森羅萬象の不可思議に對し、驚異の念と歎美の精とを湛へ、神としての認識を惜しまなかつた。所がこうした樂天的氣分は、佛教思想が輸入されてからは、段々色を消して行き、厭世的氣分ですべてのものゝ上に因果的關係を見出さうとした。爲にアニミズムの對象物にあくどい佛教傳說が起つて來た。しかもそれは時代と共に進化し、一つの事件がある度に附會され、遂にとんだかけはなれた意味の迷信をさへ生ずるのであつた。而してこれによつて寄進は多額のものとなり、堂社は建立され、果ては神官僧侶の懷中を迄肥へさせ、彼等の中の不心得者をして神佛の冥加に甘へる餘り邪道魔境に陷らしめる樣な不祥事を醸し勝ちになつた。こうした例は此北海道にも發見される。

錢龜澤の橡木樣

橡木樣一名白木神社は龜田郡錢龜澤村字長坂にある。その御身體なるものは連理木と呼ばれてゐる橡の老樹である。橡の木一名七葉樹夷言ではトチニーと言ふ。北海道帝國大學の工藤祐舜氏の說では、橡は主として本邦を鄕土とし、北海道にあつては渡島及後志の兩國にのみ生育し、しかも濕潤なる土地を好むと。連理木は高五丈餘、根本の周り約一丈餘のものが二本相對立し、地上約八尺の高さに於て其枝が互に連結してゐる所から、此名稱が起つたのである。樹齡約六百歲との事だが、實に樹木のくせに萬物の靈長たる人間でさへ容易でない所の神に祭られるとは冥加至極といはねばならない。此れが白木神社と唱へられたのは黑田開拓長官が管內巡視として龜尾村に來られた際である。長官は此靈木に接して枝間の小宮を認められ大いに感嘆した後、名を白木神社と奉り、廣く之を世間に吹聽するに至つたとやら。これが事實だとすれば黑田長官も後人の爲によい飯の種をつくて置いたものだ。

扨て此の橡の木樣は乳の神で、乳の出ない婦人が行くと實に効驗著しいさうな。然し只では駄目だと見ゐて、そうした婦人は必らず五合入の袋に米を充滿させ、その上供物料なるものを添へて、神主を通じ、橡に祈願をこめ、其後自分の持つて行つた袋の中の一箇と別に橡の木の實と葉を三拜九拜して頂戴する。そして其米を粥にして喰べると數日の後必らず乳を見るとの事だ。しかし最近詣でた私の知人は不幸にも何等の靈驗がなかつた所を見ると、十人が十人とは行かないらしい。が兎も角一部の婦人連からは相當崇拜の的となつて、此神社は昭和の今日歴然と存在し、別當の生活費を供給してくれてゐる。

此の橡の木が靈あるものとして信仰され、たとへ官許を得なかつたとはいへ、除災防厄の神に祀られ、その加持祈禱のための拜殿や自稱別當が出來たのは、日露戰役頃からであらう。これについて次の傳說がある。

◇丁度明治三十七八年戰役の當時、或る人がわが軍の勝利を此橡の木樣に祈りに行つた。と彼は此橡の木より眞紅な血がどく〳〵吹き出してゐるのを發見した。それで大いに驚き早速村人を呼集め白木棉を買つて來てどん〳〵木の幹に卷いて見た。けれども血はとめどもなく滲み出るのであつた。それで人々は此橡の木は神樣で、戰爭に出て、我軍の應援をし、奮戰中敵彈にあたつて

名譽の負傷をしたものだと信じ、いづれも其血に染んだ白木棉を貰つて歸つた。而して其後お宮をも立てるに到つたと言ふ。（濱涉報告）

此れはどうやら爲にせんとする者の**トリツク**であつたらしいが、この血が出たといふ怪事件より、乳が出るとの迷信が生れ、それを盲信した婦人達の參詣を見るに到つたと考へられる。所がその中にはまぐれあたりにも効驗の著しい人々もあつたので、彼女等は御恩返しの意味を含めて盛んに宣傳を行つた。これが素朴な村人の心を風靡し、別當たらんと志すものゝ口車に乘せられ、まもなく社殿が建立されるに到つたと推察する。しかして第一世の別當はたんまり懐中を肥すや、よい時機を計つて、この權利を現今神習教權中講義上國德治氏に讓つたとか、口さがない人は噂してゐるとはいへ、此本尊なる橡の木は今でも植物學上保存の必要ありと呼ばれてゐる程であるからして、名木たる價値は充分に存するといはねばならない。然らば神靈を認められない以前に於てはどうかといふに、文化年間にあつては、

◇箱館から二里東、錢龜澤村から七八町山手に長坂といふのがある。此坂下に橡の木が二本ある。いづれも二三抱で、兩木の間は五六間で、その中間の枝はどちらとも判らないが、約五六尺斗りある。此枝の下に立つて見ると、私の頭より扇子一本程高い。此木の有る澤を鹽泊といふ。この

樣な名木もこうした草深い邊鄙な所に埋もれてゐる事とて見る人はもとより名を識る人さへ稀である。（松風夷談）

とあつて、著者蠣崎廣時より賞讃を博してゐた。又、安政年間に於ては、

◇西の丘原を降り、川に近い所に栃の木の連理なるのが有るが、此邊の人々はこれを連理木と稱す。此連理木兩株各二圍、高共一丈二尺、其枝を連る處左右跨間一丈、高さ五尺餘、枝幹鬱然として偃蹇數丈、實に世に稀な珍木である。（蝦夷實地檢考錄）

と見ゐ、市川十郎より珍木と評されてゐるだけで、當時はまだ何等の傳說もなく、單に名木とか珍木とか稱されて疲れた旅人の眼を慰さめてゐたに過ぎない。

此橡木は人里離れた所にあり且つは奇異な形態をしてゐたからこそ、餘生を保つことが出來たものゝ、もしも函館あたりにあり且つはすなほな生長振であつものなら、薪木にでもされてゐたか知れない。が兎にも角にも意地惡い風雷神にも嫉妬されないで、昭和の今日まで殘骸を保つてゐるのみでなく、道廳より天然記念物の一に數へられるとは何といふ冥加に餘つた老樹だらうか。

矢不來の赤松など

余は橡の木樣の事を述べたついでに、今少しく函館附近の老樹靈木を探つて見ようと思ふ。

矢不來の赤松といふのは、今の矢不來の花崗岩の鳥居から一町程距つた海岸にあつたもので、錢龜澤の橡木とは比較にならない程慘めな末路を遂げた。然し其の最後のほどを人間の口の端に殘してゐるだけを以て、せめてもの慰安とすべきであらう。

◇昔、某が海邊を通ると砂の上に一本の赤松が打上げられ、その上に天神樣の人形が鎭座ましました。彼はその人形を大切に持ちかへつて村人に話すと、天神樣が御來道といふので大變な騷ぎとなつた、それより二三日して村人がその海邊に行つて見ると赤松がひとりでに生へてゐた。此奇蹟を見た人々は早速天神樣を祭る事となつた。然るに一方赤松は人々より顧られず、骨折損のくたびれもうけといふ形でしよんぼり岬の鼻に、餘生を送つてゐる中に、明治の聖代を迎へた。が物質文明の毒氣はこの功あつて罪のない松にも影響した。といふのは、上磯町と木古內間に道路工事が起された事である。此の赤松はその妨害となるので伐採される事となつた。當時赤松は其幹三抱もある程生長してゐたので、わざ〳〵旭川から腕の秀れた樵夫を雇入れて、その赤松を伐り初めた。と、其樵夫を初め手傳ひの人夫もそれ〴〵病氣となつた。これから後は誰れも雇はれるものが無くなつた。しかし是非共切る必要があつたので、無理に土方四五人に命じて伐ら

せてしまつた。（茂別村飯田寛一報告）

これで見ると、赤松は魔力の示し方が足りながつたが爲にあへない最後を遂げたのであつた。その木がもう一度樵夫に崇るか、幽靈にでもなつて村人の目にふれたら、恐らく天神樣の傍になと祭られたものを。惜しい事をした。しかしこんな注文はよる年波のせいで髦碌した赤松には無理か知れない。この他、今は殘存してゐないが、かつては人々より賞讃せられたものに、思松、船魂の巨杉、舊大石の松、などがある。

思松といふのはもと箱館が宇須岸と一般に名稱されてゐた頃隨岸寺の境内にあつた。隨岸寺は若州の僧嘉峰なる者が建立したもので、長祿元年蝦夷の叛亂にあつて燒けてしまつた。がそれ以前はこゝの思松は頗る人々に崇拜せられたものであつた。

◇宇須岸（箱館）が全盛を極めてゐた時は毎年三回宛若狹の商船がやつて來たのであつた。そして問屋が海岸に軒をならべてゐた。其頃隨岸寺の開山嘉峰といふ僧が若狹から布敎の爲に此地に渡來せる際小さい鉢植の松を齎し、此れを境内に植ゑて置いた。所が此松が生成して大木となるや、其枝は何故か皆若州の方を向くのであつた。それで人々は思ひの松と號するに至つた。しかも此松は嘉峰和尙が遷化した時にはその後を追ふ樣に枯死してしまつた。人々はこれを見て奇異

の思ひにかられたといふ。後二世の寂峰和尙は此松枝を切取られ一體の醫王如來の像を造り、御堂を建立して祭つた。そして此れを枝藥師とつけた。然るに御堂の光が海上十里餘に輝き渡り爲にさつぱり漁獲がなくなつた。此堂は永正九年蝦夷の亂によつて類燒し今では只基礎ばかりしか殘つてゐない。（新羅之記錄）

とあるのみで、古老の口からついぞ聞いた事がない。

船魂の巨杉といふのはかつて同社の背後に在つて高さ五丈幹の廻り一丈七尺で大凡壹千年前に植へつけたものだと傳へてゐる。

◇七八百年前函館が南部や津輕地方の漁民の出稼漁場であつた頃、海上航行の漁船はいづれも此巨杉を目標として船を操つてゐた。後保延年間（西歷一千三百四十年頃）になつて漁夫達が此木の根元に祠を祀つて船魂社と稱した。（函館沿革史）

と見に、餘程の大樹であつて、萬木の間にあつて巍然と聳立つてゐたのである。

大石の松は今の山の上大神宮の傍にあつた大石忠治郎氏居宅地内にあつたからして、こう呼ばれたのである。之は高さ一丈ばかりしかないが幹廻り九尺餘で枝葉四方に分れ、方十五間を掩ふてゐた名樹であつた。しかも安正年間にあつては緣の色濃がで東西にさし出た枝は凡そ四間にも達して

ゐたとの事だ。この松に因んで、此町の通りを常盤町と名付け、諸國より來る旅客の眼を悅ばしめ、詩歌に屢々詠じられた程であつた。此松は又義經が腰掛けたといふ事よりして腰掛松とも言はれてゐた。所が惜しいことには明治十二年の大火に燃に失せてしまつた。

以上の樣にわが函館附近においても老樹に對する附會說があると共に巨木を伐採したが爲めに災禍を見たとの傳說も存してゐる。これは萬物靈氣說を信ずる一種の原始的宗敎觀より發生したものにちがひない。しかしたとへ事實はそうであつたとしても强ち一蹴することは出來ないものである。何故といふに學術上價値ある植物保護の必要が叫ばれてゐる今日、無智蒙昧な輩に對してはよい敎訓となるからである。こうした點に於てだけでも植物靈異傳說保存の意義があると信ずるが故に、余はあへて二三の例を擧げて大方の諸賢に批瀝した次第である。

夜啼石

今の實行寺の裏山松林の中に高さ五丈幅四尺二寸の苔むした碑がある。これを御經石、題目石、鷄冠石、夜啼石等とさまゞに呼んでゐる。もとは御殿山々頂にあつたものであるが、明治三十年函館要塞築設の折、移轉を命ぜられ、是非なく翌年現在の場所に動かした。其碑面には、

皇都沙門
浮木　龜（左花押）
鷄冠峰日持大聖人舊趾

大日天王
南無妙法蓮華經
大月天王

と記されてゐる。此碑は、以前にあつては高一丈一尺、幅九尺、厚八尺で鷄冠の形をしてゐたが、移轉の時に、運搬料の都合上、石工達が半分程に切縮め今の樣な達摩の形にしてしまつたのである。

此碑文について、

◇日持、永仁三年正月元旦本國駿州を發足し奥羽を經て津輕地に來り、數ヶ所の道場を設け、永仁四年五月津輕の石崎から、漁夫甚平なるものに案內を命じ、**ウスキシ**島今の函館に渡航して山に登り、今の臥牛山の四方を眺め其峰に在る鷄冠形の大石に、南無妙法蓮華經、其左右に大日天王、大月天王と墨書した。後文化十三年京都本滿寺の住職日龜渡航して其の還年の後年になつて消滅せんことを嘆き、石工をして是を彫刻せしめた。（函館山鷄冠石之由來書）

とあり、又市川十郎は、

◇南部大畑山伏大行院なる者がこれを靈夢の告によつて搜し得たと傳へてゐる。（蝦夷實地檢考錄）

と報じてゐる。

此等を綜合すると、日持の題目石を發見したのは山伏大行院で、其保存の爲に彫刻せしめたのは日龜といふ事になる。然らばたとへ碑文の文字が日持の眞筆であつたとしても墨書したものが何等の保存法が構ぜられなかつた以上、永仁四年より文化十三年まで約五百二十年の間、風雨のために抹消しないでゐたとは誰しも考へられぬであらう。況んや怪しげな山伏が發見したといふ事が殘つてゐる上からは、猶更日持の眞筆なるものが疑はしくなる。尙、私は、

◇題目石移轉の際一字一石經と思はるゝ小石が澤山出た。その二三のものが宮崎郁雨氏の元に保存されてゐた。（岡田健藏氏談）

と言ふ事を聞かされた。この石が果して一字一石經なるものとしたら、次の推察は强ち許されぬこともあるまい。則ち、我國の中世以降殊に鎌倉時代から南北朝時代にかけて僧俗の信者が相集つて法華經などを小石に書寫し、これを土中に埋める風習が流行した事は文獻にも見られる所である。而して和人が此地に移住したのは鎌倉末期よりである事は一般の定說である。この二つよりして、當

時法華の行者わが函館山に登り一字一石經を大石の下に埋めて祈願する所があつた。それを後世大行院なる者がはからずも探し出し、その大石に何かを記し日持に附會した事よりして、一般の人々にも信ぜられる樣になつたのであらう。これを利用して日龜なるものが更に前に揭げた樣な碑文を彫刻するに至つたのではなからうか。兎も角此碑文は後世の僞作たることは明かな事實である。

次にこの題目石が鷄冠に似てゐる所からして夜啼石といふ名が生れ、それより奇怪な物語が編まれた。

◇昔、日蓮上人の弟子に六人の傑僧がゐた。其中の一人に日持上人といふ頗る得道を授くるに巧者な方があつて、今から六百年餘り以前に函館に來た。上人は毎日方々を廻つて人々に佛の道を說いた。或る日函館山を巡錫されて、鷄冠峰の麓近くの宿に泊られた。所が其夜上人が床に就いた頃、遠くの方で人の啼く聲がした。それは如何にも悲しそうで何かを訴へて居る樣に感ぜられた。上人は不審に耐へやらず猶も耳をすまして聞くとその泣聲は女と赤兒の聲とが交つてゐるのであつた。情深い上人は、きつと路に迷つて難儀してゐるものであらうと、宿の主人に燈火を仕度する樣に言付けた。と主人は驚いて、

「上人樣、あれは決して路に迷つて居るのではありません。あれに就いては不思議な事がありま

す。實は今から少し前に、或惡い武士が、あの山の大石の前で小さな赤兒を負ふた女をふとした事から子諸共に殺し、其屍體を大石の前に埋めたのです。それからと言ふものは不思議にも毎晩今頃になると、あゝして泣く聲がするのです。恐しいものですから、誰一人お經を上げてやる人もない仕末です。」と涙乍らに言つた。

上人はそれを聞かれて暫く默想の後、

「よし、それなら明日愚僧が其の大石の所へ行つてお經を上げてよく弔つてやらう」と申され、翌朝早速山に登り、かの大石の前で有難いお經を上げ、尙其石の面に南無妙法蓮華經と御題目を書かれた。其後は全く泣く聲も止んだ。それで人々はその石を題目石とか夜啼石とか言ふ樣になつた。（彌生小學校佐藤忠三談、大久保清輯）

然るにこれとは全然別に、毎夜鷄の音を發したから夜啼石だと云ふたとの說もある。しかも此怪事はそれ以來文化年間まで續いた樣に傳へられてゐる所を見ると日持の祈禱は少しも効驗がなかつたらしい。則ち、

◇昔此碑は毎晩鷄鳴を發したが、文化十三年に京都本滿寺の僧日龜と言ふのが、碑面の墨書が滅するのを恐れて石工に彫らした。夫れが完成しない內に二人の石工が死んで、三人目に漸く出來

たそうだが、それもまもなく死んだ。それ以來鷄の鳴音も止んだ。（函館百珍）

こうなつてくると、どれが本來の傳說か、其眞僞に迷ふ。がいづれも小夜の中山の夜泣石に類した物語であつて、前者はいさゝか小才のきく賣僧である以上捏ち上げ相な靈異記であり、後者は鷄冠石といふ名稱から附會され相な怪談である。それに、いづれが本來のものであつても、問題は日持上人にある。私は日持上人の渡道を疑ふ以上、彼の眞筆なるものに對して一瞥をも與へる氣にならない。それと共に題目石が火成岩の一片である事實を認める以外に、從來の恭說には何らの信念をも置かぬのである。

善光寺の牛

「牛に引かれて善光寺參り」といふ諺もある如く、いつの世からか、善光寺に牛は附き物となつたのは、丁度稻荷神社に狐、八幡宮に鳩の例の如きものである。

此諺を生んだ傳說は有名な布引牛繪圖の由來である。この事については多くの人々の熟知する所であるが故に、余は略する事にするが、此傳說は善光寺の僧侶の才物が、寺の靈驗あらたかなるを宣傳し、以て其隆盛を謀らんがための一策としやうと考へて、今昔物語あたりの話を假借して捏ち

上げたものである。而して此布引牛の傳說をそのまゝ利用して、信徒の熱心なる後援を得んとした例が、信州ならぬ函館の善光寺にあつた。

此寺は明治廿七年九月東川町巴座脇に創立した西說教所に、明治三十一年二月中信州善光寺法務所を移し、翌年二月東川町に新堂建設の企圖なり、善光寺別院として函館宗教界に打つて出た。當時の住職前田智圓師は新寺の事とて有力な檀家とても少なかつたので、其維持たるや頗る困難の有樣であつた。所が如來の加護があつた見ゐて、好箇のドル箱が迷ひ込んだ。それは今は蓮の臺で樂しんでゐるであらう處の有名な函館善光寺の牛である。この牛は大いに寺の隆盛をきたしてくれたばかりでなく、僧侶達の鼻の下をどの位養つてくれたかわからなかつた。これは牛が無意識的に報恩したのであらうが、此牛を巧みに利用した前田智圓師の手腕も鮮かなものである。その由來を見ると、

◇抑々當善光寺別院は信濃の善光寺如來の分身を安置し、北海に佛の光明を輝かさん爲に前田權少僧都錫を留め、隨喜の信者と力を協せ、東川町に堂宇を立てんと既に計畫の際、不思議なるかな、二月六日最早燒き鍋に登るべき赤の女牛が、屠所に行く途中、梵鐘の聲を聞くや、御堂をさして驅け込み、命を助からんと御本尊の内陣に注き悲しんで伏してゐた所へ、あはてふためいて來た牧童達は、かの牛を引出さんとしたが少しも動かなかつたが、漸くの事でその牛を牛屋㋮へ引き歸る事が出來た。此時かの智圓師は如來に緣のある牛であるからして、殺されたらば其角を貰ひ受けてせめて畜生菩提の回向などでもしてやらうと思ふてゐた所が、幸ひにも牛はまだ存命してゐると聞いて、爰に斷然かの牛の命を助け永く佛地に養つたらば諸人結緣の一助にもならうと悟り、更に㋮に此旨をいひふくめたので、㋮の主人も大いに悅び智圓師の意見に從ふ事になつた。かくて有志の人々が集つて牛王堂といふのを建てゝかの牛を養つてやつた。

（函館善光寺牛王堂之由來）

とあるが如く、此牛は實によい場所に逃げこんだものである。住職は此牛を飼ふことになると、その牛の前に塞錢箱を置く事を忘れなかつた。それと共に函館善光寺牛王堂之由來なるものを里村宜藏なるものに編せしめ、これを遍く市中に頒布したり、或ひはべこぶしなる詠歌を作つて信者に唱へさしたりして此牛の事を盛んに宣傳し初めた。こゝにそのべこぶしなるものを紹介しよう。

◇一ツトセ　廣い世界に隱れなきミホトケは信濃の國の善光寺　ベコ〳〵ベコ　有難や
二ツトセ　不思議あまた有る中にこうナイカ東川町善光寺　ベコ　有難や
三ツトセ　店に下られ切賣のアカベコが神や佛に助けられ　ベコ　有難や

四ツトセ　世にも珍らし此べコはホンマカネ必らず轉じて成佛す　べコ　有難や
五ツトセ　威勢鋭き若牛がカケコンデ御堂の中に吠ゑまわる　べコ　有難や
六ツトセ　昔曳くのは婆一人　コノタビハ曳れて參るは數知れず　べコ　有難や
七ツトセ　何なく命を助かりてチクショウメ人より先に佛とは　べコ　有難や
八ツトセ　山で育つ牝牛でもカシコへネ里に下つて寺に來た　べコ　有難や
九ツトセ　これより遠き浦河でウラレタネ牝牛の佛になる果報　べコ　有難や
十　トセ　渡世家業に賣る牛をカンシンジャ助けるお寺の和尚さん　べコ　有難や
十一トセ　威勢盛にはやる店コロサズニ共に助ける㋕さん　べコ　有難や
十二トセ　似ても似つかぬ雪と墨ウレシイネ牝牛がすぐに如來なり　べコ　有難や
十三トセ　さても珍らし此牛はタリキダネべこ堂立てゝ住へする　べコ　有難や
十四トセ　知らぬ中なら是非もなしオバアサン寺へ參りて牛を見よ　べコ　有難や
十五トセ　後生知らずの婆さんオドロイタ牛を見乍ら寺參り　べコ　有難や
十六トセ　六波羅密はいざ知らずコノウシハ蒔いたる種で花を咲く　べコ　有難や
十七トセ　市中廻りの其時はビックリジャ音樂隊で寺に入る　べコ　有難や

十八トセ　はやる㋕の大店はハンジョダネ主人の是非が現れた　べコ　有難や
十九トセ　苦しみ參る赤べこをアツバレジャ助ける人は智識なり　べコ　有難や
二十トセ　人數集まる善光寺オテガラジャ牛も則ち智識なり　べコ　有難や

（函館善光寺牛王堂之由來）

これによると、此靈牛は音樂隊附きで市中廻り迄させられ頗る市中の人氣を沸騰さしめた。しかしこの宣傳は寺のみならずひいては㋕牛屋までも繁盛せしめたのである。

其後の牛の消息を訊ねると、

◇此怪事を聞いて「長野の善光寺の牛の生れ變りである」と言つて信者達が澤山參詣する樣になつた。私も當時家が東川町にあつたので、何時でも孫の手を引いてお參りをした。それから數年經つてその住職と信者達の中の篤志家が牛を伴ふて信州善光寺へ行つた。その時牛は前脚を折つてうや〳〵しく禮拜したそうだ。その牛骨は今でも函館の善光寺に大切に納まつてゐるとの事である。（六十七歳西田イサ談　西田秀雄輯）

私も三十九年頃此牛なるものに拜顏の榮を賜つた事がある。何でも妙にでぶ〳〵と油肥りに肥へた大きな牛であつた樣に記臆してゐる。が兎も角、明治の聖代にあつてさへ一匹の牛の奇談に對し

て、信州の牛の生れ變りだなどと根も葉も無い事が信ぜられると共に、善光寺參詣の際には一般の牛がどれでも疲れた時の樣に前脚を折つたのを目擊して、さも佛の功德を禮拜したかの如く言ひふらす有難やの連中もある位故、これが維新以前だとしたら、どんな附會說が行はれたか空恐ろしい氣がする。

函館の善光寺別院は牛でもつてゐたと噂された程であるからしてそのドル箱たる牛が死んでからは日に〳〵衰勢に傾いた事は著しいものであつた。而してその牛骨を祭つたのは恐らく牛の菩提を弔ふ意味であらうが、もしこれを以て挽回策の一助にしようとしたなら、笑止千萬といはなければならぬ。

（附記）此の牛が善光寺に飼養せらるゝに至つた奇談については、前田智圓師と㋮主人との間に前約されたトリツクの樣に思はれてしかたがないが、確證とてもなくそれに故人を傷けるに忍びないが故に明言をわざと憚つてをく。

駒ケ嶽の馬

駒ヶ嶽は一に砂原嶽、または内浦嶽、夷言ではカヤベヌプリと言つて、大沼湖上に雄麗な影を落し

てゐる活火山である。その最高峰は南西部にある駒ヶ嶽で高さ三千七百四十四呎に達する。此度の爆發によつて一汐天下に其名を揚げた。此駒ヶ嶽について、アイヌは左の如き傳說を殘してゐる。

◇昔九郎判官義經公がメシケツプ（目疋高蜘蛛）に敎へられ、昇天して島造神の許に至り、火を得て、蝦夷島に傳へ給はんとした時、天から炭燼を投下された。すると其燼が此岳とヌシヤンノホリに落ちたが爲に、今に至る迄燒てゐるのである。これ以前には蝦夷島に火がなかつたので食物を火で燒たり或ひは煮たりしては喰べなかつた相である。（蝦夷島奇觀、蝦夷風俗圖會）

これはオキクリミの神話を判官に附會したものにすぎない。然らば駒ヶ嶽の名稱について見るに、

◇昔、相原周防守季胤が、長祿年間蝦夷と戰ひ、矢盡き刀折れるに及んで、大沼に沈むに至つた。其時、乘馬が遁走して此山に登つた。それで人々は駒ヶ嶽と名付る樣になつた。然るに今に於ても、其馬が生存してゐて、時々朦朧たる姿を現はすとの事である。

（北海道志、函館支廳管内名所舊跡調）

と言ふ口碑がある。これを新羅之記錄や福山舊事記に照合するに、相原季胤は政胤の子で、彼が戰死したのは長祿年間でなく、永正十年である。しかも其場所は大館今の福山にあたる。して見れば、季胤は軍川で陣歿した政胤の誤であらうか。それにしても數百年たつた現代においても、その

馬が生存して姿を見せる事があるものかしら。兎も角此由來說は子供だましと言ふものだ。矢張此山とても、內地に於ける駒ヶ岳と同じく、其形が馬か或ひは三味線の柱駒に似てゐる所からして起つたのと思はれる。それとも古來此附近には屢々荒熊が出歿した所より熊ヶ岳となり、それが訛つて駒ヶ岳になつたのでは無いかしら。但しこれは余の茶化說ではあるが、前揭の口碑よりは少しかつかみ所があらうと言ふものだ。而して從來より駒ヶ嶽の爆發の前兆は頗る甚少だとの事だが、若しも此傳說における馬が、今度の樣な大噴火が起る場合に限つてのみ姿を見せて、人々に豫め知らして呉れたとしたら、どんなに有難かつたか知れない。しかし乍ら何の爲に姿を現はすのか何等傳へてゐないのが殘念である。

蝦夷狐と貉

北海道は狐の產地として知られてゐる。**アイヌ**は狐を**チロンノプ**或ひは**フーレツプ**と呼び、其毛色によつて斑狐、黑狐、白狐、赤狐等の名がある。然し、古くはどの狐も人を誑すとは信ぜられなかつた樣である。

◇松前箱館等蝦夷地に近い所の狐は性鈍にして、人を誑す事もなく、人を恐れる風もない。東蝦夷地**クナシリ**邊の狐は、猶更である。常に人家近く來て、ながしもとなどの殘りを喰ふ。此を見つけ追つかけて行つて、棒で打叩いても別に仇を酬ゆる事もない。それで人々は大雪の降つた時などを見計つては容易く狐を打殺したりする。（蝦夷廣覽）

◇蝦夷地には狐が多い。夷言では**フーレプ**と言ふ。然れども蝦夷山林に住む狐は昔から人を誑したといふ事を聞かない。實に奇妙な事である。（松前方言考）

これが狐の怪異談を生むに至つたのは、矢張和人の移住が段々數を增す樣になつてからであらう。則ちわが日本人は支那、朝鮮より傳つた狐談を奈良朝時代に旣に受賣りをし、地方に迄傳播せしめてゐた。そして狐が鳴いたり、狐が現はれたりすることを凶兆の一つとさへ信ぜられるに至つた。これと共に狐の妖異誌は益々發展し全國的に樣々な傳說を續出して行つたのである。かくて此迷信に盲從する無智な輩がこの地に移住するに及んで、いたつて鈍感だと稱せられてゐた蝦夷狐に對しても、何等かの怪談を附會せずにいなかつたとは考へられぬ。そして、それが文書に載せられる樣になつたのは天明度幕府の蝦夷地調査が行はれてよりであらう。此頃よりして狐の祟りといふ事が喧傳され、それに從つて狐を祭る風も起つて來たと觀察される。

◇松前で鐵砲によつて捕つた黑狐を專念寺なる寺に葬つたと言ふ。（蝦夷草紙）

◇文化三年、知内山から玄狐を得たことがあつたが、其後此玄狐が大いに崇をなして、種々の凶事が松前家に續き、且つ鯡獵もさつぱり無くなつた。（東海參譚）

◇蝦夷の奥地斜里と言ふ處は、蝦夷地東西の分境である。此地へ近頃漁場働方吟味のために、足輕木村萬作といふ者が派遣された。所が其藏の上に時々老狐が遊びに來て唾つてゐるのを見かけたので、彼は鐵砲で打たうとすると、傍の夷人達が、

「此狐は年經て神通力を以てゐるからして、打取るのは宜しくありません。」と強ひて留めたが、彼は少しも聞かずしてねらひ打ちにしようとした。然るに何故か火繩の火が幾度となく消ゑるのであつた。それで彼はかへつて激怒し、或日狐のよく寢入つたのを伺ひ、傍にまで近寄つてやつと一發打放した。すると狐はくる〳〵と藏の屋上を轉ぶと等しく忽ち馬に化してどつかへ飛去つた。これを見てよりかの足輕は大いに恐懼し、其夜からは少しも外出しなくなつた。その後は不幸續きで、蝦夷地掛をも退けられるに至つた。遂にまたしても彼は鐵砲で烏を打たうとして、その玉がそれて、板垣傳太といふ者にあたつた。彼は既に下手人として處罰される所であつたが幸ひにもその玉疵が淺く本人は助つたので、輕うじて罪を許されたといふ。これ全く狐の崇りであらうと人々は噂しあつた。（蝦夷風俗彙纂前篇）

この樣に狐の崇を信じて特に漁師等は、鯡漁の時などは絶對に狐といふ言葉を口にするさへ忌んだ。此箱館にあつても狐の崇を避くる爲に文政六年に黑光稻荷を建立した程であつた。

◇黑光稻荷の神體は黑狐の皮である。毎年四月の初午の日に祭例が行はれる。これについて町役人の日記には、文政六年三月、尻澤邊村に鰊網を乾して置いた所、一疋の黑狐がひつ掛つて斃れてゐた。それで早速町役所にこれを献上すると、役所では其年の四月に地内に稻荷を立て、黑狐の皮を神體とした。そして菊地重泰を以て其神職に定めたと言ふ。（蝦夷實地檢考錄）

こうした狐の崇りと共に狐憑きの妖異談も人々の間には編まれてゐた。その例として實行寺の小僧の話がある。

◇寛政十二年の冬、江差村の法華寺の小僧は、或娘に深く戀慕されたのをうるさがつて、箱館にあつた日蓮宗の實行寺に逃げ來つた。然るにはからずも狐に憑かれてしまつた。實行寺の住職はそれを憐んで、色々と加持祈禱を修したけれども一向その効がなく、小僧は毎日とんでもない事を口走つて、「自分は江差村笹山直滿といふ狐であるが人々は皆直滿の滿の字を瞞の文字に書誤つてゐるなど」と言ふのであつた。こうして日毎その狂氣が甚しくなつて行き、或日などは、

「自分は日蓮宗の名僧だ」と叫んだ。それで住職は驚いて、

「一體何といふ方で、何の爲に此の小僧をばかくは惱ませられるのですか。殊に此寺は御覽の通り檀家も少く、それに下男とても無い寺なのに、小僧が此頃の樣な有樣では本堂佛壇の掃除も思ふに任せず、萬事不自由でしかたが無いからして、どうか早々立去つて賜りたい」と懇切に賴み乞ふと、

「我は日蓮宗にて名を知られた妙善といふ僧であるが、余りに佛學に優れたのを慢心したので、かく天狗となつたのだ。それ故暫く此小僧の身體を借りて我存念のほどを悟らんと思ふが、其方の申す處もゝつともの事故、朝から晝過ぎ迄は其方の用事を調へ、夕暮から夜までは小僧の身體のあいたひまを見て、その身體を借り申さう。直滿の方も同樣に致したがよい」と告げた。はたしてかの小僧は其翌日からといふものは朝と晝との間は、不斷と變りはなくなつたが、夕暮になつて大鳥の羽音が寺の上に聞ゆると等しく、かの妙善が乘移り、經文や僧法に關する事を縷々と述べるのであつた。然しそれは中々以て小僧などの知つてゐるべき事ではなかつた。又直滿狐が憑く時には神通力に關する事を物語つた。それで或人が、神前に備へた神酒や人々の心願の事を訊ねた。すると彼は、

「たとへ遠國にゐて、信心を致す人の備へて吳れたものを口にしないとしてもちやんと備へたといふ事はわかるものである。又眞心をこめて祈る事は一々に自分の耳に入る。自分としては其願ひを叶はしてやらうと朝夕となくひたすら思つてゐるのだ」と答へたとの話である。それで去年寬政十一年から箱館が幕府の直轄地になつた所よりして此事が役人の耳に入つてはどうかと、檀家の人々も頗る迷惑がつてゐると、はたして人々の噂も高くなり遂に役人衆に悟られてしまつた。役人も餘りに不思議に思ひ、法華經の題目を書かせて見ると、直滿の乘り移つた時のは其題目の手跡が頗る美しく、妙善の移つた時のは筆達者で品があり如何にも名僧の手になつた樣であるが、小僧が本心に立ちかへつた時のはとても見られない惡筆であつた。此等の書は今若狹屋宗太郎といふものが家寶として秘藏してゐる。此の宗太郎は頗るの法華の狂信者だと人々から噂される。

（松風夷談）

これで見ると小僧はかの娘と一度は思ひ切つて別れたものゝ、再び彼女に對する戀情に驅られ、その結果一種の神經病にかゝり、かつて耳にした笹山狐とか妙善とかの名を口走るに至つたと考へられる。しかも此巷說は今尙內地によく存在する狐つきの話とほゞ同一のもので、どつか又借をした形跡が窺はれる。

以上によつて蝦夷の狐談を略記したが、すべて、內地に行はれた迷信をそのまゝ齎したものに過

ぎない。但し、特に黑狐を恐れたのは、**パチユラー**氏が、

◇狐のうちでも黑いものは、**シトムベカムイ**（神の惡漢）と呼ばれ最も尊敬される。

（アイヌの爐邊物語）

と報じてゐるが如き思想を、聞き傳へた和人が、古くより我國に流布してゐた狐の迷信とを關聯させ、和人の間に傳播させたものであらう。

次に箱館の貉について調べて見よう。

貉は**ムヂナ**と言つて、箱館地方で狸をさす方言である。貉と狸とは同じであるか否かの考證は動物學者にまかせる事として、安政の頃、箱館の高龍寺にも貉が棲息してゐて時々怪異を示したと言ふ。

◇高龍寺本堂の須彌壇の背後には代々の和尙の位牌が置かれて居た。その下に一匹の百餘歲を經た貉が穴居して居て、時々奇異な形を現はす事がある。（箱館夜話草）

此れについてはいろ〳〵な雜話符說があつたが、私はまだ詳しく聞かされてゐないからしてそれを例擧する事の出來ないのが遺憾千萬である。さりながら、狐ほど陰險ではないが、人を誑し、かへつて犬に見あらはされ、あはれな最後を遂げた貉の話がある。

◇寬政四年の春の事である。此箱館に政と呼ばれた料理仕出しなどをする一軒の茶屋があつた。此所へ土地で有名な富豪白鳥新十郎と言ふ者の番頭が、夜更けて遊びに來た。そして十六本も銚子を空にし、その上鰐腹肴を食ひ荒してから、小用に行くと告げて、裏へ出た。すると其家に飼つてゐた五六匹の犬が一度に吠へかゝり、遂に喰殺してしまつた。此の物音に茶屋の亭主は大いに驚き、一家の者と共にかけつけて、よく〳〵見ると白鳥家の番頭ではなく、一匹の年經た貉であつた。（夷諺俗話）

この話は、和訓栞や甲子夜話等に見ゆる說話と軌を一にしたもので、別に何らの發展も獨自性を持つて居ぬ所から見ると、箱館地方には貉談を生長せしめる動機が乏しかつたか、或ひは人々がそれにさまで興味をよせなかつたか、それとも貉なるものが至つて稀であつたが爲であらう。

忠犬義犬

犬は狐狸にとつては大敵ではあるが、人間にとつてはよき味方であり、時には人命を救助して吳れたりする。こうした例は古來より言ひふらされてゐるばかりでなく、名聲を竹帛に留めてさへゐる。特に蝦夷地の犬にあつては馬の代理をするといふ所からして、德川時代既に內地人より注目せ

られ、其忠實な行動は記錄に殘され、後人のよき教訓となつたのである。

余が爰に述べやうとする話は、實際の見聞談であるだけに、傳說として興味を伴はないか知れないが、教育上何らかの資料となるが故に、あへて紙面を埋めることにする。

◇明和五年四月五日。此日は空晴れ渡り長閑なる一日であつたので、四月八日の釋迦誕生に備へる餅の材料にする蓬を摘む爲に野に出る者もあり、又は山々へ薇を折るに行く者も多かつた。所が晝頃から一天俄に搔曇つて、霰交りの大風が降り、まるで冬の樣な寒になつた。それで近くの山野にゐた者は、すぐと家に歸る事も出來たが、山奥深く入つた者はいづれも寒さに凍ゐ、死んだ者さへ少くなかつた。その中に松前藏町の鍛冶で由兵衞の息子安五郎と言ふ者がゐた。彼は其の日大松前澤の奥の方に行つたが、常に可愛がつてゐた白犬を伴ふた。彼は大風霰になつたのであわてゝ家路にいそぐ途中、遂に凍ゐ倒れてしまつた。すると白犬は彼の襟元を啣へて無理に引立てるので、又もや起上つて歩き出した。こうして彼が倒れる度に犬に助けおこされ輕うじて神明澤の口までたどりつくことを得た。そこへ親の由兵衞が迎へに來て、大いに驚き早速彼を背に負うて歸宅したと言ふ。（松風夷談）

◇安永五年と覺ゐてゐる。松前から二十三里ばかり行つた所に蚊柱といふ寒村がある。春は村から餌をとつて生活をする。松前より西北の村々では餌を取りに行くのをば、追餌と言ひ、其村々に追餌場と稱して濱邊に誰々の持場と言ふのがある。丁度立春から三十日間を白寒と、その漁場へ餌の群來するのを**クキル**と唱へてゐる。彼等は春になると毎年餌の**クキル**のを待つのである。二月の初め頃、松前博知石町の支配方武兵衞の親類が、この蚊柱村帆柱石といふ濱邊に、餌を取るため丸小屋をかけてゐた。此丸小屋は棹十二本上を結んで下を廣け、管苫で覆ひ掛けたに過ぎないものである。こゝへ諸用あつてわざ〳〵松前より來た某なる者は、用も相調つたけれども、いつのまにか日暮になつたので、今宵は一宿して明朝出發するやうにとの主人の言葉に、某は草鞋を脫ぎ食事を濟して寢についた。所が某には松前を出立の砌、いくら追うても歸らないので是非なく伴ふた一匹の白の愛犬がゐた。犬は何かしきりに外で吠へてゐたが、後には小屋の内へ入つて來て某の夜着を啣へ吠ゐ出した。それで某は是には何か不思議があるのだらうと思ひながらも、犬を外へ追ひ拂つた。すると犬は今度は帆柱石の方に向つて吠ゐ、又もや内に驅け入り、しきりに衣服の端を啣へるのであつた。もうその時は夜も更けてゐたけれども、某は不安になり初め、恐らく此宿に何かわけがあるか或ひは家に急病人でも出來たんだらうと考へ、急に別れを告げた。主人が夜分だから是非一宿してからにする樣にとたつて止めた。が彼は出立の支度にかゝ

つた。その間も犬は草鞋を咿へて引くのをやめなかつた。某はそは〳〵と暇を乞ふて此小屋を出た。犬はうれしげに跡の方へ向つて吠へながら先に立つた。それで夜分であるに拘らず道がはかどり、濱邊を行くこと凡そ五六町ほどすると、不思議や、數千丈も高い帆柱石が忽ち崩壞し、今迄宿つてゐた小屋は粉微塵にくだけ、一人として助かつたものはなかつた。某は後を振り向き、暫くは茫然自失してゐたがやゝあつて犬を伏し拜んだ。かくて急ぎ松前へ歸つたと言ふ。

（松風夷談）

鬼人形

明治十三年以前迄は函館八幡宮は今の八幡坂の上にあつた。此宮は文安年間河野政季が宇須岸館を竣工するや、弓矢守護のために龜田八幡宮を分靈したものである。而して安永九年八日十三日始めて御輿市中渡御の式を行ひ、其後八月十五日を以て祭日に改め凶荒の外か隔年に祭典を擧ぐる事となつた。

八幡宮の祭は今よりもかへつて昔の方が盛大を極めて、神輿渡御の前日則ち八月十四日には各町より祭山（まつりやま）所謂山車の樣なものが境内に錺り置かれる。此事は今は無いが、維新以前は各町互に負けず劣らす祭山の製作に沒頭した。其祭山の中で最も市中の人氣を引いたのは船山であつた。た

とへば、

◇内濶町から出す所の船山の如きは鳳凰頭の屋形船で、船体は朱又は其他燦爛たる彩漆を以て塗り、さながら錦繪に見る處の龍頭鷁首の船の如く、長き五六間幅二間半位で、船飾りの彫刻は悉く金銀を以て鏤め、猖々緋に染めた帆は風を孕んで勇ましく、紫縮緬の幕は屋形を包んで奥床しく、其上には朱羅紗へ金糸銀糸を以て龍虎の縫模樣ある半幕を張廻し（是を水行といふ）艫の方にも同樣の羅紗或は天羅絨に金糸銀糸の艫かくしを下げかけてゐる。其他いろ〳〵の船道具が整へられ舷に押立てられし五色の吹流しは翩翻として風にひるがへり、舟柱の上には金の千成瓢が輝き、櫓の上には神功皇后竹内宿禰の人形を飾り立て、かの三韓征伐の有樣に擬へてゐる。實に其善美を盡した船山はいかに物價の安い幕末の當時に於てすら猶千數百圓を費したと云ふ事だ。

（箱館風俗書）

これに次いで人々を騒がしたのは辨天町の船山であつた。これは内濶町の如く鳳凰頭ではないが船体の構造裝飾具彫刻の彩色等は大体前者と似てゐる。しかし帆柱の下に大黑と蛯子を飾る所から蛯子山とか大黑山の名が出た。

扨て此等祭山について奇談がある、

鬼人形

◇昔――といつても幕末に、この箱館に大黒屋某なるものがあつた。性頗る多藝多能で特に、繪畫や彫刻にかけては非凡な腕前を持つてゐた。爲に町の人々はこぞつて種々な製作を賴みこんだものだ。彼とても好きな道とて早速人々の求めに應じて鑿や繪筆に親しむのをかへつて樂しみにして暮してゐた。或年の八幡の祭禮が行はれた時、色々な珍らしい祭山が出た中で、彼の製作した祭山が一番賞讃の辭を博した。それは大江山の酒顚童子の岩窟の洞門を赤鬼や青鬼が警固してゐる所をしつらへたものであつた。實に、それは見る人々に思はずぞつとする感じを與へないではをかない程**グロテスク**な作であつたので、祭が終つてもそれを取毀すのが惜しかつた。幸ひにも或物好きが多額の金を出して買ひ取つた。所がその人は晦日の拂ひにつまり、掛取人に、此鬼の人形でも抵當として取つて貰ひたいと談じ込んだ。丁度其折山の上町に心中をしたものがゐたが、男のみ死んで女は不運にも生命が助かつた。その爲か心中の片割れは噂にもれず男の亡念にとりつかれ毎晩惱まされるに到つた。人々は大に驚いて早々怨敵退散の加持祈禱や禁厭を行つたが、更に其甲斐あるべからずといつた有樣であつた。所が或人の考へから、かの鬼人形を戸外に立て置いてはどうかといふ意見が出て、急に買人が出來た。かくてそれを戸外に立てゝ置いた所再び亡靈も現はれなくなり、彼女はほどなく全快したと言ふ。（澁田翁雜記）

これは當時民間に行れてゐた**ヤマヒノカミヲクリ**なる風習があつた事を證する適例である。

◇松前處々の村落の境に藁にて人形を造り、或ひは鬼形のものを作りて立て又は草叢の中へ捨て置く是を病をくりと言ふ。（松前方言考）

さり乍ら鬼人形の話の筋は左甚五郎の龍や應擧の幽靈などの話と同じく眉唾ものに過ぎない。然しこうした例は古來洋の東西を問はずと稱せられる藝術家に對して附會され勝ちな巷談である。とはいへ、利殖にのみ忙がしい函館にも藝術の力によつて死靈を退散させた話が殘つてゐるとはいさゝか嬉しい氣がする。

兎も角この樣な奇談がある所から見ても八幡祭の祭山が如何に盛觀であり、衆目を惹くのに人々か腐心したかといふ事が察せられるであらう。

これが今では見られなくなつた事は時世時節とは言ひ乍ら、段々忘れられて行く民俗に對して、余は愛惜の念を禁ずるわけにいかない。それで鬼の人形の一話を揭げてせめてもの追想の一端としたのである。

發掘雜考

北海道は今尙考古學者に取つて幾多の資料を提供して呉れる。しかも未發掘のまゝに置かれてゐるものが隨所に散在してゐる。試みにこの函館を中心に東西の海岸に杖を曳いて見るならば一二里毎に石器土器の數々を採拾しうる程である。こうした發見は維新以前に於いても好奇の士の目を引かないではをかなかつた。その爲か考古學的記事が彼等の記行や隨筆の中より探し出す事が出來る。先づ和人渡道の確證ともなるべきものを調べて見やう。

古碑

北海道に於ける和人の最古の碑は、函館市船見町稱名寺に墓地にある貞治の碑で、これは高さ二尺八寸、幅二尺五寸で其下に臺石高さ凡そ一尺が置かれて居る。長い間風雨にさらされてゐたので唯僅かに彫刻の痕跡を止めてゐるに過ぎない。しかも此碑はもと角屋喜左衞門（或は榊ともいふ）なるものゝ屋敷内から發掘された。角屋は此碑を稱名寺に納めたけれども、久しく草叢の

中に埋もれてゐた。所が享和三年二月秦檍丸（村上島之亟）が之を搜出して供養を行つたのである。しかも檍丸は其著蝦夷島奇觀の中に圖錄し遍く人々に知らしめた。

◇寶曆二年八月榊氏（角屋と言ふ）何某の家の背後の山際に井戸を堀らんとして土を穿たせた所が、圖の如き碑が出た。そして其下から髑髏の入つた丹塗の壹尺五寸ばかりの小筥、革甲の金具、大長刀、木爪四所に九曜の紋付いた大刀の鍔を發見した。それでこれを稱名寺に納め、墓塔を立てゝ祭つた。しかし後又癈れて、草叢の中にあつたのを求め出し、享和三年二月朔日僧侶をしてこれを弔はしめた。（蝦夷島奇觀・蝦夷實地檢考錄）

◇今は昔大町の角屋某なる人、おのれが住居の裏に井を求めんとして、穴を深く堀らせた。多人數で立働いたので非常な深さになつた。すると大きい石に堀當てた。人々はやつと其石を取出して見ると、佛の形がある石碑で、頗る年代を經たものであつた。それを捨て置くことも出來なかつたので、檀那寺である稱名寺に納めた。今は觀音堂の傍にあるのがその古碑である。（澁田翁雜記）

右の碑は蝦夷島奇觀の圖を見ると、佛躰を双へ鐫り膝下に男女二人を刻し、文に『貞治六年丁未二月日旦那道阿慈父悲母同尼公』と記してゐる。此れによつても吉野朝時代に於て既に和人の

住居してゐた事が知られる。しかも埋没狀態より想像するに、此碑は鎌倉時代に於て此地に落ちた身分賤しからざる武士の墓標として道阿なる者が建立したものであらう。市川十郎も同樣の見解を下してゐる。

◇按ずるに、碑を立てたのは貞治六年であるからして、其道阿といふ人の亡父母は鎌倉の北條氏の代の人で、早くから此地に來てゐた家と思はれる。九曜の紋に依て其人を推定する事が出來るかも知れない。（蝦夷實地檢考錄）

此碑に次ぐべきものは戸井の岡部の館から出た碑であらう。これは文政四年の發掘したもので現存してゐないのが遺憾である。

◇戸井と申處に岡部澗といふ小舟のかゝる處がある。こゝに石碑があつた。役人衆が此碑を洗つて見ると唯、岡部六太夫六代孫岡部六左衞門季澄と言ふ名の所だけが顯然と分つてゐたとの事である。（松風夷談）

右岡部季澄は所謂渡黨で安東氏の旗本に屬してゐる部將だ。今の松前郡原口の館主として長祿元年には蝦夷と戰ひかへつて攻め破られた。この點より見て此碑は長祿前後のもので、かつて季澄が現殘する岡部館の主であつた頃のものではなからうか。然し余は此碑を實檢しない事とてよ

り以上明言するわけに行かない。

鰐口

古碑と共に價値ある史料は鰐口である。最古のものは小安村から發掘された岡部の鰐口である。

◇今は昔、小安村の某といふ人が畠を作らんとして附近の地を開墾してゐると、土中より奇怪なものを掘出した。これをよくしらべて見ると、佛堂に掛け奉る鰐口なるものであつた。しかして岡部六彌太奉納と誌してゐた。彼はそれを程近い觀音堂にかけて置いたが後わけあつて名主某の家に藏する樣になつた。（澁田翁雜記）

右の岡部六彌太は岡部六郎左衞門季澄六代の祖に當るが、此六彌太は渡道した事はない樣だ。して見ると六郎左衞門の別名か或ひは其一黨のものでは無からうか。しかしいづれにしても岡部氏と此地方とは密接な關係があつた證據である。とはいへ此鰐口とても現存してゐないからして、何とも力說しかねる。けれども文化十年頃石崎村字脇の澤（今宮の澤）の土中から出た鰐口は、和人住居の好箇の資料である。

◇脇澤山神、大山祇命を祀る。詞前に揭げてゐる鰐口は、徑五分五厘で疑識に、『奉寄進蝦嶋

脇澤山神御寶前永享十一年三月日施主平氏盛阿彌敬白』とある。（蝦夷實地檢考錄）

これによつても、永享十一年には石崎方面が神社設立に至る程に、和人の數が增してゐた事が肯かれる。

此等の他に、大野大日社奉納の鰐口は『康正三年三月吉旦、願主肥前四郎五郎、大工若州遠敷郡作右衞門』の銘があり、下國慶季が奉納した有珠善光寺の鰐口は寛永十五年のものであり、湯倉神社の鰐口には『奉掛藥師堂松前千勝丸敬白、承應三年正月吉祥日』の刻銘があるが、いづれも發掘したものでないからして省略する。

泉　貨

古錢は錢龜澤と戸井から出てゐる。前者は、

◇錢龜澤村、地名の起因は昔土中から瓶を堀出した所、其中に古錢が多く有つた事から錢龜澤といふ樣になつた。（蝦夷實地檢考錄）

とあるが如く、少しく疑問の點もあるが、後者は信ずべき價値がある。

◇文政四年、箱館の東方戸井と言ふ所から古錢を堀出した。それを洗ひ磨いた處、文字が分明

し、大觀通寶、開元、永樂、洪武錢であつた。それで早速公儀に申立るものがあつて、公儀ではこれを調べると凡六拾貳貫餘もあり、その他水晶、朱砂の類百點餘も發掘されたとの事である。

私も昭和二年八月十六日戸井濱中の遺跡を發掘に行つた時、小島といふ宿屋の亭主が、原木川上流の濕地で一箇の瓶を掘出し、その中から多數の古錢を得たと言つて、其殘部五十枚ほど見せて呉れた。それには、淳祐元寶、開元通寶、淳熙元寶、成淳元寶、至和通寶、嘉祐元寶、永樂通寶等、唐から宋に至る支那錢及び我國の寛永通寶等があつた。余は各一箇宛寄與されて、今尙秘筐の中に珍重してゐるが、此等の古錢は寶永頃の住民が藏してゐたのではなからうか。しかもアイヌ達は當時にあつては物々交換の狀態で何等泉貨の價値を認めてゐなかつたが故にかく多數に貯蓄してゐる譯はない。これは必らずや和人の手によつて藏せられたものにちがいない。かの文政四年出土の古錢も吉野朝時代に渡道した和人のものでは無からうか。詳細は發掘報告がない爲に單に推察に止めてをかう。

石　器・土　器

北海道原住民の遺物たる石器・土器等が古くより出土した事が記錄に殘つてゐる。而して此地に於ける考古學的事項に就いて最も早く報じて吳れた村上島之丞の蝦夷島奇觀には、色々參考になる資料を圖錄してゐる。

◇當別村――寛政十年三月氏神の小祠の傍から土偶を二三体掘出した。

◇**リユルリ**――**キイタブ**の中**シベツ**より西十里の山奥にあるが、此所の酋長**ショカヨク**は石刀を秘藏してゐた。

◇**シリサワベ・シヤナ・エトモ・クナシリ・カヤベ・アイロー・クスリ**等から土器石器が出た。

此等の遺跡の中、最近まで名高かつたのは函館の尻澤邊である。此地については先に市川十郎が、

◇尻澤邊は昔より住民が有つたと思はれる。何故といふに後世往々雷槲・古陶器・石弩鏃等を出す點よりも察せられる。（蝦夷實地檢考錄）

と、又栗本鋤雲も、

◇箱館山に沿ひ、左に廻れば尻澤邊と言ふ漁村がある。日々市中に呼び販ぐ五十集（いさは）と稱する魚商は、大抵此所から出る。其山に接する所を谷地頭と呼ぶ。此に往古土人の棲んだ墟があつて

多く殘缺した陶壺盂碗の類を出す。又雷斧雷槌の屬も雜つてゐる。始め美濃國竈山の陶工豐次なる者が官命に依つてこゝに移り、窯を造らうとして、斜崖を崩した時、料らず此墟に中つて多數の土器石器を堀出したのである。此等のものは蝦夷地のいづれに於ても出る所であるが、試みに蝦夷の古老に問ふと、皆**コビト**の碗又は皿だと言ふに過ぎない。（匏庵遺稿）

と報じてゐる如く、此邊はその頃より豐富なる遺物包含層として知られてゐた。今ではほとんど**絶滅**してしまつたが、私の少年時代に於ても、行けば必らず石器土器の數片をまたゝく間に採拾しゐた程であつた。それが何等保存法を構じなかつたとはいへ、今日の如き狀態に陷つた事は考古學者にとつては慨嘆に耐へぬ所である。とはいへ此地より出土したものゝ大半は市立函館圖書館土俗室に收藏せられてゐる事を以て、せめてもの幸ひとしなければならない。

尻澤邊と同じく旅人の注意を促したのは熊石の遺物である。

◇熊石と言ふ所で先年（天明四年前）髑髏を掘出したがその大きさは醬油樽ほどもあつたといふ。其棺の側から青石の斧の形に磨いたのが多く出た。それには柄などを通すべき所に穴の形が殘つてゐた。又それを磨いたと見ゐる砥石もあつた。此れは實に刄物などを磨くに頗る調法なものであつたが、惜しい事にはその石を打割つて方々へわけたとの事である。予も其青石の

斧を見たが質が稠密で甚だ堅牢な石で、いかにも昔鐵などの無い時代には、此れで物を割つたと思はれ、又先を指で引いて見ると、今の鉞とかはりがない。これを世間では雷斧と言つて天から降つた樣に心得てゐる者があるが、是を見るとまさしく人の手になつたものだ。其傍から出た髑髏は深く秘してゐる事とて相知れない。（東遊記）

此熊石からは今でも石器土器が發見せられてゐるが、實際に發掘作業は行はれた事が無い樣であるから、好奇の士は宜しく今の中に調査すべきであらうと信ずる。

六、義經傳說考

義經再興說

源義經は頗る人好きのする英雄であつた。然し、その運命は終始數奇を極めてゐた。それだけに**ドラマチツク**な要素を含み、且つ英雄不死說を生ましむる必然的可能性を加入した。爲に、武勳赫々たる彼の行蹟をかへり見た時、熱情的な判官贔負は義經記を衣川の條で終幕とするには、余りに情感に於いて忍びなかつた。所が幸ひにも、**アイヌ**人は古淨瑠璃『御曹司鳥渡り』を語つてゐた。又恐らく戰敗した東北の落武者達の中には自ら義經也と僞稱して渡海したゝめか、或ひは牽强附會な古老の說話によつて釀成されたらしい義經に關する口碑說話が奧州蝦夷地の各所に存してゐる。而かもこれに對する土人の信念は動かすべからざるものがあつた。

此事は、義經崇拜者にとつて野狐が寶珠の玉を抱いた感があつたらう。かくて担ち上げたものに、正德二年には有名な馬場信意の義經勳功記があり、享保二年には加藤謙齋の鎌倉實記があり、

更に享保十三年には馬場信意の義經記標注が出て、義經再興說が盛んに行はれ、洛陽の紙價を高からしめた。この間、又しても義經の口碑傳說は續々輩出されたことであらう。かくて幕府の蝦夷地踏査が行れた際、近藤重藏は、蝦夷人に崇拜さるゝ義經の祠を日高平取村に建立した。これは彼が蝦夷人を鎭撫の一途に資せんが爲であつたと思はれる。

この祠は義經人夷說を後の世迄有力ならしめる一因となつた。即ち大正の御代に入つて迄小谷部全一郎氏は『成吉思汗は義經也』と言ふ書によつて云々されてゐる位である。この樣に二十世紀の現代にあつても、義經は人々の英雄崇拜の心理に喰入つて、種々の方面に發展して行こうとする程であるが故に、過去における彼の傳說は如何に各地に喧傳され、人々の信念に執念くからみついてゐたかゞ想像される。しかも戯作者達に脚色された義經蝦夷軍記や義經一代記等の繪本が飛ぶ樣に賣れたのもゝつともの事と肯定される。實際余としても若き血の燃ゆる頃迄は義經を平泉で殺したくはなかつた。あゝも權謀奇策の彼があつけなく亡びたとは信じきることが出來ない何物かゞ余の心底に黏の樣に粘ばつてゐた。然し今にして思へばそれは余の舊式な英雄崇拜熱のさせた爲であり、且つ最も**ドラマツチカルなセンチメンタリスト**であつたが爲である。

故に過去に於ける余と類似の心情を抱かれる若人にとつて、次に掲ぐる義經の口碑傳說は何等かの投影を與へる事と思ふ。但し其の蒐集せし全部を掲ぐることは紙數が許さないが故に特殊なものをのみ撰んで抄錄する。

義經とアイヌ文字

義經が渡道した話は早くよりアイヌ人の間に輸入されたらしい。則ち板倉源次郎の北海隨筆（元文四年著）の中に、蝦夷淨瑠璃の大意を錄して、

◇義經は幼年の時に小船に乘つて蝦夷へ來た。そしてその酋長たりし八面大王の娘とねんごろになつた。所が義經は大王が狩獵に去た隙を伺つて、大王秘藏の虎の卷物（魔法の書）を盜んで小船に乘つて日本に逃歸つた。大王は狩獵から歸つた後でそれを知つて大に驚き、早速義經の船を追つたが津輕附近で暴風にあつて、もとの地に吹きかへされた。

と見えてゐる。これは『御曹子島巡り』や義經記中の節をとつたものであることは明かな事である。これを白老アイヌの古老から聞いたと言ふ說話によれば、

◇アイヌは義經をばヨシツネカムイと稱し、建築法、器具の製法使用法、殊に熊狩に付いて秘法を傳授した神として崇拜してゐる。此義經が、或日の事、アイヌの大酋長の許を訪れた。惡僧酋

長は狩獵に出ゐて、彼の秘藏の一人娘が留守をしてゐた。これを見て義經大いに悅んで『娘に自分は色々な魔法を使ふ事を知つてゐるが、貴方の父上には到底及ばない。ついてはどうか其秘藏せられてゐる魔法の書物一卷を拜見させてもらいたい』と賴んだ。彼女は父が不在だからと言つてことはつたが、義經がいろ〳〵と嘆願したので、彼女はとう〳〵否みかねて『ではこゝで御覽なさい。そして見たらすぐかへして下さいよ』と承知をして、奥より父の秘藏の一卷を持出して來て、義經に渡した。彼はうや〳〵しく受取り、それを一覽する樣な振をしてゐたが、娘の隙を見るや、それを手にして戸外に逃れ、海邊傳ひに一散に走つた。娘は女の足の事とて、到底彼に追ひ附く事が出來ないのを悟り、唯泣き悲しむより他はなかつた。一方山に狩に行つた酋長は烏の啼き聲によつて留守中に何か變事が起つた事を知り、急いで歸つて見れば、すでに義經は秘藏の一卷を盜み出してはるか沖の方へ乘り出してゐた。酋長は直に小舟を擁して義經を追つた。所が酋長の舟は一櫂こげば千里を走ると言ふ舟であつたので、たちまちにして義經に追ひ付かうとした。義經は魔法を以つて海に山を作つて酋長を遮つた。而し酋長は少しも恐れず舟より下りて追ひかけ又もや義經を捕へ樣とした。義經は今度は酋長の眼前に大沼を作つた。酋長は水上を歩み得る草履をはいて迫つた。それで義經は斷崖絕壁を作つた。こうしてゐる中に遂に酋長は義

經の行方を見失なつた。此時義經が持ち去つた魔法の一卷とは即ちアイヌの文字の總てを記載した寶物であつた。其後つひに其行方は不明になり、爲に今日のアイヌには文字と言ふものがなくなつたと言ふ。（アイヌの足跡）

これ等は前記の古淨瑠璃に御伽草子流の怪談を加味したものであつて、しかも明かに和人の手を經てアイヌ人達に傳はつたものであらう。それが又アイヌより直接の出稼の和人の耳に報ぜられた。しかもそれら和人は歸國の際には土產の一つとしてまことしやかに多少の自個流の脚色をも加へて家族や和人に得意然と物語つたと思はれる。

義經と津輕海峽

義經が蝦夷に來たと言ふ證據ともなるべき口碑が幾多存してゐる。則ち渡道の解纜地たる三厩より探つて見やう。

三厩

◇義經公は蝦夷へ渡らんと、此三馬屋が岬に來られた。所が波風激しく、渡る術もなかつた。それで義經は一心に觀世音菩薩を祈り奉る事三日三夜にして感應があつた。即ち觀世音は白髮

の老翁と變現して、義經に三疋の龍馬を與へ、此馬に乘つて渡るべしとお告げになつた。義經感涙にむせんで海邊を見れば、三疋の龍馬が嘶き來つた。それで是を捕へて岸につないだ。それで此里を三馬屋と名附るのである。其の龍馬の蹄の跡は今も巖山に歴然と殘つてゐる。

（龍馬山觀世音菩薩緣記）

◇義經は龜井六郎、伊勢三郎等と共に、其馬を三ヶ所の岩窟につないだが故に三厩の名がある。（津輕のしるべ）

◇三馬屋の海岸に大きい窟がある。是所に各高さ六尺餘横五尺ほどの穴が三つ開いてゐる。土人の話では、義經公が蝦夷へ渡られた頃迄は漁家ばかりで、馬などを入れるやうな家がなかつた。それで此岩穴へ三匹の馬を入れた事よりして三馬屋と言ふ樣になり又は厩の文字も書くのだ。（東遊雜記）

◇三馬屋は源延尉蝦夷落の時、馬を此岸の岩屋に殘し置き給ふ。土人は後々迄も飼ひ置いたとて、御厩の號がある。又岩屋に三つの大穴があつて馬を三疋つないだが故に三馬屋ともいふ。

（天邊飛鴻）

◇此驛三厩と稱する事は、義經蝦夷へ渡海の爲從者三十四人馬三疋を具して此浦に來たられた

時、漁家の伏屋ばかりであつたので馬を入れる處もなかつた。しかるに幸にも岩穴があつたからして三匹の馬を入れて風待ちが出來た。これで三馬屋浦と言ふ樣になつたと土人は物語つた。（友恭君蝦夷記行）

此等の說は何れも三厩と言ふ名に附會した後人の說話である事は明かである。此地を中心に、

龍馬山義經寺

◇義經將に海に渡らんとする時、常に帶してゐた太刀の目貫の金を以つて、御丈一寸餘の正觀音を刻んで巖上に安置し奉つた。（龍馬山觀世音菩薩緣記）

◇九折數百步上なる山に登り、蝦夷の地を見やつて、義經公は首にかけられし一躰十一面觀世音の像を此所の古松の枝にかけて祈られた。（蝦夷葉那志・津輕のしるべ等）

甲石、鎧石

◇義經程の英雄でさへも、釜澤村に出發された頃は嶮岨の辛苦に耐へず、甲を脫いで海岸に脫がれた。その石を甲石と言ひ又上宇鐵へ出て龍飛岬へ到着した時は、鎧をも投げ捨てた。その岩を鎧岩といふ。（蝦夷葉那志）

龍飛岬

◇義經公大岩の上にて帶をといて、向ふへ泳ぎ渡らんとした時、つないで置いた馬が龍馬と化けてその場へ飛來つて、主從を騎せて蝦夷島へ飛去つた。それで此處をば龍馬岬と言つたが、何時となく馬と言ふ訓を省いて龍飛と言ふ樣になつた。（蝦夷葉那志）

等の口碑が存する。かくていよ〳〵蝦夷島に向つた義經一行が海峽を渡つて松前に入る迄に、色々な奇談を生んでゐる。

矢越岬

◇こゝは白神岬と箱館の間にあつて昔より一の邪鬼が住んでゐて、常に航海を妨害してゐた。それで義經は先づその惡鬼を退治しやうとして、その魔物に對してめくらめつぱうに一矢參らすると、始めて海路が開けた而して其矢ははるか海峽を越へて蝦夷地に達した。故に矢越岬と言ふ名が付いた。（蝦夷舊聞・蝦夷風俗彙纂後篇）

と言つてゐるが、矢越なる地名は、義經をして鎭西八郎はだしの弓矢の達人とした。又義經は渡海の際に車櫂なるものを發明してゐる。

判官の車櫂

◇義經蝦夷へ渡る時一つの車櫂を發明された。これは舟の中に車を仕掛け、車を動かせば二丁

の櫓が一度に動く樣になつてゐる。（快風船涉海記事）

◇此車櫂は舟の兩側に立て、其柄を一人して片手一挺づゝ兩手に握り、車を手繰る樣に又櫓をこぐ樣に用ふるのである。（津輕見聞記）

此兩說を見るに、前者は車櫂の何者かを深く研究せずして、車と言ふ事より想像して報告したもので、後者の方が眞に近い。然し義經が考案したのでなく、後人が彼よりヒントを得て作つたとの話もある。

◇世に判官、八面大王の女に通ぜられた時、大王が怒つて追ひかけたので、彼は長刀を櫂の代りとして用ひて、やうやく虎口を遁れた。今の車櫂は其遺風である。（東蝦夷夜話）

所が全然義經と關係がない樣に思はれる說もある。

◇文化五年七月十五日、鎌倉將軍賴朝が奧羽の藤原泰衡を追討せられた時、津輕糖部より多くの落武者が渡海した。彼等は薙刀を船舷に結び付け櫓櫂として用ひた。是れが蝦夷ヶ島に於ける漁船の車櫂の根源である。（松前舊事記）

さりながらこれとても眉唾に思はれるが判官車櫂程怪しく無い。

義經と箱館・松前

三艘を發した義經は直に松前に行つた樣に傳へられてゐるが、彼が箱館に立寄つた事が見にてゐる。

船玉明神

◇義經はやうやく海峽の半ばを過ぎて一息ついた頃、突如として暴風雨起り逆まく怒濤は船を呑むばかりの有樣となつた。是に於て義經は舷に立つて大いに船靈明神に祈願をこめた所、幸ひにも効驗あつて風治まり箱館の港に着くことが出來、義經はやうやく陸地をふんだ。義經は土人からこの地に船魂の祠があるのを聞いて直ちに參詣をして、大いに海神の奇瑞を感謝した。其時彼は非常に渴を催ふしたので、どこかに清水はないかと、探し廻つてゐると忽然として岩の上に童子現はれ、無言のまゝ指示した。そこを見ると清水が滾々と湧出てゐるのだつた。義經は感涙にむせんで、日照りにあつた鯉の樣にその水をぱくついたのであつた。後世これをば土人は船玉明神の洗濯水だと言傳へた。が今ではその形駭さへ見あたらない。又明神の舊社をば後世波分不動とも呼ぶ樣になつた。（蝦夷實地檢考錄）

◇浪分不動　傳へいふ義經公が難船にあつた際に不動の尊像舳先にあつて波を分け玉ひしか、此處に至つて尊像を拜せし故に浪分不動と言ふのである。（箱館夜話草）

義經腰掛の松

◇昔函館名樹の一つで、山の上町大石忠次郎氏の居宅內（現今の船見町の山の上大神宮東北側向ひ）に在つたが故に、人呼んで大石の松とも言つた。是れは數百歲を經た老樹で、幹の廻九尺餘、枝葉四方に分れ、方十五間を掩ふてゐた。義經來函の際に腰をかけたものである。惜しいことに此松は明治十二年の大火で燒失した。（函館沿革史）

辨慶の足跡石

◇箱館八幡宮の石の華表の下に辨慶の足跡がついた石が埋めてある。（箱館夜話草）

松前に於ける義經の遺跡としては、海渡山阿吽寺がある。

阿吽寺

◇扨て松前の阿吽寺は海渡山といつて、義經が此地へ、渡海した時に先づ淸地を見定めて、一宇の寺を建立した。そして自分の像を彫刻して、上の山に納めて置いたが、その像は何時か地藏と呼び、その山を地藏山と言ふ樣になつた。（蝦夷葉那志）

所が松前家記には此寺は、その草創を永正十年とし、實に義經死後三百二十余年を經てゐる。又地藏山の堂宇の建立は蝦夷實地檢考錄には天正七年としてゐる。が兎も角いづれにしても松前家が渡道以後と見るべきであらう。

來年岬と辨慶岬

松前より義經がいかなる道を取つたかに附いて、松浦武四郎は次の如く述べてゐる。

◇義經主從はわづか十余人程で、奥州津輕の三馬屋から、今の松前の湊（昔は津輕津）に渡つた。是より此處彼所とさまよひ、東部沙流の邊に着き、**アツマ**と言ふ川筋へ入つて、夷人の家に滯留した。こゝで酋長達を集め、再び西の方に越へ、今の江差、熊石、太田等を過ぎ、島牧、歌棄、石狩から北蝦夷へ渡つたと思はれる。（蝦夷葉那志）

彼の此說は確に、傳說口碑をたどつて綜合したものであらう。それほど、松前以北には義經一行の足跡が殘つてゐる。

後志國

辨慶岬

◇義經が辨慶と共に異邦へ渡つた所で、こゝに辨慶の甲石と言ふのがある。（正德蝦夷地風俗書上・快風船涉海記事・夷諺俗話等）

◇和人の說に昔時辨慶此崎にて具足を干す故に此名が有る。（蝦夷地名解）

◇世俗傳へ言ふ。昔義經と辨慶が奥州から蝦夷地に入り、更に此岬から出帆して異邦に渡る。依つて辨慶岬と稱する。此岬の附近壽都島牧の間、道路の北方に岩石から成つた土俵形の物がある。是は辨慶が『**アイヌ**』と相撲をとつた處である。（北海道史蹟名勝天然紀念調査報告書）

◇私も小學校の遠足などで度々行つて見た。辨慶と義經が角力をとつたと言ふ跡がある。百年程前迄は歷然と土俵があつたそうだ。そして義經になげられた辨慶が尻餅をついたと言ふ。成程尻の型の通り凹んでゐる。それから辨慶の足跡がある。長さ一尺位で、幅五寸位の橢圓形二三尺をき位に歩いた形になつてゐる。（壽都町山登久雄報）

この地に對して、窮髮紀譚の著者は、

◇蝦夷地に辨慶崎と言ふ所があるのを以つて、義經渡道の證據としてゐるが正に世人の誤りで蝦夷言葉で**ヘンケル**と言ふ言語である。右の地は實際**ヘンケル**崎で辨慶岬ではない。

と斷定してゐる。又永田方正氏は北海道蝦夷地名解で、

◇**ペレケイ**——破れたる所の意で和俗『**ペレケイ**』を訛つて『**ベンケイ**』と言ひ、遂に辨慶を附會したのは笑ふべきことで、是と同じ地名を北見國知床岬にもある。

と一蹴してゐる。猶、松浦武四郎氏は、西蝦夷日誌に於て、

◇又辨慶が甲冑を曝せし處だとて辨慶岬とも言ひ又**マレイ**岬とも言ふが其意味は不解である。（地名解）此處に辨慶の角力場と言ふ物があつて幅凡そ十余間で土俵の樣に丸く土を積上げてゐるが是は恐らく土壘であらう。上に物見臺とて小山がある。こゝより義經が物見をしたと言ひ傳へる。又辨慶の粟畑、糠の森とて粟糠を拾つた小山がある。余は此處を暫く歩行してゐる中に土器の破方三四箇拾つた。頗る古代の物で、内地の行基燒の類である。

と報じてゐるが、角力場と言ふのは明かに**アイヌ**の Chashi-kot（砦跡）たる事を證してゐる。

來年岬

◇辨慶が異邦に渡る時來年又來らばと約した所で、辨慶の太刀かけ岩がある。

（蝦夷舊聞、夷諺俗話、蝦夷葉那志等）

永田方正氏に從へば、

ライニ　枯木の意

昔枯樹林ガアツタガ故ニ名付ケルノデ、和人ガ來年ノ文字ヲ充テ正德年間、地圖ニ既ニ來年ノ文字ガアル。和人ハ來年ノ文ニ據ツテ義經ニ附會シタノデアル。今世雷電ノ文字ヲ充テ遂ニ山ノ名ト誤解シ雷電山ト言フガコノ樣ナ山ハナイノデアル。（北海道蝦夷地名解）

と一笑に附してゐるが。辨慶岬や雷電山に附いて古老は面白く語つてゐる。

◇べんけどそれ義經樣ど、今のべんけさきで角力とたして暮してゐるうちに、**メノコ**が立派な卷物もてるごとわがで、よしつねあー、それは折あたらとゐべどもで、二年ばかり**メノコ**ば嬶ねしてだど、或どきね、とう〳〵そればとつてよしつなしど、其刀掛だ岩がね、ほんもんどおんなしでおらの若けいどきあゝよぐそご通れば、たでがら見でもよごから見でも刀掛とおんなじだ來年もくゐて雷電といふだど、それから**メノコ**は卷物とられだんで一車で三里も走しる寶船で追つがけだどもとても追ひつがねんで、今の御神威の岬で舟ば沈めで海さ入つた。すたけやくやし一心が岩になつてそごさあらはれたんだと、その岩まだうそでも何でもねや、ねほしかぶつて衣きた形でおんなじだ。それで昔から女ん子を通せば大しけになるしきや、女ん子は通さねやのんだ。まだそご通るどぎどんな舟方でも帆下して通つたもんだ。或時ねお上の御威光で、これさ鐵砲うつたきや、魂や脱けで、どごさが飛んで行つたんだと、今迄鳥の糞一つかけ

ねのね、それからつてもんな、烏の糞で眞白だ。其魂や津輕さ來たと言ふ事ば、そごの名主さ夢見せたんで、初で津輕さ飛んで來たごどわかつた。松前の御神威さんが來たんで、それから と言ふもな津輕で鍊とれる樣ねなつた。（壽都町山登久雄の八十歳の祖母之談）

この一話によつて來年雷電の地名に對する義經の附會說が如何に他の口碑と錯雜し脚色發展されたかゞ察せられる。口碑もこゝまで行けば口碑の域を超へてしまつて立派に民譚となつてゐる。

義經神社

余は、日高國沙流郡に足を進めて見やう。こゝは小谷部氏一流の義經崇拜家より信ぜられてゐる義經の社と居趾があるので名高い。しかしその社は、三度遷されてゐる樣である。

◇義經社は享和元年迄**シノタイ**（**シヌプタイ**）にあつたものを**セウクウシ**に移し、又近年會所元に移した。（東蝦夷日誌）

◇義經の祠はもと**シノタイ**の東奥山にあつていつも土人は木幣を奉つて尊敬してゐたが、享和二年中、比企可滿と言ふ人が其祠を乾山に遷した。（野作東部日誌）

其社には義經以外の神をも合祀してゐた。

◇沙流會所の乾山を開いて、義經を祀る祠がある。前殿には義經、稻荷、辨天傍の小社には金毘羅、白鹿明神を祭つてゐる。白鹿は昔土人獵して白鹿を得しによつて神とあがめるのである。（野作東部日記）

◇小山の中腹、義經社殿合殿辨天、傍に天滿宮蛭子社がある。（東蝦夷日記）

これらの神々はいづれも和人の崇拜する所の神で、中でも辨天、蛭子、金毘羅は海事に關係のある神である。又白鹿明神といふのは和人が其の附近に**ユクレヲマナイ**（鹿の糞多き澤）**ユクバシユピナイ**（鹿奔に細谷川）**ユクオマナイ**（鹿のゐる澤）**ペサウンコチ**（鹿交尾する谷）等といふ古來鹿の居た證據ともなるべき地名よりして、祭る樣になつたものであらう。猶義經の神体について考察するに、松浦武四郎は西蝦夷日誌においてこれは一尺二三寸の木像であると述べてゐる。又久松義典氏の報告にも、

◇平取村字**ハヨヒラ**、沙流川に沿ひ高數尋の崖頭に一小祠がある。義經社といふ。中に源豫州が甲冑を裝ひ弓箭を携へた木像を安置してゐる。像の裏に「寛政十一年巳未八月廿八日、近藤重藏藤原守重、比企市郎右衞門藤原可滿」と刻み底に「江戸京橋佛工師〇〇」と記してゐる。（拓殖要覽）

とあつて近藏重藏が寛政十年蝦夷地探險の際土人達が義經を崇拜してゐるのを親しく見て、懷柔策として企てたものと信ずる。此事については安政三年既に痛論したものさへあつた。

◇**サル**會所に至つて投宿した。此地には鰮、海鼠、昆布等が産する。しかし鮭漁はない。運上金二百兩位のもので、漁が少い割に人口が多い。則ち夷家百九十九、夷口千百十六人である。此地では源判官を祭ると言ふを兼てから聞いてゐたので、支配人を呼んで尋ねると、

「夷人は**ヲキクルミカムイ・シヤマイクル**と言傳へて尊んでゐる神があります。然し如何なる神か判りません。何でも寛政御領の節近藤重藏・最上德内外に松前に生れ蝦夷語に通じてゐた上原熊次郎と言ふ三人が相談して、**ヲキクルミカムイ**をば義經とし、**シヤマイグル**をば辨慶と定めたのです。又此地に祭る樣になつたのは最上氏の著した藻鹽草と言ふ書にも見ゐてます」と答へた。それで私も重ねて、

「では此二神を他に祭らないで此地にだけ祀るのは何か理由があるじやらうか」と問ふと、支配人は再び、

「此二神を尊むのはいづれの**アイヌ**も同じです。別に此地に限つた譯のものじやありません。それ故、　これも彼三人の謀と思ひます」と告げた。これによつて見ても源判官や辨慶に關す

る確證といふものが見當らない。それに又此神を此地に祭るべき理由とても別に有るのではない。實際此祠はつまらないものだ。然しながら義經公は不世出の智勇を以て先づ木曾を斃し、次いで平家をも亡ぼした。とはいへ其後はこれぞと言ふこともなく徒に手を束ねて高館で死んだ。たとへ蝦夷地に遁走したとしても、何故この地にのみ祭るのか其理由がさつぱりわからない。たとへ**アイヌ**達が色々の事をいふとしても、それらはいづれも夷語の事とて信ずる譯に行かない。故に恐らく祠をこゝに祭る樣になつたのはかの三人のもの好きから出た事であらう。公の祠は會所の後の岡にあつて二つ存在する。前祠には辨天・稻荷・義經公を祭つてゐる。義經の木像は一尺余で、戎衣を着け、鍬形龍頭の甲、緋緘金小札の鎧等、世聞に傳ふる所と異つてゐない後の一祠がある。義經社と言ふ扁額をかけてゐるが、公の木像社ももとは此祠に祭つてゐたのであらう。それを後に、人の來り拜せん爲に、前祠に移したものと思はれる。

（協和私役）

尙、明治になつては和田綱紀氏の意見を以て、最もすぐれたものと觀ずる。

◇寛政十年、德川幕府の勘定吟味役近藤重藏、始めて蝦夷地に入り、**サル**を過ぎる時、酋長が刀劍甲冑を秘藏し、且つ産土神を崇敬する狀を看取するや、土人に、

「汝等が崇敬する所の者は源義經公であらう。此頃予がこゝに來る時は、必らず其義經公の神像を授けてやらう」と告げた。こゝに於いて土人達は其委細をよくは知らなかつたが大に悅服した。重藏は江戸に歸り、木匠に命じて義經の甲冑を被る木像を彫刻せしめ、再航するや之を彼等に與へ、以て此地に祀らしめたのである。實にこれは蝦夷固有の神祠でない事は明白である。（拓殖大觀）

以上によつても義經神社なるものゝ神体は江戸佛師の手になり、其社とても近藤重藏の肝入で建立された事動かすべからざるものであるが、德川中期にあつては蝦夷地に義經の傳說があり、それと共に義經の祭祠がある樣な噂さへあつたので、幕府もこれを松前家に聽正したほどであつた。これに對して正德五年の松前家の返答は、

◇義經の舊跡を申すものはありません。惣じて蝦夷人は義經を判官と申し殊の外に敬つて、昔語にもし、又くわさきをば義經の甲の鍬形などとも言ひ習はしてゐます。凡そ蝦夷地には此方の辨天堂、阿彌陀堂、三四ヶ所ありますが蝦夷人には神佛の堂宇といふものがありません。唯くわさきを神とも佛とも敬つてゐます。（蝦夷島物語）

とあつて義經の社は勿論蝦夷人の手になつた神佛の堂宇はないと力說してゐる。又板倉源次郎も

◇ある筆記に東蝦夷**クル**と言ふ所に義經の社があつて、今でも絶へず祭つてゐるとか。或ひは此處の蝦夷は、他村の蝦夷も崇敬する**シヤムシヤン**の時の勇者、**ヲニヒシ**則**クル**の蝦夷であるなどと言つてゐる。ししかし此事は松前中で知つてゐるものがない。**ヲニヒシ**が出所は**サルヒ**と言ふ所だ。そこの山中に岩崖があつて昔仙人が住んだ址だとの事であるけれども、義經の社といふものは無いとの話だ。（北海隨筆）

と述べてゐる、尙、蝦夷人に祠を建てゝ神を祭る風習がない事については、

◇神社といふものはないが、神靈はある。則ち彼等は神をば**カムイ**と唱へ、神を敬ひ、山神海神へ火を焚き、其火に向つて祈る。（北蝦夷風土草稿）

◇神として祭るといふ事は心の上の事で**イナオ**といふものを捧げ、崇敬する事はあるが、祠を造つて、かたしらを置くといふ事は蝦夷人には無い。（渡島筆記）

と斷じてゐる位である。これらの點よりしても、たとへ義經の社があるといふ樣な事は單なる流言蜚語に過ぎずして、實際においては其痕蹟さへ所在しなかつたのである。而してかゝる風評が起つた主因は先づ義經を**オキクルミ**に、**シヤマイクル**を辨慶に附會した事より次に**オキクルミ**の傳說が日高方面に多かつた。しかもそうした地に和人が出稼を行つた結果として、義經祠があるかの如

くわが出稼人の口から傳はつたのである。則ち實際に於いてこの地には**オキクルミ**の傳說が古來より流布されてゐた。そこへ和人によつて『御曹司島渡り』といふ淨瑠璃が**アイヌ**人達の耳に傳はりいつの間にか、歷史的觀念のない無責任で低級な和人達が、**アイヌ**の神たる**オキクルミ**と義經とごつちやにして、お人好しの**アイヌ**にふきこんだらしい。爲に**オキクルミ**の遺跡が殆んど義經のものゝ如くにされてしまつてゐる。故に遠山金四郎が記した。

◇原野中に、往々小さい鳥居の形が建つてゐるのが見られる。これを土人に問ふと、判官を祀つたものだといふ。（未增有記）

が如きは、いづれも**オキクルミ**の傳說地と思つてよい。又**ハイ**川の上流にある**ハイヒラ**について見るに、

◇**ハイエヌサウシ**

昔義經は此山上で**ハイ**といふ魚の鼻尖を立てゝ、住居を構へた所である。

（近藤巡夷錄・東蝦夷夜話）

◇蝦夷人義經の事を**オキクルミ**と言ひ、辨慶をばその儘にて唱へてゐる。義經は昔此國の**ハイ**と言ふ所へ渡り、蝦夷の大將分の娘と契つて、蝦夷が秘藏の卷物を取つたといふことである。

此れを蝦夷人の中で悧口な者共は日本の淨瑠璃の樣に語り傳へてゐる。義經をば殊の外に尊び其城跡へは足踏もしない。その城の石垣は**シリカリ**と言ふ魚の嘴で築立てゝゐて、その嘴の長さは八九尺で鐵の樣に堅く、數百年たつてゐる。（蝦夷記・北蝦夷風土草稿）

等ともつともらしく傳へてゐるがこれとても、地名や**オキクルミ**傳說とから揑造したもので、和人の目に義經の城塞の樣に見ゐたのは、**アイヌ**の**チヤン**（砦）である。

義經事跡

以上の外に義經主從の遺跡と稱するものは北海道は勿論樺太にまで在る。それと共に又怪しげな因緣づきの彼等の遺品も存するのである。それ等に對する眞僞は別として、これ程に喧傳される義經は天下の幸福者であるとは誰れしも感ずるところであらう。

いでや其等の遺跡を先づ紙數の許す限り、巡禮して見やう。然しそれらに對し隨喜の涙を流さうと、嘲笑の唇を飛へさうと、それは諸氏の意の儘に委せる。

渡島國

檜山郡

義經事跡

◇江差の鷗島――義經が六韜三略の卷を隱した岩窟がある。又龍馬の蹄石と言ふのもある。（蝦夷葉邦志）

◇鷗島に馬岩といふ白い岩がある。これは昔義經が**アイヌ**達に追はれ白馬に鞭打つて逃げ、その白馬をこの岩につないでをつた。所が此馬は飢寒のため死んだが、後化石してしまつたものである。今もその岩だけ白くて馬の形に類似してゐる。（西澤清吉輯）

右に依れば龍馬はどこかに行き、白馬は死んでゐるが、龍馬山觀世音菩薩緣記によると、觀世音より授けらた龍馬は今以て蝦夷地に存命して居るとかとすましこんで述べてゐる。

後志國

壽都郡

◇辨慶の粟畑（蝦夷葉那志）

積丹郡

◇神威岬――昔義經蝦夷漂泊の時、この津で難風にあひ、大いに困り、着てゐた烏帽子を脫いで此岩に投かけた。所がやつと難風をのがれた。故に此崎を横切る舟は酒や洗米や畫馬等を海中になげて海上の無事を祈る。（北藩風土記）

石狩國

濱益郡

◇一說には**アママシユケ**で、『**アマ**』は穀物『**シユケ**』は炊くと言ふ義である。昔判官が此處で飯を炊いたといふ。又近所に**マラブトフンナイ**と言ふ處がある。譯して振舞餐應の事である。昔義經へ此地の土人が海獺を捕へへて奉つたところであると。（西蝦夷日誌）

◇濱ましけと言ふ所に源義經之御像、常陸坊海尊の長刀があつて、社に納められてゐる。蝦夷人共は蝦夷の神樣と唱へて崇拜した。（津輕見聞記）

◇**タイルベシベ**――昔義經が住居せし所で、其時甲冑を置れたが、今は化して蝮蛇と成てしまつた。（西蝦夷日記）

◇**カムイヲプトイ**――昔義經舟行して此地に著き山を越へ增毛に行つた。（北海道志）

天鹽國

增毛郡

◇雄冬――こゝに大强の**メノコ**がゐて、常に魔術をして空中に上つて法を行ふ事がある。この**メノコ**が上川郡で沙流の土人と爭つた時、丁度折よく義經が來て、辨慶に命じてかの**メノ**

コを投倒さした。それより義經はメノコの養子となり、遂にメノコ秘藏の卷物を取上げられしによつて、メノコの魔術も消へてしまつた。偖淨瑠璃を聞く時には、土人等は謹み、辨慶がかのメノコを投げる場に來ると土人達は皆平伏する。（上川見聞談）

◇カメツボシ岬――濱益と雄冬泊の間にある。昔辨慶が住居した所である。（蝦夷舊聞・蝦夷風俗彙纂後篇）

北見國

斜里郡

◇遠彌別――この南、オルヌシの間に幕遂と呼ぶ大岩がある。疊の形をしてゐる。こゝは昔義經が幕を張つた所である。（知床日誌）

◇雄冬嶽――この麓岬端に近い海岸に蝮蛇の如き岩がある。土人はカモイエバといふ。爰に昔、辨慶の妹が住んでゐた。所が或時大蛇が彼女を呑まんとして來たので、辨慶怒つて大蛇を踏潰すと、不思議や、大蛇直ちに化して此の如き大岩に化したと。（知床日誌）

◇キヤルマイ（石門）――右大岩の附近にある。こゝは昔辨慶が大蛇に追はれて逃げ來り、此穴から覗いて見てゐた。（知床日誌）

こゝでは大蛇を踏み殺す如き辨慶が、かへつて卑怯にも逃げかくれてゐるではないか。矛盾も甚だしい。

◇知床岳――又はヲフイ岳とも言ふ。義經が此の上で軍勢を集める時に烽火をあげた。（知床日誌）

◇ホロムイのイフニフ（串多）――昔義經魚を串に刺して燒き、其殘りを捨て置かれたが後その串は化石した。（知床日誌）

膽振國

勇拂郡

◇アツマ――此地の酋長の家に滯留し彼等を伴ひて西地に赴いた。（蝦夷葉那志）

日高國

沙流郡

◇鵡川のキロロイ――此山に義經が魚を釣り幣を立てた所がある。（東蝦夷夜話）

新冠郡

◇新冠――會所元より九折を廻ると峠に出る。これは判官館と言ふ。（東蝦夷日誌）

十勝國

上川郡

◇狩勝――義經と辨慶とが、今の國境まで來て、石に腰をおろして、茫漠たる十勝の大平原を眺め「好い國だなあ」といつたことがあつた。（アイヌ民話）

中川郡

◇本別――こゝに源氏山といふのがあるが、そこへも義經が來たのではあるまいかとの一說がある。（アイヌ民話）

河西郡

◇鵡拔――原名**ムエネフ**平といふ處があつた。昔辨が此地へ來るや、海嘯の跡とて鯨の方腹が此高臺に漂着してあつたので、**アイヌ**達と共に之を串にさして燒いた。するとその火が爆發したので、辨慶尻餅をついてぴつくりした。その反動で丘陵が窪んでしまつた。（アイヌ民話）

廣尾郡

◇**アヨボシユマ**（小川小休所）當緣と曆丹との間にある。昔判官が射つた矢が留つた所より名が出た。（十勝日誌）

釧路國

釧路郡

◇柱戀――北海岸に暗礁が多い。その中に築垣の樣に遙か沖の方へ二條さし出たのがあつて干潮の時には現はれる。土人の話によると義經が此地に住まはれてゐた時、十勝の岬をさして橋を架け樣となさつた。其時の株の跡であるといふ。（東蝦夷夜話）

上川郡

◇**サパネクルフト**岩穴――今の**アイヌ**は辨慶の庫だといふてゐる。此は和人の說を誤聞して**サパネクル**を和語で譯せば辨慶と言ふ辭になると思ふが故である。**サパネクル**は酋長の義。（北海道蝦夷語地名解）

千島國

國後

◇乳苅別――山上に長さ二三尺の方石があるその上に井幹を組んだものが約六七個ある。夷人の說では、これらは昔義經が置かれた甲冑が化して石となつたものであると。（東蝦夷夜話）

樺太

◇白主――尾崎は絶壁屹立して、自然と城砦の樣である。土人は判官義經の築いた城跡だと言つてゐる。（北海紀行）

◇具伊の土壘――義經渡海の時築いたもので一丁余で四方に口があつて高さ凡そ一丈許の土居であつて時々土器の破方を出す。（再航蝦夷日誌）

これは實際**チャシコツ**で、明らかに石器時代の遺跡であるに拘らず、義經に附會したその空々しさには匙を投げるより他はない。

◇**クシユンコタン**――この南岸の西山下に義經と辨慶社と言ふものがある。而し何時頃誰れが建立したかは不明だ。（千島志料）

以上列記した他にも、義經の遺跡と傳へられてゐるものが幾多存してゐる。又特に甚しきものに到つては、松前城府居住の舊家に、九郎判官殿の證文が傳はつてゐる。其文には、

大豆五斗借用す時の柳營より辨ずべし

武藏守辨慶　承之

（北藩風土記）

と義經の借用證があることを告げてゐる。この樣に義經の渡道や、其遺跡や其遺品やを本當らしく傳へ大いに義經崇拜熱にうかされてゐるものがあるが、それと反對に憤然と色をなし義經を嫌惡する**アイヌ**もある。

◇此の話は元十勝の方に住んで居た人から、私がきいた**アイヌ**の傳說とも言ふべき物語りである。

此の人の宅へ良く遊びに來る**アイヌ**が居た。彼は自稱日高系であると言ひ、今も猶昔の流れた儘に、彼等の種族は十勝の國に住んでゐるのである。

一日、その**アイヌ**が此の人の宅へ遊びに來たが、彼はその家に入るなり、眼光亂々として血走り、怒髮天を衝くの勢ひで、家の一角を睨みその腕は極度の興奮に、わなわなと顫へ、その口は意味の取れぬ事を口走らさせてゐた。家人は不思議に思ひ嫌し宥めてその故を問へば、その障子に貼てある牛若丸の繪を見て怒りたるとの事家人は二度不思議、その理由を種々なる手段で尋ねたるに次の如き物語をした。

今を距る千年歷史の文を卷くに、賴朝幕府を鎌倉に開きたる頃である。北海道その頃の蝦夷は

日高、日高の國は二分してゐた。一方の酋長を**チヤチエー**と言ひ彼は四つの不可思議なる働きをなす寶物と彼の一人娘義麗なる**シヤツプ**を有してゐた。

或時酋長の宅へ一人の女の如き若者が訪れて來た。そして奉公を申込んだ、酋長は快く之を承諾した。若者は義經と言ひ酋長の四つの不思議な寶物を得んが爲の策であつたので忠實に働いてその在所を内偵した。がそれは容易のことではなかつた。

斯くして忠實に働き内偵を兼ねてゐた爲、酋長はその忠實さに魅せられ、その愛娘の聟として迎ゐるやうにした。**シヤツプ**も又之を承知したが義經は自己の心中に謀ることがあるので承諾に淀んだ。然し今の彼として此の道をとつた方が好手段であると考へ、遂に**シヤツプ**と華燭の典を擧げたのであつた。そして間もなく玉の如き男子を擧ぐるに至つたのである。

それでも寶の在所を探索する考へは頭の中を離れなかつた。今日も今日とて子を兩の腕に抱き、爐緣に坐つて、寶の在所を探すために苦心してゐた。丁度その折酋長は部落民視察の爲出掛けるので之を送り出した。彼は又寶の探索に沒頭するのであつたが、彼は急に腕に抱いた子を爐中に投込み引上げて、誤つて落した如くに見せかけたのであつた。そして彼の妻の泣き叫ぶを慰めてその火傷を癒す方法として**チヤチエー**家の一番大事な寶物を出す樣に命じた。命ぜ

られた妻は謀られるとも知らず、狂氣の如くになつて四箇の中三箇丈を持出したが、彼義經は隙を窺ひ三箇の寶を奪つて逃亡し、海濱に至り部落民の立騷ぐを尻目にし、帆に風うけて沖へ〳〵と出たのであつた。

急使は視察中の酋長の下に飛んだ。

酋長が濱邊に着した頃は彼の姿は今しも水平線に沒せんとしてゐたが、酋長は一度煽ると何物でも二千里後退すると言ふ扇が殘されてあつたのを使用したが、義經の方には一煽で一千里を進む扇あり、然れども一千里と二千里である故に義經の方は後退きみになつたが、まだ義經の方はに寶ありそは何であつたらうか。……

遂にその寶を以て酋長側を暗くし逃亡したのである。

故にその愛奴は言ふ「その時に義經が寶を持ち去りし爲め、遂に愚鈍となり、遂はれて十勝に移住するに至つたのである。故に義經を憎むものである」と。（原勝義輯）

私を以て見るにすべては人好きのする英雄である故に、とかく義經にかぶれたがる人が多いが爲めに生じたものと思ふ。而して義經を脚色した書物が流布するにつれ、種々の臆說が行はれ、追々

傳說的古跡が創設されるのは、逗子に波子不動、伊香保に不如歸、鹽原に金色夜叉等の遺跡が出來たのと、何等變る所がない。ましてや爲にせんとする賣僧達にかゝつた場合は、嘘でも本當らしく傳はつて行くものである。

義經渡滿と靜

最後に臨んで義經に關する二つの說話を述べて見やう。一つは義經渡滿についての經路である。これには大体二つの意見が立てられてゐる樣に見受けられる。則ち松浦武四郎氏の蝦夷葉那志では、島牧歌葉石狩より樺太を經て滿洲に入つた事になり、板倉源次郎氏の北海隨筆では、壽都附近の辨慶岬から高麗に渡りそれより北滿洲に行つた事になる。然るに義經が**カムサツカ**に到つたと言ふ說もある。

◇昔、源義經と辨慶の二將は、沙流の川上にある**ハイヒラ**といふ所に居て、枯木と鷲の嘴とを澤山集めて柵となし、又下鵡川**キロロ**井山中へ往來してをられたが、或時、**カニシチカツフ**と言ふ金色の羽をした鷲が通つたのを見て、二將は相共に此鷲を追ふて遂に**カムサツカ**の海口に到り給ふた。

（續蝦夷草紙）

此說に對して小谷部氏一流の判官贔負は、恐らく**カムサツカ**より北滿洲へ行つたのだと斷定せられるだらうが余を以て言はしむれば、明かに**オキクルミ**傳說が義經と混同されたと信ずる。

他の一つの說話は「義經千本櫻」や「芳野靜」等の義經劇の女主人公として、觀衆に哀愁を誘はないでは置かない靜御前の蝦夷入りである。彼女は不遇流離の義經の跡を追ひ、かよわい女の身を以つて奥羽に來て、今の鳴子の傍の龜割峠と言ふ所で一子を生み落した。

◇建治の頃、源廷尉義經が難を此地に避けた時、靜御前は龜割峠で龜若を生み、此湯を產湯として用ひた所が始めて赤子は聲を發した。それで此處を啼子と名づけ、後鳴子に改めたと。

（鳴子溫泉記）

此れより靜御前はなほも屈せず、恐らく一子を背ひ「賤や賤、賤のおだまき繰返し」でも、子守唄の代用にして、熊の住むてふ蝦夷ヶ島に渡られ、今の爾志郡乙部村姫川といふ所で病死した。

◇「吉野山花の白雪ふみ分けて入りにし人の跡ぞ戀しき」いつかは逢はん妹の背の——と靜御前の嘆いた如く、あはれ、昨日と變る今日の御姿、涙とゝもに奥州を落ち延びたまひしものゝ行先はたゞ白波の彼方なる、蝦夷が島根の外になき、九郎判官の御身の上こそ、哀れと言ふも愚かである。さぞや空ゆく雲のかなたなる、都の空を望まれ給へば、胸も張り裂く思ひに堪へなかつた

事であらう。かゝる程に、み跡を慕ひまつる靜の姫は、遙々と波路を越ゑて蝦夷地へ渡つたが、かよわき女の身の、遂に此の姫川のほとりで敢なく病に斃れた――之れが此川の名付けられた謂れであると口碑に殘つてゐる。

（江差と松前追分）

これには一子龜若の事が記されてゐない所を見ると靜御前はどつか里子にやつたか捨兒にしたものらしい。が兎に角、義經と共にその女主人公たる靜御前を拉し來り、一汐義經傳說を情緒纏綿たらしめ樣とした地名附會傳說創作者も仲々の小才子といはなければならない。

以上によつて大体義經と蝦夷に關する傳說を考究したつもりである。しかし私は決して義經傳說を潰滅させ樣といふのではない、とはいへ、義經入夷說が屢々史實であるかの樣に考へられ勝ちである爲に、少しく史學者めいた考證を加へ、史實と傳說とを辯じた迄である。義經は最も**ドラマチツク**な華やかな國民的英雄である限り、その肉体が死んだとしても、義經の靈は永遠にわが國民生活の上に生きて居り、それが或時は粉黛を施した傳說となつて現はれ、又或時は涙を誘ふ樣な劇を構成して行くのである。此一事は如何に嚴格な科學を以てしても、とうてい打消し難い事實であると共に、わが民族性のなす所でもあらうか。

實に義經はわが國民史上を涙で飾る英雄であるだけ、日本民族より尊敬追慕される點も多いといふわけである。

まことに恐懼の次第であるが、われらの　今上陛下が學習院初等科の初めに御在學の折、古來の人物で誰れが一番偉いかと教員が御尋ねした時に、「義經」とお答へになつたといふ。後になつてお側の者へのお話に「お祖父樣」（明治天皇）と答へやうと思つたがどうも變だつたから義經と言つたと仰せになつたと言ふ。これは志筑祥氏の謹話であるが、數多い英雄偉人の中で、畏くも陛下より明治天皇以外に第一に選ばれた義經は、光榮至極な男である。義經の靈よ、希くは、今上陛下の有難き御言葉によつて、安らかに地下に冥せよ。

傳說分布表

以上述べた蝦夷地に於ける和人の傳說の分布をば、讀者の便宜上、表として左に揭げる事にする。然し予は實地に踏査した事のない地方もあるので、杜撰の點は免れない。しかも此他予の未知のものがどの位存在するか判らない程であらうが、これは機會を俟つて讀者の示教を仰いで附記するつもりである。左表の中、上欄は現在の市町村名等で、中欄は傳說の略名で、下の數字はページ數を現はしたものである。

（五十音順）

石狩國濱益郡濱益村マラブトフンナイ	義經饗應場	百三十七
同　同　黃金山タイルベシベ	義經居趾	百三十七
膽振國勇拂郡厚眞村	義經遺蹟	百三十九
同　同　同	義經西上地	百三十九
同　白老郡白老村	義經傳說	百十五

同　有珠郡有珠村善光寺	臼如來	五十
同　同　同	智僧莊海	五十三
同　同　同	快僧鬱州	五十四
同　同　同	粉挽歌	五十五
渡島國上磯郡當別村	石器時代遺跡	百十
同　同　矢不來村	生天神	四十五
同　同　同	赤松傳說	七十五
同　龜田郡石崎村	日持遺蹟	六十三
同　同　妙應寺	經石碑	六十三
同　同　同	後生塚	六十六
同　同　宇宮の澤	脇澤山の鰐口	百〇七
同　同　大野村	大日社の鰐口	百〇八
同　同　小松村	岡部の鰐口	百〇七
同　同　錢龜澤村	黑石の題目	六十八
同　同　同	橡木樣	七十一

同	戸井村	岡部館 百〇六
同		古錢 百〇八
同	根法華村	日持の傳說 二十四
同		ホッケ魚 二十五
同	駒ケ嶽	相原の馬 八十九
同		義經遺跡 八十九
同	茅部郡森村石倉	鰊供養塔 三十七
同	爾志郡鮫柱村帆柱石	忠犬 九十九
同	熊石村	石器時代遺跡 百十一
同		雲石 二十五
同	松前郡	ヤマヒの神送り 百〇三
同	松前地方	オシラ神 四十一
同	松前江差地方	やらずの明神 四十
同	松前郡大澤村	山伏大聖院 三十九
同	白神岬	オシラ神祠 四十四

同	知内山	黑狐の祟 三十七
同	福山町	判官證文 百四十二
同	福山町	大松 十七
同	阿吽寺	義經の地藏 百二十三
同		燒松不動 五十八
同	藏町	鍛冶屋の犬 九十八
同	慈眼寺	道明巽風 五十九
同	矢越岬	邪鬼 百二十
同	函館市	思松 七十六
同		鬼人形 百
同	茶店政	貉の番頭 九十七
同	臺町高龍寺	貉の怪異 九十六
同	東川町善光寺	靈牛 八十三
同		ベコ節 八十五
同	船見町	大石の松 七十七・百二十三

同　同　義經腰掛松　百二十三
同　同　稱名寺　貞治の碑　百〇四
同　同　實行寺　狐憑小僧　九十三
同　同　同　裏山　夜泣石　七十九
同　同　藥師堂　枝藥師　七十六
同　同　元町　黑光稻荷　九十三
同　同　河野館址　二十二
同　同　船玉明神　義經遺蹟　百二十二
同　同　同　船魂の巨杉　七十七
同　同　同　波分不動　百二十二
同　同　谷地頭町　蝦夷館　二十三
同　同　コピトの碗　百十一
同　同　石器時代の遺跡　百十
同　同　函館八幡宮　辨慶足跡石　百二十三
同　檜山郡江差町　姥神　三十

同　同　於隣堂　三十二
同　同　龍馬の跡石　百三十六
同　同　大藏鮮　三十八
同　同　北村地藏堂　智醉禪師　六十一
樺太クシユンコタン　義經社　百四十二
同　具伊の土壘　義經城跡　百四十二
同　白主　義經城跡　百四十二
北見國斜里郡雄冬獄カモイエバ　蛇の化石　百三十八
同　同　キヤルマイ　辨慶と蛇　百三十八
同　斜里　狐の崇　九十二
同　知床岳　義經烽火塲　百三十九
同　遠彌別村　幕遂石　百三十八
同　ホロムイ　串の化石　百三十九
釧路國上川郡サバネクルフト岩穴　辨慶の庫　百四十一
同　釧路郡釧路町桂戀　義經架橋　百四十一

後志國磯谷郡雷電崎	辨慶刀掛岩	百二十六
同　積丹郡神威岬	義經烏帽子岩	百三十六
同　壽都郡辨慶岬	辨慶の相撲場	百二十五
同　同　同	辨慶粟畑	百三十六
同　同　同	辨慶甲石	百二十六
同　同　同	辨慶の足跡	百二十五
同　同　同	義經物見臺	百二十六
千島國國後郡國後乳苅別	義經の甲冑石	百四十一
天鹽國增毛郡雄冬	辨慶の怪力	百三十八
同　同　カメソボミ岬	辨慶住居趾	百三十八
十勝國上川郡狩勝	辨慶遺蹟	百四十
同　河西郡鵡拔村	辨慶尻餅岳	百四十
同　十勝郡大津村十勝	反義經アイヌ	百四十四
同　廣尾郡アヨボシユマ	判官の矢	百四十
爾志郡乙部村姫川	靜の死處	百四十七

日高國沙流郡平取村ハイヒラ	義經城跡	百三十四
同　同　同	義經社	百二十八
同　同　邊富内村キロロイ	義經と鷲	百四十六
同　同　同	義經奉幣地	百三十九
同　新冠郡新冠	判官館	百三十九
同　靜内郡靜内	女神漂着	八
陸奥國北津輕三厩	義經と龍馬	百十七
同　同　龍飛岬	義經鐙岩	百十九

參考文献

本書は北海道に於ける口碑傳說の跡を索ね、種々の古記錄を緯とし、函館師範學校生徒の蒐集した資料を經とし、之れに簡明な考證を加へたつもりである。而して坊間に傳ふる說話の區々なるものについては、出來る限り、その根據ある說を採錄しやうと計劃したが、時日が許さないので思ふにまかせなかつた。それで幾分それを補ふとの意から、左に本書引用の資料の主なるものを揭げ、識者の參考に供しやう。

アイヌの足跡　滿岡伸一著　（活版）　一冊　大正十三年刊　眞正堂發行

アイヌ　齋藤順三述　（活版）　一冊　明治廿五年　北友社
（北海道新聞附錄）

アイヌの研究　金田一京助著　（活版）　一冊　大正十四年刊　內外書房發行

アイヌ地名考　パチュラー著　北海道蝦夷語地名解附錄（大正十一年版）

アイヌ民話　工藤梅次郎著　（活版）　一冊　大正十五年　工藤書店發

アイヌの爐邊物語　パチュラー著　（活版）　一冊　大正十四年　富貴堂發行

夷諺俗話　串原正峰著　（寫本）　一冊　寛政四年作　函館圖書館所藏

夷酋列像附錄　松前廣長著　（寫本）　一冊　寛政三年　北海道廳所藏
（一名毛夷圖書國字附錄）

蝦夷日記拔書　山崎本立著　（寫本）　二冊　寛政末年　函館圖書館所藏
（一名華夷記）

蝦夷風俗圖會　（寫本）　一冊　函館圖書館所藏

蝦夷風俗彙編　開拓使編　（木版）　廿冊　明治十四年　函館師範學校所藏

蝦夷葉那志　松浦武四郎著　（木版）　一冊　安政三年　函館師範學校所藏

蝦夷地名解　（寫本）　一冊　函館圖書館所藏

蝦夷草紙　最上德內著　（寫本）　一冊　安永十年　函館師範學校所藏

蝦夷巡覽筆記　高橋寛光著　（寫本）　四冊　寛政九年　函館圖書館所藏
（一名松前東西地利）

蝦夷島物語　松前志摩守著　（寫本）　一冊　正德五年　函館圖書館所藏

蝦夷島奇觀　秦檍丸著　（寫本）　二冊　函館圖書館所藏

蝦夷實地檢考錄　市川十郎著　（寫本）　五冊　安政年間　函館圖書館所藏

蝦夷寺號本末并年代調　（寫本）　一冊　函館圖書館所藏

蝦夷國夜話　（寫本）　二冊　函館圖書館所藏

蝦夷國私記　（寫本）　一冊　文政年間　函館師範學校所藏

蝦夷行記　板倉源次郎著　（活版）　一冊　明治廿五年刊　（少年日本文庫の内）
（北海道隨筆と同じ）

蝦夷記行及附圖　谷元旦著　（寫本）　一冊　寛政十一年　函館圖書館所藏
（一名蝦夷日誌）

蝦夷舊聞　鈴木善敎著　（寫本）　二冊　安政元年　北海道廳所藏

蝦夷記　（寫本）　一冊　寛永七年　北海道廳所藏
（一名蝦夷談話筆記）

蝦夷記　板倉源次郎著　（寫本）　一冊　元文四年　深瀨春一所藏
（北海隨筆と同一）

蝦夷廣覽　溫井亨著　（寫本）　一冊　享和年間　函館圖書館所藏

蝦夷風土記逸篇　關龔子敬著　（寫本）　一冊　寛政五年　函館圖書館所藏

蝦夷抄略記　（寫本）　二冊　函館圖書館所藏
（蝦夷記と同じ）

蝦夷亂記事　（寫本）　一冊　北海道廳所藏
（蝦夷談筆記と略同じ）

江差川竹駒吉編　（活版）　一冊　明治三十四年

江差と松前追分　森野小桃著　（活版）　一冊　明治四十三年

野作東部日記　（寫本）　一冊　熊木書店發行　北海道廳所藏

御曹司島渡り　（有朋堂文庫第二輯御伽草紙の内）　北海道廳所藏

上川見聞奇談　肥塚貴正編　（木版）　一冊　明治四年

鎌倉實記　加藤謙齋著　（木版）　十七卷　享保二年　帝國圖書館所藏

快風船涉海記事　里見甚五郎記　（寫本）　一冊　文政十一年　水戸侯爵家所藏

寛文五年堂社建立年代調　（寫本）　一冊　函館圖書館所藏

窮髮紀譚　（寫本）　一冊　北海道廳所藏

協和私役　窪田子藏著　（寫本）　五冊　安政三年　函館圖書館所藏

參考文献

北蝦夷風土草稿　本多利明著　（寫本）一冊　天明八年　函館圖書館所藏

古事記　太安麿撰　（活版）　國史大系本

古事記傳　本居宣長著　（活版）三冊　宣長全集本

甲子夜話　松浦清著　（活版）六冊　圖書刊行會本

近藤巡夷錄　（寫本）一冊　北海道廳所藏

舊五代史　（欽定二十四史の内）（刊本）六冊　乾隆版　深瀨春一所藏

新後漢書　（宋）范曄著　（刊本）四冊　乾隆本

再航蝦夷日誌　松浦武四郎著　（寫本）六冊　嘉永四年　北海道廳所藏

松風夷談　蠣崎廣時著　（寫本）一冊　函館圖書館所藏

新羅之記錄　松前景廣編　（寫本）一冊　正保三年　北海道廳所藏

澁田翁雜記　澁田利右衛門輯　（寫本）一冊　明治初年頃　函館圖書館所藏

新撰姓氏錄　藤原緒嗣等編　（活版）一冊　弘仁五年　群書類從本

知床日誌　松浦武四郎著　（木版）一冊　萬延元年　函館圖書館所藏

諏訪明神繪詞　近衛兼章等記　（活版）一冊　文明四年著　續群書類從本

前漢書　（後漢）班固著　（刊本）百卷　乾隆版　深瀨春一所藏

搜神記　（晉）干寶著　（活版）一冊　國譯漢文大成本

續日本紀　藤原繼繩等編　（活版）一冊　國史大系本

續蝦夷草紙　近藤重藏著　（寫本）四冊　文政元年　北海道廳所藏

千島志料　前田夏蔭等編　（寫本）二〇九冊　慶應元年　帝國圖書館所藏

成吉思汗は源義經也　小谷部全一郎著　（活版）一冊　大正十四年　富山房發行

津輕のしらべ　佐藤彌六著　（活版）一冊　明治卅二年　今泉書店發行

津輕見聞記　（寫本）一冊　寶曆八年　函館圖書館所藏

津輕一統志　（寫本）三冊　享保年間　北海道廳藏

天邊飛鴻　島田熊次郎著　（寫本）一冊　安政元年　函館圖書館所藏

蒐園小說　曲亭馬琴輯　（活版）一冊　百家說林本

東海參譚　東元著　（寫本）一冊　文化五年　函館圖書館所藏

東夷周覽　膝知文著　（寫本）一冊　享和元年　函館圖書館所藏

十勝日誌　松浦武四郎著　（木版）一冊　文久元年　函館師範學校所藏

參考文献

東遊記　立松東蒙著　（寫本）一册　天明四年　函館圖書館所藏

東遊雜記　古河古松軒著　（寫本）十册　天明八年　函館圖書館所藏

東北夷考　荒木田守良著　（寫本）二册　文政十三年　函館圖書館所藏

斗北山人物語　（寫本）一册　安政四年　函館圖書館所藏

鳴子温泉記　岡千仞撰　（活版）一册　帝國圖書館所藏

南總里見八犬傳　瀧澤馬琴著　（木版）百六卷　天保十五年完　帝國圖書館所藏

西蝦夷日誌　松浦武四郎著　（木版）六册　明治六年　函館圖書館所藏

日蓮上人眞實傳　（活版）一册　明治四十四年　日蓮宗全書の内

日持聖人海外遺跡記　柿花啓花著　（活版）一册　大正八年　二松堂發行

ハコダテ

函館沿革史　福岡竹次郎等編　（活版）一册　明治卅二年　旭堂發行

函館百珍　岡田健藏著　（活版）　明治四十三年　函館每日新聞所載

函館善光寺之由來　里村宜藏著　（木版）一册　明治三十二年　善光寺發行

函館山鷄冠石之由來　木村成明輯　（寫本）一册　明治四十二年　函館圖書館所藏

函館支廳管内名所舊跡調　函館支廳調　（活版）　明治四十四年　函館日々新聞所載

箱館夜話草　淡齋如水著　（寫本）一册　安政四年　函館圖書館所藏

箱館風俗書　蛯子七左衞門編　（寫本）一册　函館圖書館所藏

白石遺文　新井君美著　（活版）一册　（新井白石全集の内）

東蝦夷夜話　大内余庵著　（木版）一册　文久元年　函館師範學校所藏

東蝦夷日誌　松浦武四郎著　（木版）七册　文久三年　函館圖書館所藏

一目玉鉾（西鶴全集の内）　井原西鶴著　（活版）一册　明治四十年　平民書房發行

福山秘府　松前廣長著　（寫本）八册　安永九年　函館圖書館所藏

福山舊事記（一名松前舊事記）　（寫本）一册　函館圖書館所藏

風聞語　瀧澤馬琴輯　（寫本）一册　寛政元年　北大圖書館所藏

變態傳說史　藤澤衛彦著　（活版）一册　大正十五年　文藝資料研究會發行

北海道漁業史要　村尾元長著　（活版）一册　明治卅年　三松堂發行

北海道地名解　磯邊精一著　（活版）一册　大正七年　富貴堂發行

北海道名勝天然記念物調査報告　北海道廳編　（活版）一冊　大正拾二年　北海道廳發行

北海道寺院沿革誌　星野和太郎著　（活版）一冊　明治廿七年　時習館發行

北藩風土記　（寫本）一冊　北海道所藏

北海道史　北海道廳編　（活版）一冊　大正七年　北海道廳發行

北海道志　開拓使編　（活版）廿五冊　明治十七年　函館師範學校所藏

北海紀行　林顯三著　（木版）六冊　明治七年　函館師範學校所藏

北海隨筆（一名蝦夷松前島）　板倉源次郎著　（寫本）一冊　元文二年　深瀨春一所藏

北海道蝦夷語地名解　永田方正著　（活版）一冊　明治廿四年　深瀨春一所藏

匏庵遺稿　栗本鋤雲著　（活版）一冊　明治卅三年　裳華書房發行

本化別頭佛祖統記　釋白潮著　（活版）一冊　明治四十四年　（日蓮宗全集の內）

松前方言考　淡齋如水著　（寫本）九冊　嘉永元年　北海道廳所藏

松前年々記　（寫本）一冊　函館師範學校所藏

松前記行　平尾魯僊著　（寫本）一冊　文政二年　函館圖書館所藏

松前記行（一名陸奥紀行）　堀田正敦著　（寫本）一冊　文化四年　函館圖書館所藏

松前舊事記（一名福山舊事記）　（寫本）一冊　函館圖書館所藏

松前志　松前廣長著　（寫本）二冊　安永年間　函館圖書館所藏

松屋筆記　高田與清著　（活版）三冊　明治四十一年　國書刊行會本

未曾有記　遠山金四郎著　（寫本）二冊　文化年間　函館圖書館所藏

毛夷東環記　櫟齋山人著　（寫本）一冊　文化六年　函館圖書館所藏

矢不來天滿宮本殿奉納帳　（寫本）一冊　元治元年　函館圖書館所藏

友恭君蝦夷記行　（寫本）一冊　文久四年　函館圖書館所藏

義經記標注　馬場信意著　（木版）十二卷　函館圖書館所藏

義經記　（木版）八卷　元祿十年　函館圖書館所藏

六瑞廿二號　松野顯佑　（活版）一冊　明治四十年　六瑞新報社

龍馬山觀世音菩薩緣記　僧如現編　（寫本）一冊　延寶元年　函館圖書館所藏

參考文獻

和訓栞　谷川士清編（活版）　三冊　明治十六年　帝國圖館書所藏

渡島筆記　幕吏某著（寫本）　一冊　文化五年　北海道廳所藏

〔以上〕

昭和十一年二月二十五日印刷
昭和十一年三月五日發行

蝦夷地に於ける和人傳說攷奥付

定價　上製　金壹圓五拾錢
並製　金壹圓

著者　函館市青柳町三十番地　深瀨春一

發行者　函館市會所町四十三番地　樋口誠三

印刷者　函館市會所町四十三番地　樋口誠三

印刷所　函館市會所町四十三番地　間瀨印刷所

發行所　函館市會所町四十三番地　電話一一三二番　間瀨印刷所出版部

昭和十一年二月十二日津輕要塞司令部許可濟

版權所有

函館市會所町　間瀨印刷所印刷

印刷全般
出版業

間瀬印刷所

函館市會所町
電話一一三二番